ISSN 0533-0181

福井工業高等専門学校

研　究　紀　要

人文・社会科学

第 51 号

RESEARCH REPORTS OF NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY,
FUKUI COLLEGE
THE HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCE NO.51

DECEMBER 2017

目　　次

国語科古文教育の積極的意義再論
―その先に「つながる」古典・漢文の可能性― …… 中　村　吉　秀 …… 1

海軍省調査課と南方政務部 …… 手　嶋　泰　伸 …… 9

英語プレゼンテーションによる英語の４技能に対する改善効果について …… 森　　貞 …… 19

『ダウントン・アビー』考察（Ⅱ） …… 原　口　　治 …… 47

多言語環境で働く技術者の英語力に関するニーズ分析 …… 宮　本　友　紀
藤　田　卓　郎 …… 55

『いはでしのぶ』論　　―「昔」を懐古する一品宮 …… 伊　勢　　光 …… 80

＊下線は投稿者

CONTENTS

Reexamination about The Positive Significance of Ancient Writings Education in National Language Classes
－ Possibility of Classical Language Reading and Chinese Classics "to Develop" in Future Education － …… NAKAMURA Yoshihide …… 1

The Navy Research Division and the Southern Political Affairs Department …… Yasunobu TESHIMA …… 9

The Effect of Oral Presentation on EFL Learners' Improvement of English Four Skills…… Sadashi MORI…… 19

On *Downton Abbey* (II) …… Osamu HARAGUCHI …… 47

A Needs Analysis of the Required Command of English for Engineers in Multilingual Workplaces …… Yuki MIYAMOTO
Takuro FUJITA…… 55

Essay about "Ihadeshinobu"
——The Archduchess who looks back upon the past…… Hikaru ISE …… 80

＊ The name of an underline means a contributor.

国語科古文教育の積極的意義再論
― その先に「つながる」古典・漢文の可能性 ―

中　村　吉　秀*

Reexamination about The Positive Significance of Ancient Writings Education in National Language Classes
― Possibility of Classical Language Reading and Chinese Classics “to Develop” in Future Education ―

NAKAMURA Yoshihide

In national language classes in national institute of technology colleges, ancient writings are often included as the learning contents, simply because they are general liberal arts included as the learning contents of senior high schools' national language classes. There is also the idea that the era in which the classical language is written regarded as “intercultural”, and that they should be taught in the national language department of national institute of technology colleges as part of cross-cultural understanding. However, the author adopt the idea that classical language reading are also possible to treat as reading comprehension to lead to composition as well as modern languages reading, and to make it part of literacy education. This idea should be positively launched. Based on the above viewpoint, he considers the significance of ancient writings education in national institute of technology colleges.

Keywords：Ancient Writing, Chinese Classics, National Language Education, Literacy, Manufacturing Education

1．問題の所在

国語科の教科内容には、いわゆる古典･漢文が含まれる。古典・漢文は、小学校・中学校の国語科にも多少は盛り込まれているが、本格的に、言い換えれば、その文法・表現を含めて深く掘り下げたかたちで学習するのは、当然高等学校ということになる。高等専門学校(以下「高専」とする)の国語科も、特に低学年の大筋は高等学校のものに準じているので、自然に古典・漢文も授業でとり上げることになる。

ただ、高専生に古典・漢文を学ばせる意義について、とりたてて検討されることは少ない。その意義は、高等学校における意義と共通する部分もあろうが、いわゆるものづくり教育を行う高専における、独自の意義があってよいし、むしろ独自の意義があってこそ、高専生の学習意欲や達成感を刺戟する授業が、より成立しやすいはずである。

宇佐美寛氏は、述べている。

> （1）大学教育の中心は専門教育であり、教育課程の他領域はそのための準備教育である。専門教育の狭さは、専門教育自体の中で感じられることによって、教授・学習の領域が外に拡げられるという、内からの動きによって克服されるべきものである。専門教育以前に、専門教育以外に、専門教育との関係が不明確なままに「一般教育」を行うから、無目的な、たるんだ教育になるのである。

*一般科目教室（人文社会科学系）

（中略）

前述のように基礎学力の低下している低学年次の学生に、専門教育の視点抜きで問題意識を持たせるのは無理である。早くから「自分の学びたい専門にとって、この学習内容は何を意味するのか。」という専門中心の意識構造があるからこそ、他領域の学習は意味を帯びるのである。

（『大学の授業』宇佐美寛 1999 東信堂 161・214 頁。214 頁は引用文書「意見」より。傍点原文）

（1）は高等教育における一般教育の役割を的確に言いあらわしている。ただし、大学教育について述べているので、このまま高専教育に当てはめることはできない。高専の一般教育は、高等学校の学習内容をカバーする役割をも担っているからである。

しかし、高専において国語に割き得る時間数が、高等学校普通科に比して格段に少なく、高等学校の教科内容の全てを扱いきれないのも、また事実である。そうであれば、高専の国語は、高専の専門教育等につながる内容または観点に絞ることを考えるべきである。古典・漢文についてもそれは同じである《註 1》。

以上の問題意識に基づき、筆者（中村）は、これまでにも高専の教研集会等で、高専国語科のあり方について提言してきた（『文部科学省主催平成 14 年度高等専門学校教育教員研究集会講演　資料集』所収の発表資料「ものづくり教育の一端を担う国語科教育の方途」など）。また、それを元にして、本紀要においても、論文「ものづくり教育の一環としての国語科指導過程」（第 36 号 2002）を発表している。

しかし、それらは不特定多数の読者の目に触れるかたちでは公開されていなかったり、その後高専ないし国語科をとりまく諸状況も変化して不十分な内容になっていたりする。殊に、古典・漢文の取扱いについて、憂慮するべき傾向が現れてきてもいる。そこで、本論文では、改めて高専国語科における古典・漢文の学習意義に絞るかたちで、考察と提案を試みることとする。

なお、用語についてであるが、一般に教科内容（領域）もしくは教科名としての〈古典〉と〈古文〉とは曖昧かつ恣意的に使い分けないし混用されているようである。本論文においては、〈現代文〉と対立する概念として〈古文〉を措定し、〈古文〉の中に、日本の古典語で記された文章を主に扱う〈古典〉、中国語の文章を日本古典語として訓読した（いわゆる訓点語の）文章を主に扱う〈漢文〉の両領域がある、と見なすことにする。かくして、本論文の主眼は、「国語科古文教育の意義」の考察、ということになる。

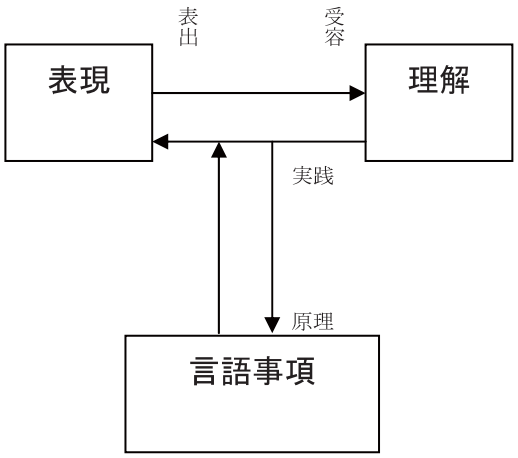
2．表現につなげる読解

1．国語科の「領域」間のあるべき関係

文部科学省のサイトに公開されている現行の『高等学校学習指導要領』において、教科「国語」のなかでその基礎をなす科目である「国語総合」の「内容」には、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の三領域が立てられ、これに加えて「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」が付加されている。

当然、古文はこの付加事項に属することになる。しかし筆者は、このように古文を本来の〈内容〉である各領域から独立させて付加することには賛同しかねる。

前々回の学習指導要領改訂（平成 11 年）までは、「国語」の領域は「理解」「表現」の二本立てであった。それに「言語事項」が付加されていた。これを踏まえ、筆者は前掲の発表資料および論文において、【図表 1】のような模式図で、あるべき二領域一事項の関連を示した。



【図表 1】国語科二領域一事項の関連図

本来、「理解」を理解のままで終わらせるべきではない。「理解」は「表現」に結びつくものであるべきであり、そ

の原理的な媒ちを果たすのが「言語事項」である。

すなわち、読解指導では、文章表現の工夫や手法を学び、表現指導においてはそれらの工夫や手法を活用しつつ自分でも書いてみる。書いてみることによって、さらに読解の観点を多様にもつことができる。この相互作用によってことばの力をつけていくべきなのである。そうして会得した工夫や手法が、新たな「言語事項」として蓄積されてゆく。

このように述べると、やはりこの図式から古文は外れてしまう、という印象を与えてしまうかもしれない。たしかに、古文には「古作文」や「漢作文」といったものが考えられない以上、一見「表現」につながり得ないようでもある《註２》。

しかし、表現の原理を学ぶための読解、表現の原理をもとに深まり得る読解は、現代文に限らない。現代日本語と古典語・訓点語との間に差異が目立つのは、ほぼ〈叙述〉レベルに属する語彙や文法においてである。〈文脈〉〈結構〉〈主題〉のレベルでは、本質的な差異があるわけではない。【図表１】の構造から古文を排除する必要はないのである。

その意味で、平成 11 年より前の学習指導要領の方が、現行の指導要領よりも「理解」領域に古文も包含されているという点で（筆者のような見解に基づいた結果ではないにしても）、すぐれていると言える。

もっとも、古文を別立てにした現行の指導要領においても、「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」の（１）に、「「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」及び「Ｃ 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する」（傍点中村）とし、「次の事項」を列挙するなかの一つに「ア　伝統的な言語文化に関する事項」を掲げている。つまり、古文教育も、三領域と関連づけながら施す、という考え方であり、古文を全く独立させたわけではない。

２．高専モデルコアカリキュラムにおける古文の離隔的な扱い

一方、高専においては、最新（平成 28 年 11 月 25 日版）のモデルコアカリキュラムで「国語分野」を参照すると、「内容の取扱い」に（２）の文言がある。

> （２）・到達目標は、コアを示したものであり、それ以外の学習内容（例えば、古典）を授業で取扱うことは差し支えない。

そして、主たる「学習内容」「到達目標」の表とは別立てで「古典」を「学習内容」とした表が付加されている。もちろん、この離隔的な古文の扱いは、現行の高等学校学習要領を模倣したものであろう（後述の「改訂方針」を記した文書にある記述からもそれが窺える）。この表の説明として（３）が記されている。

> （３）・モデルコアカリキュラムの到達目標において、学習内容「古典」は対象としていない。しかしながら、高等学校生徒が取り組んでいることに鑑み、多くの高専でも取り組むことが想定される。高等専門学校において「古典」の授業を行うこととした場合に、「国語」の授業科目のみの到達目標となり得るものを、特別に次に示す。

表自体では、その「「国語」の授業科目のみの到達目標」を（４）のように規定する。

> （４）古典について、日本の言語文化における価値を説明できる。

これらの引用からは、単に、高等学校の指導内容に含まれるから高専でも教える、という以上の思想を読み取ることはできない。まして、古文の読解を表現に、さらには専門教育などへとつなげていこう、という能動的な発想もない。もちろん、高専独自の古文の扱い方なども、全く想定されていない。

文書「モデルコアカリキュラム「国語分野」の改訂方針について」（平成 28 年 11 月 25 日付）に言う。

> （５）古典については、コアの分量の観点、また、「書くこと」「話すこと」の能力育成を重視する観点から今回はコアに含めなかった。ただし、現代の文章を「書くこと」「話すこと」や言語文化につながるものとして故事成語に関する項目を設けた。

古文に関するネガティブかつ偏った捉え方が（5）にはみてとれる。「「書くこと」「話すこと」の能力育成を重視する観点から」古文をコアから除くのは、既に述べた筆者の論旨からいうと、全く不適切である。

この意味で、高専のモデルコアカリキュラムは、古文教育に関して言えば、現行の高等学校学習指導要領よりもさらに後退した、極めて消極的な姿勢をとっていることになる。筆者は、この姿勢に対しては、批判的な立場を強くとらざるを得ない。

3．表現につながる古文教材の可能性

筆者は、「描写」（およびその対義語としての「説明」）を読解と表現とをつなぐ際の重要な概念と見なして考察を重ねてきた（前掲論文の他、論文「高等学校国語表現における「描写」の指導」などを参照いただきたい）。この「描写」もまた、現代語と古典語とで共通する性質をもっている。表現につながる読解指導が古文でも可能である所以である。

例えば、1年生では古文の入門教材として、『竹取物語』が教科書にしばしば採られている。（6）に冒頭部分を例示する。

（6）①今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。②野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。③名をば、さぬきの造となむいひける。④その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。⑤怪しがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。⑥それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

⑦翁言ふやう、「⑧われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。⑨子になりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。⑩妻の嫗に預けてやしなはす。⑪うつくしきこと限りなし。⑫いと幼ければ、籠にいれてやしなふ。

（本文は『精選　国語総合　新訂版』2016 北原保雄　他編　大修館書店による。文番号は便宜上中村が付した）

ほとんど「描写」によって展開している。「説明」を省くことで、少々不自然な展開（例えば、文⑧・⑨のような強引な理由づけで「三寸ばかりなる人」を家に連れて帰る、といった点）にも気を留めさせず、読者にストーリーを追わせてゆく。文まるごと「説明」なのは、文⑪の一文のみで、これは文⑥で述べたことの繰り返しである。わざわざ重ねて「説明」しているのは、「三寸ばかりなる人」の可愛らしさと神々しさとがこの話のキーポイントであるからである。「三寸ばかりなる人」のイメージが確かに結ばれてこそ、「竹取の翁」に対する読者の感情移入は深くなり、読者は作品世界へより引き込まれてゆくことになる。

この例のように、『竹取物語』には、読者を作品世界に取り込む戦略が豊富に盛り込まれている。簡にして要を得た「描写」は、読者を引き込む力をもっているのである。（6）は僅か約二百四十字で成っているし、かぐや姫が大人になって男たちを惑わせるに至るまでも、僅か約四百三十字である。古典語の「描写」は特に簡潔な表現がとられていることが多い。

こうした手法は現代語の文章を表現する際にも活かすことができる。文章で事実を記述的に報告する際には「描写」することになるからである。例えば実験レポートなどで、実験の経過を具に報告する部分には、「描写」の手法が活かされることになる。古典語文章の、簡潔でありながらイメージ喚起力の大きい「描写」には、大いに学ぶことができる。

同様に、『枕草子』は、随想の文章を書くにあたって佳き手本となり得る。（7）に第一段冒頭を引く。

（7）①春はあけぼの。②やうやうしろくなりゆく、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

③夏は夜。④月のころはさらなり。⑤やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。⑥また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。⑦雨など降るもをかし。

（出典等は（6）に同じ）

文①で、清少納言独自の見方・とらえ方が、ごく単純な文型の「説明」で大胆に提示される。一般的に、春の趣きを象徴する、と考えられる桜の花などではなく、「あけぼの」がよい、と言う。現代以上に平安の読者は驚いたと推測されるが、少納言は、文②の色彩感豊かな「描写」で、読者に自分のとらえ方を感得させてゆく。文③でもユニー

クなとらえ方をまず投げ出しておく。文④で一転、常識的な美意識を一応認めてみせて譲歩することで読者の興味をつなぎ止めたうえ、文⑤・⑥で細かい「描写」を重ね、独自の世界を築きあげてゆく。

こういう文脈構成は、現代語の随想にも十分適用できるものである。そればかりか、問題提起→先学の検討と反対論への譲歩→持論の論証→結論　と流れる論理的文章の結構の原形さえも見いだすことができる。

ここでは教材文章の例示はしないが、論理的文章、殊に論説・評論について言えば、孔子や孟子に代表される学問的な訓点語文章における、適切な具体例を挙げて説明する手法が、現代文にも活かせることは、論を俟たないであろう。

つまり、現代語の実用的な文章の表現法を、古文教材を題材にして学ぶことはじゅうぶん可能であることになる。それどころか、叙述が簡潔な分、文章全体を見わたしながら文脈や結構を分析できる古典語・訓点語の文章の方が、表現法を学ぶのに現代語の文章よりも好適な面もあるほどである。

4．諸高専国語授業での古文の扱い

遺憾ながら、古文読解から表現につなげるべく、古文と現代文の授業を並行させ、関連づけて指導過程を展開しているような例は、筆者自身の授業以外には、例が乏しいようである。

全国の国立高専のうち、シラバスの参照が可能な 46 校について、国語関連科目を精査してみると、そもそも古文を扱う科目ないし授業時間を独立させてしまっている国立高専が５校あるのをはじめ、現代文と同じ科目・授業のなかで指導していても、前述のように、古文と現代文とを時期的に交替させている高専が大半である。つまり、数回現代文の単元を続けた後、古文の単元が数回入る、ということを繰り返す指導過程になっており、内容的にも関連は考えられていない。

古文と現代文とを、並行して展開しているのは、僅か６校（本校を含む）に過ぎない。それも、時期的に並行しているだけで、内容の関連づけは考慮されていないと思われるケースが多い《註３》。

ただし、そのなかにあって、特筆ないし注目するべき例も散見する。

例えば、松江高専の「日本語１」・「日本語２」（いずれも１年生対象）両授業シラバスの「授業概要」のなかに（８）の文言がある。

> （８）作品の本文に触れ、現代語に繋がる言語文化を理解し、語彙力・表現力を高めることを目指す。

また、同高専の「日本語３」（２年生対象）の「授業概要」には、（９）の文言がある。

> （９）「漢文」の授業では、古い中国の文章（漢文）を読むことによって漢字や熟語（漢語）の成り立ちや漢文的言い回しを理解し、語彙力を高め簡潔な表現の参考とする。

さらに、弓削商船高専の「国語」（４年生対象）に単元「〈古典の表現に学ぶ〉『枕草子』に参加してみる」（２時）が立てられ、この単元の「行動達成目標」が、(10) のごとくなっている。

> (10) 現代に生きる古典の表現を活用することができる。

これらは、古文の文章機構を現代文に適用することを意識した貴重な指導例といえよう。しかし、先に述べたように、さらに体系的に古文読解と現代文表現とを結びつけることが、高専における今後の古文教育に必要とされているのではないか。

3．教科を超えてつながる古文

1．プログラミング的思考が宿る訓点の体系

昨年末、次期学習指導要領改訂案（小中学校）が発表された。予てから取り沙汰されていたとおり、小中学校にプログラミング教育が導入されることとなる。このことの是非についてはいまは措くとして、学校教育の趨勢であることは確かである。

これに関して、〈プログラミング的思考〉という概念が

提唱されている。全ての子どもがプログラマーになるわけではないにもかかわらず、義務教育にプログラミング教育を必須とする理由と考えてよいであろう。〈プログラミング思考〉の定義は、(11) のごとく示されている。

> (11) ○　そのためには、自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたらいいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力が必要になる。
>
> ○　こうした「プログラミング的思考」は、急速な技術革新の中でプログラミングや情報技術の在り方がどのように変化していっても、普遍的に求められる力であると考えられる。(後略)
>
> (「小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について（議論の取りまとめ)」文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/122/attach/1372525.htm による)

このような方針の元、〈プログラミング的思考〉が小中学校で醸成されると仮定すると、これを高専教育のなかで直接に引き継ぐのは、当然専門教育に位置づけられるプログラミング関係の科目である。しかし、〈プログラミング的思考〉の精神は、あらゆる教科に反映されるべきであろう。国語の学習内容のなかで、この精神が最もよく現れるのは、漢文の訓点である。

漢文の読解について、一般的な国語教育においては、訓点を用いた訓読は、不馴れな初学者向けの方法にすぎない、という認識が示されることもしばしばである。白文で読み取ってこそ深い読解となる、という考え方である。それも正論と言えるのであるが、高専の国語では、そこまで漢文の読解に習熟させるだけの時間もなく、訓点を用いることが読解の定位とならざるを得ないであろう（高学年に配置される、発展学習的な選択科目の類は別である)。

そうであれば、むしろ訓点にこそ焦点を当てることで、高専らしい漢文の読解指導としていいのではないか。というのも、訓点は、翻訳法としても独自性のあるものであり、システムとしても優れているからである。

訓点は、送り仮名と返り点とから成っている。

送り仮名は通常、片仮名とくり返し記号の〈ゝ〉とが使用されるものであり、これは学生にも問題なく使い方が理解される。

返り点は通常、レ点・一二点・上下点等、および、決まった名称はないが熟語であることを示す縦棒（ハイフン）が使用される《註4》。これらの極めて単純で限られた種類の記号のみで、漢字を読む順序としておよそ考えられるケースを全て指示し得るのであり、このことがシステムとして秀逸だと言い得る所以である。

送り仮名と返り点を、中国語で書かれていた文面に書きいれることで、日本語として読むことが可能になる。これは世界的にも例の少ない翻訳法であろうし、まさに日本人らしい工夫のあり方とも言えよう。

筆者は訓点を学ぶ授業において、しばしば学生（殊に電子情報工学科の学生）に「訓点は、中国語を日本語にコンパイルするためのパーサーの働きをするものだ。つまり、訓点は世界最古のパーサーである」と述べている。興味づけを主な目的として述べているのであるが、あながち冗談でもない。

訓点の用法を学習するなかで、例えば「〈一〉や〈上〉は〈レ〉と複合するのに、〈二〉や〈下〉はなぜ複合しないのか」「縦棒の左側にはなぜ〈一〉や〈上〉はこないのか」「なぜいっそのこと、全ての漢字に〈一〉〈二〉〈三〉…と読む順序に番号を振ってしまわないのか」などの疑問が、しばしば学生から出てくる。

さまざまな返り方をする文にとり組ませるなかで、これらの答を学生自身に考えさせることは、訓点を記号体系として学ぶ〈プログラミング的思考〉の涵養になるはずである。併せて、古い時代からこういう優れたシステムを構築してきたわれわれの祖先の智恵について、誇りと敬意をもって意識させたいものである。

2．キャリア教育のきっかけとなる活用表の平仮名

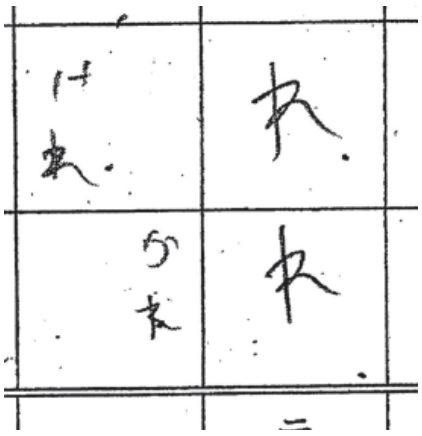
高専における日本語の表現法は、キャリア教育の一環としても機能することが期待されている。具体的には、履歴書や自己推薦書、志望理由書といった類の文書を書き整える力をつけることが必要である。この力に関する取りたて

指導は、国語科が担うこともしばしばである。専門学科が指導する場合でも、国語科の（特に低学年の）学習がこの指導につながることが望ましいであろう。

上記の文書は、現在でも手書きが主流であり、読み手に配慮し、よく伝わるような表記・文字で書く意識を学生にもたせなければならない。これを実際に書いて添削するような指導は、インターンシップを実施する４年生、就職活動にとり組む５年生、といった高学年でなされることが多いであろう。しかし、このような意識は、本来低学年の頃から育てるべきものである。

通常の文章では、文字の半数以上を平仮名が占めるのが普通であり、平仮名の書かれようが手書きの文章の印象を左右する度合いは意外に大きい。にもかかわらず、漢字の書き取りなどは、現代文のなかで行われることも多いが、高専において平仮名の指導までをとりたてて行う機会を得ることは難しい。

実際に学生の書く平仮名には、くせ字も多いのである。おそらく、小学校高学年や中学校でも平仮名にまでは手が回らず、くせ字が是正されないまま入学してきている学生も多いのであろう。



【図表２】学生が活用表テストに書いた平仮名の例

そのような実態を知り得るのは、古典文法の指導のなかで、用言や助動詞の活用表を書かせるからである。学生の書く平仮名をしげしげと見て採点したり批正したりする機会は、高専教育のなかでこの時をおいて他にないであろう。

学生が活用表のテストに記した平仮名の例を【図表２】に示す。これは特にひどい例を選んだわけではない。こういう平仮名を書く学生は無視できない割合で常にいる《註５》。

暗記したかどうかを問うテストであるから、時間内かつ記憶しているうちに、手早く書こうとした、という点は割引くべきであろう。しかし、試験時間には見なおしのための余裕時間を十二分にとっている。また試験の直前には、乱雑な字はその時間を使って書きなおすよう、好ましくない字の例を板書までして指示している。それでも、こういう字のまま提出する学生が少なくない。

教員側は正答を知ったうえで採点しているから、こんな字でもつい読み取って正答扱いとしてしまいがちである。相手に読みやすく書こう、自分にできる最善の答案を作ろう、という意識はこの字にはない。このような字のままで履歴書他を書かせることは適切でない。

社会的に通らない字に対しては、そのことを指摘して、学生の文字に対する意識を高めなければならない。少なくとも平仮名に関しては、古文教育は、その最後の機会といってもよい。

このように、古文教育は、キャリア教育のなかのコミュニケーション能力向上につながる、ごく基本的な部分を担える可能性もあるのである。

４．おわりに

高専における古文教育の意義については、なんとなく根本的な議論を避け、あるのが当たり前、という前提で指導案の提案や実践の報告などが重ねられているのが実情ではなかろうか。もっと理念を問う議論が必要なのではないか、というのは、ずっと持ってきた問題意識である。これを端的に問うた十数年前と、現在も議論の事情は大きく変わっていないばかりか、それがコアカリキュラムという形で（矛盾した言い方になるが）「曖昧なまま固定されて」いきつつあるように思う。

そこで再論ということになったわけであるが、筆者は古典文学や漢文学、あるいは日本語史といった、古文教育に直結する領域が研究者としての専門ではない。あくまで授業で古文教育にとり組んできた経験に基づいて述べている。古文に対して特段の関心があるわけではないが、教えてきた教科内容には一定の愛着もある。これを、積極的な

意義、すなわちやりがいを感じながら指導していきたい、と思っている。

古文の極意を知った専門の視座から論じていただければ、古文教育の意義についても、さらに新たな見解が得られることであろう。

この問題に関する議論が、ますます盛んに行われ、深まっていくことを期待している。

（了）

《註１》 もちろん、古文を全く指導内容から除外する、という選択肢もあり得る。国立高専ではほぼ全校で古文が指導内容に含まれているようであるが、私立高専には古文が除外されている例もある。

《註２》 読解力を深めたり文法に関する理解を定着させたりするための方便として、擬古文を戯れに作ってみる、というような限定的な扱いであればあり得るのであるが、それは実践的な表現力となるわけではなく、あくまで読解や言語事項の指導のバリエーションである。

《註３》 悉皆調査に至らなかったのは、現在国立高専機構のシラバスが、Web シラバスに移行する途上にあることにより、全国立高専の今年度開講全科目の詳細な内容が参照できないためである。過年度のシラバスのみ公開している高専に関しては、参照し得る最新のシラバスに基づくこととした。

《註４》 さらに長く複雑な返り方の文に対応するため、甲乙点・天地点など多くの種類の返り点が存在するが、高校生向けのテキスト類に採られている漢文教材については、上下点まででほぼ訓読することができる。

《註５》【図表２】で左側はク活用、右側はラ行変格活用の、それぞれ已然形と命令形の欄を拡大したものである。ク活用は「けれ」「かれ」、ラ行変格活用はいずれも「れ」と書いている。その先入見があれば読めてしまうが、そうでなければ判読は難しく、そもそも文字に見えるかどうかさえ怪しい。この〈れ〉のほか、形が崩れやすい平仮名として〈な〉〈ら〉〈る〉〈わ〉等が挙げられる。

海軍省調査課と南方政務部

手　嶋　泰　伸*

The Navy Research Division and the Southern Political Affairs Department

Yasunobu TESHIMA

This article clarifies a factor behind the failure of an early concept of the Southern Political Department in his investigation of the Navy Research Division and the brain trust of citizens organized by the division. The Japanese military administration over Southeast Asia transformed East and Southeast Asia on a large scale. That transformation was a result of the lack of leadership over military governments spread over a wide area. The Southern Political Affairs Department in Tokyo was unable not only to display its leadership over local military governments, but also to establish a policy for Southeast Asia. The Southern Political Affairs Department was formed with the Navy Research Division at its center, so the reasons why it was unable to exert a strong political influence is made clear through an analysis of the prestige and capabilities of the Navy Research Division. The Navy Research Division had no strong political influence and no leadership over the policymaking process of the administration of Southeast Asia in spite of its possession of a brain trust. This was because the Navy Research Division was unable to make the best use of the brain trust and the opinions of the brain trust were not always acceptable for the Navy. The Navy commissioned the brain trust to investigate South East Asia as a strategy in its ongoing rivalry against the Army, and so the survey lacked the vision to produce effective results

はじめに

アジア・太平洋戦争において、特に石油を中心とした東南アジアの重要物資を、円滑に内地で戦力化することが戦局の分かれ目であり、日本の勝利にとって重要であったことは、当時の国家首脳部の等しく認識するところであった。そして、石油をもってして艦船を動かし、重要戦略物資のシーレーンの護衛作戦も担当する海軍は、当然のことながら、そうしたことを十分に認識していたことは間違いない。しかしながら、周知のように、海軍はそれに失敗をし、日本も多大な犠牲を払ったうえで、敗戦を経験することになった。

そうした重要物資の戦力化の失敗については、海上交通保護策の失敗と、現地軍政の失敗の両面から考察される必要がある。海上交通保護については、大井篤氏や坂口太助氏の研究などがある[1]。現地軍政については、東南アジアの占領地域では陸軍・海軍それぞれが地域ごとに軍政をしいていたことに注目し、現地軍政機構やその軍政のあり方に関心が集中してきたと言えよう[2]。

ところが、そのように各地域での軍政機構に関心が集中してきた一方で、中央で海軍の南方軍政を担っていた海軍省南方政務部については、南方軍政史の中に十分に位置づけられているとは言えない。それは、現地の軍政機関が強力な権限を持ち、中央の南方政務部には強力な指導力が無かったためでもあろう。海軍の占領地行政の失敗には、統一的な方針が存在していなかったことも一因として考えられる。

ところで、海軍の中で南方に関心を持った政治主体とし

*一般科目教室（人文社会科学系）

ては、1930年代に急進的南進論を展開した石川信吾や中原義正らが注目をされてきた[3]。だが、彼らはアジア・太平洋戦争中は軍務局や人事局といった枢要な地位にいたため、少なくとも彼らの南方への関心は史料上には現れにくくなる。むしろ、戦時期における南方軍政の、特に初期の時期において、中心的な役割を担ったのが、海軍省官房調査課であった[4]。

その調査課については、研究史の中ではその政治力が高く評価されてきたが[5]、そうした調査課の政治的影響力については、過大視されていることが批判もされている[6]。つまり、南方軍政史において、南方政務部には強力な指導力が無かったと考えられている一方で、その南方政務部の初期に中心的な役割を果たした調査課については、その政治力を高く評価する研究も存在しており、ここにおいて先行研究の見解は分かれている。だが、調査課の政治力を高く評価しては、南方政務部の弱体的な指導力との間に矛盾が生じるわけであり、調査課の政治力を低く評価したうえで、南方政務部の弱体的な指導力形成の一因とするアプローチが必要であると考えられる。つまり、誰が南方政務部の形成と定着に影響を及ぼしたのかを考えるのではなく、誰が影響を及ぼせなかったのかといった視座から、本稿では南方政務部の形成について概観していきたい。

1．海軍省調査課の沿革とその政治的影響力

まず、本稿の前提として、海軍省調査課の沿革について、先行研究に依拠しつつ、簡単に述べておく。

1934年に臨時調査課が設立された際の同課の主要任務は、第２次ワシントン軍縮会議に関連する関係各国の情報収集・管理・調査であった。その後、軍縮会議が終了したことと、対南方方策研究委員会の設置にみられるように、海軍の関心が東南アジアへと移行したことによって、臨時調査課は南洋方面に関する情報の収集や調査研究にも対応していき、その成果を「臨調査資料」としてまとめ、海軍省内に回覧していた。そして、対南洋方策研究委員会が次第に国策を軸とした内外各般の政策を統一・調整しようとするようになると、臨時調査課も国内の政治・行政・経済・社会・文化等の問題にまで対処が求められるようになり、その調査内容を一新し、調査課員の業務とは切り離し、法政大学教授の高木友三郎といった嘱託にそうした専門的な調査を任せるようになった[7]。

後に調査課の中心人物となる高木惣吉が臨時調査課に配属されたのは1936年12月のことであったが、その際の彼の任務は議会資料の作成であった。その仕事に取り組む中で、高木は海軍の予算消化方法に疑問を抱くようになり、解決策を自ら執筆するようになったわけであったが、同時に、臨時調査課の現状に対する疑念も高まっていき、高木自身が調査課長になってから、海軍の政治姿勢を根本的に変えるため、政治情報の収集活動と海軍中枢部に向けて発信を行うようになったのであった。そして、その後、陸軍がブレインを準備し始めたことに刺激を受け、陸軍に対抗する組織を設置することの必要を感じたため、1939年１月には人選に着手した。また、1940年には臨時調査から調査課として制度上の確立をみたことで、海軍が控えめにしていた外部機関との接触を開始し、時局対策を起案していくようになるのであった[8]。

高木のブレイン構想は[9]、政治・外交等の懇談会を組織し、それぞれに幹事を置き、総合研究会で結論的なものがあれば案文にするというものであった[10]。1940年９月７日、海軍次官の豊田貞次郎がこの構想に対し理解を示し、所要経費を官房機密費とする件を決済したために[11]、総合研究会・思想懇談会・政治懇談会・外交懇談会といった、細分化・専門化された研究会が設置されてブレインは制度上確立した。

そうした海軍のブレイン組織の中心的人物の一人であった東京帝国大学法学部教授の矢部貞治はその活動に非常な熱意を持っており[12]、そうした制度としての確立と、矢部ら参加者の意欲によって、調査課の動向にも変化がみられるようになった。例えば、日蘭会商失敗の影響により、総合研究会を中心に南方問題が活発に議論されるようになり、議題が国防国家の政治体制等、やや長期的な視野に立ったものから、比較的眼前の問題にシフトしていった。また、1940年段階にはみられなかった政治介入も活発になっていく。第３次近衛文麿内閣の総辞職に伴い、予備役海軍大将の末次信正擁立運動を展開するなどしていた。

しかし、そのような試みは結局失敗に終わり、1942年６月に高木が舞鶴鎮守府参謀長として転出してからの調査課は、その政治的影響力を低下させていくのであった。

調査課の政治力とは、あくまでも海軍内で広く認知されたものでなく、高木の人的ネットワークと意欲によるものであると言えるのであった。

また、調査課の政治的な力量と影響力を高く評価する研究も存在するが、実際のところ、調査課の政治的な影響力は先行研究の考えるほどは海軍内部で高かったとは言えない。臨時調査課から調査課として制度的な確立をみたとはいっても、その日常的な業務は軍務局の下請け的な存在であったと考えざるを得ないであろう[13]。

例えば、海軍内部において、「経済新体制確立要綱」を審議した際のことであったが、1940 年 10 月 1 日付の文書である「経済新体制確立要綱ニ対スル意見ノ件照会」において、調査課長名義で軍務局第四課・経理局第一課・艦政本部第一課・航空本部第一課に対して、企画院から送付されてきた草案を添え、10 月 7 日までに意見を開示するよう求められていたにもかかわらず[14]、それに対し最も早く回答した経理局第一課でさえ、回答を送付したのは期限を過ぎた 10 月 9 日であり[15]、艦政本部第一課にいたっては、回答を送付したのは 10 月 16 日であった[16]。だが、その後、10 月 21 日に軍務局長名義で軍需局長・経理局長・艦政本部長・航空本部長に対して、意見を 10 月 25 日までに出すように求めた際は[17]、期日がほぼ守られ、艦政本部長が回答を送付してきたのは 10 月 24 日[18]、軍需局長が 10 月 25 日[19]、航空本部長が一日遅れの 10 月 26 日であった[20]。それらの回答文は、一括して調査課に回付されている。以上の経緯からわかることとしては、調査課が意見の取りまとめを行っているのは、調査課の地位が向上したためではなく、調査課に軍務局の下請け的側面が依然としてあり、関心の低い新体制関連の案件について軍務局が調査課に委任していたからであると考えたほうが良い。調査課名義で出された文書の期日が厳守されなかったことは、調査課に任された案件の海軍内での関心は低く、海軍省内での調査課の威信も高くなかったことを示しており、逆に軍務局長名義で取りまとめられた回答文が一括して調査課に廻されているのは、調査課がいまだに軍務局の下請け的位置にとどまっていたことを示しているのである。

また、1940 年 9 月 16 日に軍令部出仕の藤井茂の起草した「新情勢ニ対処スヘキ海軍中央部改組案」では[21]、調査課について、「当然之ヲ軍務局ニ隷属セシメザルベカラズ」と軍務局の中の一課に組み込むことを考え、その管掌事項は「総力戦ニ関スル世論指導並ニ資料調査ニ関スル事項」、「戦争指導上ノ見地ニ於テ宣伝指導ニ当ル」などとされていた。海軍の中で忌避されがちであった、宣伝関係の仕事を割り振られていたことから、やはり調査課が軍務局の下請け的な位置付けであったことがうかがわれる。

2．海軍省南方政務部と調査課

その一方で、これも前述したように、調査課は初期の南方政務部において、特に中心的な役割を担っていた。そもそも、南方政務部の部長は軍務局長が務め、副部長については調査課が勤めるといったことが多く、調査課長が実質的にもイニシアティブをとりやすい環境であったと言えよう。「南方政務部設置ノ件仰裁」では、「常勤部員ハ調査課長ノ命ヲ承ケ服務シ其ノ事務室ヲ調査課室（軍務局長室ノ隣）ニ置ク」とされ[22]、調査課が中心であったことは疑いないであろう。

ところが、ここで注意しなければならないことは、調査課が南方政務部においてある程度の政治的影響力をもっていたとはいっても、調査課長の高木惣吉に期待されていた役割が、南方政務部の全ての業務に対してイニシアティブをとることではなかったということである。表 1 は「高木惣吉日記」にみられる南方軍政関係記述抜粋の一覧であるが[23]、こうした記述をみてもわかるように、高木に期待された役割はあくまでも人選であり、機構や政策の形成に関してまでは期待をされていなかったのであった。

そのうえ、海軍省内における南方政務部の位置付けについても、それほどの政治的影響力を発揮し得た機関であったとは考え難い。

確かに、海軍は「海軍ノ分担地域タル蘭領「ボルネオ」「セレベス」及「ニユーギニア」等ノ処理ニ関シ戦時中及戦後ニ亘ル確固タル基本方策ヲ樹立シ着々之ヲ実行シテ此処ニ帝国発展ノ不抜ノ地歩ヲ確立スル事」と[24]、中長期的な海軍占領地域全体に適用されるべき統一方針を形成する必要は少なくとも認識していた。だが、南方政務部の設置目的は、「南方地域ニ関スル政治、経済開発、物資取得等ニ関スル事務ヲ統一シ且強力ニ実行スル為」といったものであり[25]、南方政務部に求められていたことは、統一

日　付	頁数	記　述
1941/12/19	583	山崎氏ヲ南方関係顧問ノ件依嘱（答保留サル）。
1941/12/23	583	藤原銀次郎氏訪問、海軍ノ南方政務関係顧問ノ件依頼ス（返事保留）。
1942/1/7	508	藤原（銀）氏ヲ海軍顧問トスル件ニツキ、陸軍ヨリ反対アリ、之ガ諒解交渉。
1942/1/12	508	各省派遣南方民政部ニ向フ、十九名招待。
1942/1/15	603	帝大懐徳館、平賀総長招待。帝大南方調査会関係者ト引合セ。
1942/3/2	603	南方派遣民政部関係員五五名送別。
1942/3/3	604	岡田文秀顧問来省、大臣、次官、軍務局長ニ挨拶。
1942/4/1	605	副長会議（民生部機構、綿花増産計画）。岡田顧問、次官ト会見。
1942/4/3	605	岡田顧問ノ執務個所ヲ次官々邸ニスル件及調査課経費ニ関スル件処理。
1942/4/9	605	岡田顧問ト水池、迫水ノ件ニ付、打合セ。
1942/4/10	605	岡田顧問、石川、高木三人ニテ懇談。内務省ニテ水池亮（文書課長）氏ヲ新南方民政府ノ官房長ニ転出ヲ承諾ス。
1942/4/13	605	岡田、伊東、水池三氏ノ会談。大臣、交通土木局長、衛星局長ヲ部外者ヨリ銓衡スル件承認。大蔵省ニ迫水、植木、山際三氏ヲ財務局長候補トシテ申入ル。帝大ニ東竜太郎氏ヲ衛星局長候補トシテ申入ル。
1942/4/14	605	南西方面艦隊民政府ノ陣容整備ノ為ニ終日寸暇ナシ。霊南次官々邸ニ東大ノ東竜太郎博士来訪、東方ノ意向説明、岡田総監ト面談、本人内諾辞去。角筈ニ岡田対象来訪、迫水或ハ植木ヲ財務局長ニ推薦斡旋方慫慂セシモ動カズ。
1942/4/22	607	帝大側連絡員ト連絡。外務省湯川盛夫君ヲ呼ビ南方出張ヲ依頼。
1942/4/30	607	外務省、井上康次郎氏、湯川盛夫氏ノ件略見通シツク。内務省、下関土木出張所長、鮫島茂氏内諾ノ報アリ。大蔵省、植木予算課長来訪。中村法規課長ノ銓衡経緯ニ付尋ネラル。
1942/5/2	607	湯川盛夫氏来訪。伊藤少将ヲ呼ビ調査班ノ件取極ム。セラム政務部長及交通土木局ノ海運課長ヲ人事局ニ話シ了解ヲ得。
1942/5/4	607	農林省ノ湯川長官、南方進出ノ件、石黒次官ヨリ正式ニ断リ来ル。

表1「高木惣吉日記」にみられる南方軍政関係記述抜粋
伊藤隆他編『高木惣吉　日記と情報』下巻（みすず書房、2000年）より作成。

方針を立てることではなく、あくまでも事務処理の一元化であった。

さらに、その職員については、「関係局部ノ職員ヲ部長、副部長及部員トスルノ外常務的ニ事務ヲ処理スル部員（辞令上ハ軍務局局員、艦政本部出仕等トシ部内限リ南方政務部委員ヲ命ジ実質的ニ南方政務部ニ常勤セシムルモノトス）ヲ置キ常務機関的性質ノモノトス」という方針であったため[26]、常勤で事務を取り扱うものがいたとはいっても、南方政務部があくまでも「常務機関的性質ノモノ」に過ぎず、委員会組織でしかなかったことから、兼務も多くなり、作業能率もそれほど高くなかったと思われる[27]。

また、1941年12月8日付の文書「南方政務部制度立案ノ趣旨及運用方針」では、「（イ）案、軍務局兵備局等ノ所掌事務ヨリ南方関係事項ヲ除キ別ニ常務機関ヲ設ケテ南方関係ノ軍政、政策、物動等ヲ一括処理セシムル案」、「（ロ）案、委員会ヲ設ケ関係局部ノ連絡ヲ円滑ニスル案」の二案が検討の俎上に載せられつつ、それらについて、「然ルニ（イ）案ハ実行力強化ニ適スル如クシテ実ハ却テ円滑ナル実行ヲ妨ゲラレ（ロ）案ハ円滑ヲ期シテ却テ強力ナル実行ニ適セザル欠点アリ　依リテ本仰裁案ハ（一）委員会ノ型式ヲ執リテ関係局部ノ連絡ヲ緊密円滑ニシ（二）委員会内ニ常設機関ヲ設ケテ委員会ノ弱点ヲ補強シ（三）右常設機関ノ工夫努カト軍務局兵備局等常設機関ノ威力トヲ併セ発揮セシメ以テ時局ノ要望ニ応ゼントスルモノナリ」といった意見が出されていたことがわかる[28]。そこでは、各部局の事務を阻害、二元化しないことに重点があり、いかに常設部員を置いたとしても、その南方政務部は政策立案機関ではなく、連絡調整組織となってしまい、運用者の力量に左右されてしまう機構となっていたと言えよう。

加えて、同文書には「常設部員ハ各本属局課トノ連絡ヲ緊密ニシ其ノ意見ヲ代表シ而モ調査課長ノ命ヲ承ケテ方針ノ迅速ナル立案ニ努メ決定セル方針ノ迅速ナル実行ヲ

図ルモノトス　方針立案ニ際シ意見不一致ノ点アルトキハ副長会議ニ於テ速ニ一致点ヲ発見スル如クシ尚決セザルトキハ部長ノ裁決ヲ仰グ」といったことが記されているが[29]、常勤部員が先決せず、案件が課長級で調整されるということは、総合的な立案を志向する常勤部員と組織利益を追求する兼務部員の地位に優劣が設定されていなかったことを意味しており、総合的な方針の立案ができない要因となっていたことがうかがわれる。

さて、そのように海軍中央において、南方行政形成過程に中心的な役割を果たしているとみられていた調査課が、そこまで大きな政治的影響力は発揮できないしくみとなっていた南方政務部であったが、現地軍政機関との間でも、南方政務部がイニシアティブをとりづらかったであろうことがうかがわれる。

1941年11月20日に大本営政府連絡会議が決定した「南方占領地行政実施要領」では、「軍政実施ニ当リテハ極力残存統治機構ヲ利用スルモノトシ従来ノ組織及ビ民族的慣行ヲ尊重ス」と[30]、現地の機構や慣習が温存・優先されやすい方針が国策として定められており、そうした方針を受けて、1942年2月16日に南方政務部が起草した「占領地軍政処理要綱（第三次案）」では、「統治ニ当リテハ旧政権ノ統治方式ヲ概ネ踏襲シ各占領地ノ民族慣行社会組織、宗教、民度等ニ即応セル軍政ヲ実施スルモノトス」や、「我方要因ハ統治ノ根本ヲ把握シ軍政実施ノ目的達成上支障ナキ限度ニ於テ極力残存行政機構ノ利用ヲ図ル」といったことが記されていた[31]。そこでは、現地での行政の円滑化を目指すことで、各地域で方針が異なり、中央での方針の立案や執行に支障をきたす構造になっていたのであった。

そのように、現地軍の意向を尊重する方針であったがために、1942年10月23日付の文書「南西方面艦隊民政府総監上京ノ際ニ於ケル事務打チ合ワセ事項覚」では、「統治機構及制度関係　（一）民政部地方機構充実ノ具体策　現地計画ヲ聴取ノ上具体方策ノ打合セヲ行フコト」と[32]、現地軍の意向を尊重する方針に基づき、機構の問題については、イニシアティブを発揮できないことが明記されていたのであった。

「南方政務部部員事務処理分担」という文書には、部員それぞれの管轄する業務が記載されているのであるが、海軍省調査課課員であった扇一登のそれは、「南方ニ関スル諸調査及制度機構ニ関スル事項」であった[33]。つまり、ブレイントラストによる諸調査と機構整備を職掌としていたことがわかる。だが、調査課が積極的に海軍省内のセクショナリズムを打破しようと動いていた形跡は認められない。それは、その必要を感じていなかった可能性もあるが、軍務局の下請的な存在で、政治的威信の高くない調査課がそうした大規模な機構改編を行なうことはそもそも不可能であったとも言えよう。

それでは、調査課はどのような場合に「機構」についての事務を処理していたのであろうか。1942年9月18日付の文書「民政府総務局長、南西方面艦隊参謀副長状況ニヨル連絡会議経過概要」には、次のような記述がある。

中央ノ統制ノ行過ノ件

現地ニ相当ノ機関出テタル以上第六委員会乃至南方政務部又ハ中央ノ統制行過ノ感ナキニシモアラズ実例ヲアグレバ左ノ如シ

イ、「スラバヤ」ノ「バルビツク」（引揚船）ハ中央ノ指令ナキタメ今尚動カシ得ズ、「マカツサル」ノ病院船モ船[ママ]腹難ノ折柄現状ノ儘ニテハ勿体ナシ

ロ、地方運輸部ハ中央ヨリノ指令ナシトノ理由ニ依リタトヒ船艙ニ余裕アルモ指令以外ノ荷物ヲ積載スルコトヲ拒ム

ハ、沈船処理ノ如キモ現在ノ如ク香港ニテ「スラバヤ」「バタビヤ」等ヲ統括スルコトハ不可ナリ

（対策）

イ、至急適切ナル処理ヲ採ルコト

ロ、現地ニ於テモ常ニ貨物ヲ準備シ電報ニ依リ連絡スベシ又中央ヨリ中央ノ指令ニヨルモノハ優先的ニ取扱フベキモ余裕アラバ右以外ノ貨物ヲモ積ミ必ズ満船ニスル如キ指令ヲ出スコト

ハ、機構再検討ノコト[34]

そこからは、機構の抜本改革案の立案は調査課に求められていないうえに、「機構」について検討されるのは、ささいな行政事務上の不具合が生じたときに過ぎなかったことがわかる。

以上、本章でみてきたこととしては、海軍省調査課の政治的位置付けは高かったわけではなく、南方政務部は連絡調整機関であり、海軍の南方軍政の統一政策を形成し得る

区分	専　　門	職　　名	氏　　名	所属学部
経済	国防経済	教　　授	橋爪明男	経済学部
経済	農業経済	教　　授	東畑精一	農 学 部
農産	農作物	教　　授	佐々木喬	農 学 部
農産	農産製造	教　　授	薮田貞次郎	農 学 部
農産	農業土壌（農芸化学）	教　　授	春日井新一郎	農 学 部
農産	農作物	助 教 授	東条健二	農 学 部
農産	畜産	助 教 授	加唐勝三	農 学 部
林産	林政	名誉教授	薗部一郎	農 学 部
林産	林産製造（森林化学）	教　　授	三浦伊八郎	農 学 部
林産	森林土壌	助 教 授	芝本武夫	農 学 部
林産	樹木	助 教 授	猪熊泰三	農 学 部
水産	水産・工船漁業	教　　授	雨宮育作	農 学 部
水産	水産	助 教 授	松江吉行	農 学 部
水産	水産	助 教 授	檜山義夫	農 学 部
鉱産	石油	教　　授	上松国夫	工 学 部
鉱産	石油（地質）	助 教 授	小林貞一	理 学 部
鉱産	石油（地史・古生物）	助 教 授	大塚弥之助	理 学 部
鉱産	鉱物	教　　授	佐野秀之助	工 学 部
鉱産	地質	教　　授	加藤武夫	理 学 部
鉱産	地質	教　　授	坪井誠太郎	理 学 部
鉱産	鉱物	助 教 授	西尾滋	工 学 部
医学	衛生・内科	教　　授	竹松松次郎	医 学 部
医学	内科	教　　授	柿沼臭作	医 学 部
薬学	薬物	名誉教授	朝比奈泰彦	医 学 部

表２　海軍南方関係嘱託一覧

「矢部貞治宛封書」（1941年12月25日付、海軍省調査課扇中佐作成、
政策研究大学院大学図書館所蔵「矢部貞治関係文書」、ID54-58）より作成。

構造にもなっていなかったということがわかった。また、海軍省調査課の政治的位置付けが高くなければ、機構の再検討による南方政務部の強力化も行われず、海軍省内のセクショナリズムの問題に機構が左右されることとなった。

３．民間人ブレイントラストをめぐる諸問題

では、海軍省調査課は大学教授などの有識者による民間人ブレイントラストを擁し、海軍内では政策立案や自己の意見の権威付けで優位な立場にあったにもかかわらず、なぜそうした民間人ブレインを活用し、海軍内での政治的影響力を拡大したり、南方政務部の地位を向上させたりすることができなかったのであろうか。

そもそも、海軍内において、ブレイントラストが重視されていたとは言いがたい。ブレイントラストには1940年11月から1941年6月まで12,500円という多額の経費がかかっており[35]、海軍次官の沢本頼雄はブレイントラストへ機密費を使うことに消極的であった[36]。

1942年1月に、海軍は表2にみられるような大量の東大教授を南方関係の嘱託としたが[37]、それは明確な調査計画があってのことではなかった。海軍省調査課の民間人ブレインとして中心的な役割を果たした東京帝国大学法学部教授の矢部貞治の1941年12月21日条には、次のような記述がある。

先日扇中佐へ南方関係の有能な専門家を予め「白紙」ででも海軍の方へ留保せられたく、特に東大の各学部の教授について至急平賀総長と連絡をとるやう注意してゐたら、今日扇中佐から、平賀総長に会ひに行き、連絡は矢部教授に願ふ旨を言って置いたのでよろしくとの事であった。尚陸軍が大分「白紙召集」をやってゐるので、海軍もわれわれを「白紙」で留保する手続を採るから、よろしくとの事であった。但しもちろん全部的にではなく、只陸軍への召集をチェックする意味だとの事[38]

また、1941年12月23日条には、次のような記述がある。

十一時半頃から総長室で扇中佐と総長との話しに立会ふ。大体南方資源調査会の各学部の専門家の表を作って頂いて、それを嘱託にし、将来、海軍の徴用予定者として、陸軍に独占されるのをチェックすることに決した。これを中心にすれば、将来南方関係の調査研究の統合も出来るわけだ。その旨を総長及び扇中佐に言って置いた。総長は又海軍の後援でこれを研究所にしたいらしい[39]

ここからは、海軍の南方関係の嘱託の手続きが陸軍対策であり、何かしらの具体的な構想があってのことではなかったことがわかる。陸軍に確保される前に海軍が確保しておきたいという、あくまでも陸軍への対抗意識から出た行動に過ぎず、その活用は特に検討されていたわけではなかったのであると言える。

次に、『矢部貞治日記』1942年2月17日条の以下の記述も重要である。

総長は折角大学と海軍の関係がついたが、大部分のところは陸軍の分担だし、研究所の接収にしても学術調査にしても、陸軍の方では大して尊重もしてゐないらしいし、学者諸家も少しじりじりして来てゐるので、海軍ももっと積極的に陸軍を説得してやって貰ひたいとの事であった。総長と会ってから直ぐ海軍に行き、扇中佐に会って豊田氏の件に総長の希望を伝へた。（※引用者中略）学術調査の件は文部省の企図などもあり一寸困難な事情があるらしかった[40]。

学術調査をさほど陸軍は重視していなかったが、海軍も積極的にそうした状況の改善を陸軍に働きかけて、学術調査を行なう研究所や有識者を保護しようとしていたわけではなかったことがわかる。それに加えて、調査自体も戦局の悪化や文部省との間での調整も難航し、なかなか実施されていなかったのであった。

加えて、ブレイントラストの意見そのものが、そのまま海軍にとってすぐに採用できるようなものとは限らなかったことも、海軍が民間人ブレイントラストを十分に活用することができなかった要因となっていたと言える。そうしたことは、『矢部貞治日記』の1942年1月24日条にみられる。

朝海軍に行く。僕の書いた「大東亜新秩序の政治的構図」の再検討だが、高木大佐も扇中佐も議会に行ってゐて出て来ず、天川君を通じて、彼等の意見を言ふといふのだが概ね甚だ愚劣な考へ方で、文字の意味が平易でないいふやうな点は別とし、陸海軍の分担を成るべく早く廃して、軍政から民政へ移行し、一元的に運営すべしといふのにひどく反対らしいのは、相も変らず、陸軍国、海軍国いふ縄張りと、島国根性に基くし、僕が「大東亜運動」を起こせといふのを、東亜連盟運動とは異るとはっきり言へなどゝいふのも、凡そ思ひの外の愚劣な小乗根性だ。共栄圏とか、共存共栄とか、帝国主義の排除とかいふことすら、反対してゐるといふに至っては、殆ど手の下しやうがない[41]。

ブレインの意見はそのまま採用すると海軍の組織利益と衝突してしまうことにもつながりかねなかったのであった。海軍にとっては陸軍への対抗意識が南方関係の嘱託を雇用する最大の要因であり、そのために民間人ブレイントラストそのものは活用することができなかったのであった。

その後、戦局のさらなる悪化により、南方での現地調査は益々困難となったうえ、海軍省調査課や民間人ブレインの関心は東条英機内閣の倒閣運動にシフトしていくのであった[42]。

おわりに

海軍省調査課の政治力を高く評価する研究も存在するが、実際のところ、その海軍内部における政治力はそれほど高かったとは言えない。そして、そうした海軍内部における政治的影響力のそれほど高くない調査課によって、特に設置初期の時期において担われた南方政務部もまた、南方行政全体の中での指導力は弱体的であり、広域的に点在する現地軍政機関に指導力を発揮することもなければ、海軍内において主体的に南方政策を立案できていたわけでもなかった。

本稿では、そのように南方政務部の弱体的な指導力の要因を、設立当初の運営に中心的な役割を担った海軍省調査課の政治的影響力の低さを最大の理由として説明してきた。調査課の政治的影響力が弱体的であったからこそ、南方政務部の威信もまたそれほど高くはならなかったのであった。南方政務部は単なる事務の統一機関として位置付けられ、その委員も兼務が多かったため、本務部局の利害要求の影響を受けやすかったであろうと考えられる。

また、海軍省調査課は、大学教授を中心とした民間人ブレイントラストを擁し、海軍内部の他の部局に比べれば、その意見に対する権威付けの点で優位に立っていたはずであるにもかかわらず、結局のところ、南方政務部の弱体的な指導力が改善されなかったのは、調査課がそもそも民間人ブレインを十分に活用できていなかったからであった。特に南方関係の嘱託は、陸軍への対抗意識から、十分な見通しなく任命しただけにすぎず、加えて、ブレインの意見そのものも、海軍にとってすぐに受け入れられるものであるとは限らなかった。石油をはじめとした重要戦略物資を、いかに効率よく戦力化するかということが、日本にとって対米戦争の分かれ目であった。だが、海軍はその一方で、短期間での決着というプランそのものを明確に否定することもせず、艦隊決戦に重大な関心を持ち、占領地行政に十分な関心を払うこともなかった。そうであるがゆえに、調査課のような傍流の部局に南方行政の事務が任されていくのであった。非効率的な南方行政は、結局のところ、重要戦略物資の欠乏というかたちで日本をその後に苦しめることになる。

[1] 坂口太助『太平洋戦争期の海上交通保護問題の研究―日本海軍の対応を中心に』(芙蓉書房出版、2011年)、大井篤『海上護衛戦』(日本出版共同株式会社、1953年)。

[2] 例えば、小池聖一「海軍南方『民政』」(疋田康行編『「南方共栄圏」―戦時日本の東南アジア経済支配―』、多賀出版、1995年)、田弘毅「南方軍政の展開と特質」(三宅正樹・秦郁彦・藤村道生・義井博編『昭和史の軍部と政治4　第二次大戦と軍部独裁』、第一法規出版株式会社、1983年)、同「海軍南方占領行政の機構系統の変遷」(『日本歴史』344、1977年)。

[3] 重視の度合いや方向性は違うが、彼らを取り上げた代表的な研究としては、波多野澄雄「日本海軍と『南進』―その政策と理論の指摘展開―」(清水元編『日本・東南アジア関係史Ⅰ　両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』、アジア経済研究所、1986年)、同「日本海軍と南進政策の展開」(杉山伸也、イアン・ブラウン編『戦間期東南アジアの経済摩擦―日本の南進とアジア・欧米―』、同文舘出版、1990年)。波多野氏が南進論を扱った他の研究としては、同「『南進』への旋回、1940年」(『アジア経済』26－5、1985年)、同「国防思想と南進論」(矢野暢『講座　東南アジア学　第10巻　東南アジアと日本』、弘文堂、1991年)相澤淳『海軍の選択　再考真珠湾への道』(中央公論新社、2002年)第4章等が挙げられる。

[4] 拙著『昭和戦時期の海軍と政治』(吉川弘文館、2013年)第1部第3章(初出は「民間人ブレーントラストの設立と日本海軍」、『ヒストリア』217、2009年)。

[5] 藤岡泰周『海軍少将高木惣吉―海軍省調査課と民間人頭脳集団』(光人社、1986年)、兵頭徹「海軍省調査課と嘱託の役割(1)―臨時調査課時代と高木友三郎―」(『東洋研究』157、2005年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(2)―前期高木課長時代と天川勇―」(『東洋研究』161、2006年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(3)―高木惣吉と大学校研究部―」(『東洋研究』165、2007年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(4)―ブレーン・トラストの編成―」(『東洋研究』169、2008年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(5)―各種懇談会・研究会の活動―」(『東洋研究』173、2009年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(6)―海軍に正しい世界観を求めて―」(『東洋研究』176、2010年)、同「海軍省調査課と嘱託の役割(7)―国内思想戦と調査課ブレーン―」(『東洋研究』181、2011年)。

[6] 前掲拙著『昭和戦時期の海軍と政治』第1部第3章、畑野勇「日本海軍の戦争指導と社会科学者・技術官僚の役割」(小林道彦・黒沢文貴編『MINERVA日本史ライブラリー24　日本政治史のなかの陸海軍―軍政優位体制の形成と崩壊　1868～1945―』、ミネルヴァ書房、2013年)。

[7] 以上、前掲兵頭「海軍省調査課と嘱託の役割(1)―臨時調査

課時代と高木友三郎―」。

[8] 以上、前掲兵頭徹「海軍省調査課と嘱託の役割（2）―前期高木課長時代と天川勇―」。

[9] ここからの内容の詳細については、前掲拙稿『昭和戦時期の海軍と政治』第1部第3章参照。

[10] 高木惣吉『太平洋戦争と陸海軍の抗争』（経済往来社、1967年）198頁。

[11] 同上、191頁。

[12] 伊藤隆『昭和十年代史断章』（東京大学出版会、1981年）第3章以降を参照。

[13] こうした点については、前掲拙稿『昭和戦時期の海軍と政治』第1部第3章参照。

[14] 土井章監修『昭和社会経済史料集成』第11巻（巌南堂書店、1986年）334～335頁。

[15] 同上359～362頁。

[16] 同上412～413頁。なお、艦政本部は同部第三課長が艦政本部総務部長宛に提出したものを一旦そのまま10／6に調査課に送付しているが、これは正式な回答ではなく、あくまでも間に合わせのものであろうと思われる。軍務局第三課と航空本部第一課がいつ回答を送付したのかについては史料が無い。

[17] 同上424～425頁。

[18] 同上432頁。

[19] 同上445～446頁。

[20] 同上456～457頁。経理局長がいつ回答を送付してきたのかについては史料が無い。

[21]「新情勢ニ対処スヘキ海軍中央部改組案」（同上、150～151頁）。

[22]「南方政務部設置ノ件仰裁」（前掲『昭和社会経済史料集成』第14巻）、549頁。

[23] 伊藤隆他編『高木惣吉　日記と情報』下巻（みすず書房、2000年）。

[24]「南方政務部開設ニ際シ部長口述覚（案）」（「岸幸一コレクション」D1－783、アジア経済研究所図書館所蔵）

[25] 前掲「南方政務部設置ノ件仰裁」、548～549頁。

[26] 同上、544～545頁。

[27] なお、南方政務部の設置時に委員会組織を選択した背景としては、海軍省内での事務を委員会で処理してきた経緯があると推察される（田中宏巳「海軍各種委員会の定量的研究」、『日本歴史』590、1997年）。田中氏の研究によると、海軍は人員数が陸軍に比して少ないため、兼務が多くなり、能率は低かった。

[28]「南方政務部制度立案ノ趣旨及運用方針」（前掲『昭和社会経済史料集成』第14巻）544～545頁。

[29] 同上。

[30] 参謀本部編『杉山メモ（上）［普及版］』（原書房、2005年）、527頁。

[31] 土井章監修『昭和社会経済史料集成』第15巻（巌南堂書店、1990年）329頁。

[32]「南西方面艦隊民政府総監上京ノ際ニ於ケル事務打チ合ワセ事項覚」（前掲「岸幸一コレクション」D8－1140）。

[33] 前掲『昭和社会経済史料集成』第14巻、546～547頁。

[34]「民政府総務局長、南西方面艦隊参謀副長状況ニヨル連絡会議経過概要」（前掲「岸幸一コレクション」D8－1144）。

[35]「研究費支出一覧表」（土井章監修『昭和社会経済史料集成』第13巻、巌南堂書店、1988年）372～374頁。

[36] 高木惣吉『自伝的日本海軍始末記―帝国海軍の内に秘められたる栄光と悲劇の事情―』（光人社、1971年）198頁。

[37]「矢部貞治宛封書」（1941年12月25日付、海軍省調査課扇中佐作成、政策研究大学院大学図書館所蔵「矢部貞治関係文書」、ID54－58）による。

[38] 日記刊行会編『矢部貞治日記』銀杏の巻（読売新聞社、1974年）484頁。

[39] 同上、485頁。なお、こうした東大の理系を中心とした研究者と海軍とのつながりについては、伊藤隆・鈴木祐子「南方・立地自然科学研究所の立地と廃止」（『東京大学史紀要』第1号、1978年）参照。

[40] 同上、501頁。

[41] 同上、494頁。

[42] 海軍省調査課による東条英機内閣の倒閣運動については、前掲拙著『昭和戦時期の海軍と政治』第2部第1章参照。

英語プレゼンテーションによる英語の４技能に対する改善効果について

森　　貞*

The Effect of Oral Presentation on EFL Learners' Improvement of English Four Skills

Sadashi MORI

This paper investigates the effect of oral English presentation with PowerPoint on EFL (English as a Foreign Language) leaners' improvement of the English four skills (i.e. speaking, listening, reading, and writing). It is indicated that the degrees of improvement in speaking and listening are greater than those in reading and writing on the basis of the results of a questionnaire survey conducted among the students who delivered four oral English presentations in the first semester of 2017 and the contents of the essays written by the students giving an oral presentation on their study tour in the second semester of 2016, as well as by the students mentioned above.

Keywords：oral presentation, PowerPoint, English four skills, questionnaire survey, essay

１．はじめに

筆者は、昨年度、３年生の英語の授業において、英語プレゼンテーションを実施した。年度当初には予定していなかったが（したがって、シラバスにも未記載であった)、例年、３年生は 10 月末から 11 月の初めにかけて「研修旅行」（いわゆる修学旅行に該当するもので、以前は「工場見学旅行」と呼ばれていた）に行っていることから、事前研修の意味合いも込めて、研修先の企業や観光名所を英語で紹介する活動（PowerPoint を用いた英語プレゼンテーション）を後期の英語の授業に取り入れることを夏季休業中に思いついた。当初は、うまくいくだろうかという不安の方が大きかったが、学生が意欲的かつ主体的に当該活動に取り組む様子を見て、英語プレゼンテーションを英語の授業に取り入れることの意義を十分に認識するに至った。

本年度は、年度当初から、担当する３年生１クラスの授業において、通年で英語プレゼンテーション活動を組み込み（週２コマのうちの１コマを配当)、シラバスにもその旨記載した。

本稿の構成は以下のとおりである。２節では、前年度に実施した活動内容について報告する。３節では、本年度前期に実施した活動内容とアンケート結果について報告する。４節では、本年度後期に実施予定の活動内容を記載する。５節はまとめである。なお、付録として、１クラス分の『紹介英文集』と３クラス分の『英語プレゼンテーションに関する感想文集』を収録する。

２．前年度後期の活動内容

平成 28 年度後期の英語プレゼンテーションは以下の日程で実施した。

（１）平成 28 年度英語プレゼンテーション実施日程表

①機械工学科３年（3M）

・発表内容：研修先企業紹介＋自主見学旅行（注１）

・発表形態：グループ(自主見学旅行グループ)での発表

10 月 11 日　研修旅行

(準備１－研修先企業の業務等調査)

10 月 21 日　研修旅行

(準備２－紹介英文作成、PowerPoint 作成)

【10 月 24 日～ 10 月 29 日　研修旅行】

11 月４日　　研修旅行

*一般科目教室（人文社会科学系）

（準備３－自主見学旅行内容の確認）
11 月８日　研修旅行
（準備４－英文作成、PowerPoint 作成）
11 月 10 日　研修旅行（発表）
②電子情報工学科３年（３ＥＩ）
・発表内容：訪問先紹介（注２）
・発表形態：個人での発表
10 月 12 日　研修旅行
（準備１－訪問先紹介のための調査）
10 月 19 日　研修旅行
（準備２－紹介英文作成、PowerPoint 作成）
【10 月 24 日～ 10 月 29 日　研修旅行】
12 月７日　研修旅行（発表）
（注１）福井高専の研修旅行は最初の４日間はクラス単位で行動し、その後、現地解散し、グループ単位で計画を立てた旅行が行われる。このグループ単位での旅行を「自主見学旅行」と呼んでいる。
（注２）観光名所だけでなく、宿泊するホテル等の紹介も含む。

授業中は、スマートフォンやパソコンを使って情報収集をしたり、紹介英文や PowerPoint を作成したりすることを許可したが、時間内に作業が終わらない場合には、放課後や自宅での作業を指示した。３ＥＩの学生に対しては、研修旅行前までに訪問先を紹介する英文を提出することを義務付け、提出英文を冊子（付録１）にして配布した。また、両クラスの学生に対して、英語プレゼンテーションに関する感想文を提出させ、文集（付録２、付録３）を作成し、冬季休暇前に配布した。

以下に３Ｍの感想文（付録２）の中でもたびたび言及されている Ｍ君の発表原稿（原文のまま）を掲載する。
（２）Ｍ君の発表原稿
【スライド 1－1】
Second day, we visited Oarai city in Ibaraki. This city became the actual stage of very popular TV anime, Girls und Panzer. It is a heartwarming story of high school girls and tanks that appeared in World war.
【スライド 1－2】
Real buildings of Oarai city like the station, shopping mall appeared a lot of ガルパン's anime scenes. So this city has another name for ガルパン fans, Holy ground.
【スライド 2－1】
This is the Oarai station. This station appeared anime scenes too. Please pay attention to the station.
【スライド 2－2】
This is that scene.（動画）
【スライド 3－1】
This is the マリンタワー. There is the ガルパン喫茶 and we went there and enjoyed. This is the real cartridge of tanks. This is 鉄板ナポリタン of アンツィオ. It was very good.
【スライド 3－2】
This is マリンタワー's scene.
【スライド４】
The Impossible escalator.
【スライド５】
ガルパン specialties 魚屋本店.
【スライド６】
All of us enjoyed Oarai and ガルパンワールド. At last, we have one message to you, ガルパン is good. Thank you for your attention.

３．本年度前期の活動内容

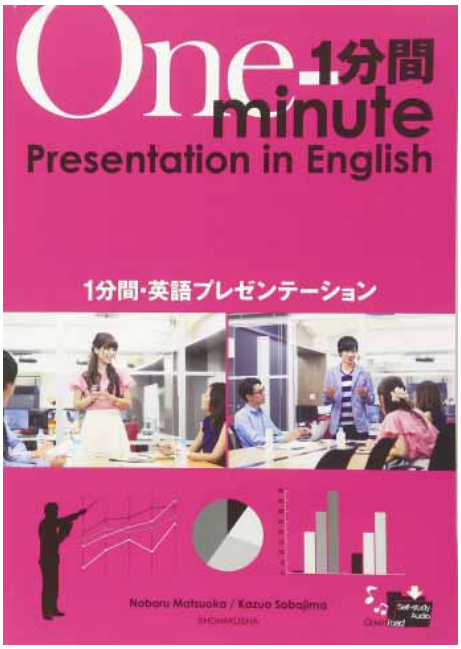
平成 29 年度前期の英語プレゼンテーションは以下の日程で実施した（授業進度表は年４回分〔①前期開始～前期中間学力確認週間前、②前期中間確認週間後～前期終了、③後期開始～後期中間学力確認週間前、④後期中間確認週間後～学年末試験前〕をその都度、事前配布）。
（３）平成 29 年度前期英語プレゼンテーション実施日程表
電子情報工学科３年（３ＥＩ）
・発表形態：個人での発表（１分間）
４月 20 日　自己紹介（準備）
５月 11 日　自己紹介（発表）
５月 18 日　友達紹介（準備）
５月 25 日　友達紹介（発表）
【６月８日～６月 15 日　前期中間学力確認週間】
６月 29 日　故郷紹介（準備）
７月６日　故郷紹介（発表）

７月 13 日　夏休みの計画（準備）
７月 20 日　夏休みの計画（発表）

本年度は、英語プレゼンテーション学習用のテキストを選定し、「準備」の回には、そのテキストを使うこととした。使用したテキストは、*One-minute Presentation in English*（松柏社 2017）で、プロジェクト・ベースの教材である。目次を以下に示す。

（４）TABLE OF CONTENTS

MISSION 01 : INTRODUCE YOURSELF
MISSION 02 : GIVE YOUR IDEAS
MISSION 03 : INTRODUCE NICE PLACES IN JAPAN
MISSION 04 : TALK ABOUT YOUR SUMMER PLANS
MISSION 05 : INTRODUCE YOUR CLASSMATES
MISSION 06 : EXPLAIN JAPANESE CULTURE
MISSION 07 : SOLVE PROBLEMS
MISSION 08 : TALK ABOUT YOUR FUTURE PLANS



One-minute Presentation in English の表紙

「自己紹介」「友達紹介」「夏休みの計画」における「準備」の授業ではそれぞれ、MISSION 01、MISSION 05、MISSION 04 の SAMPLE プレゼンテーションの英文を解説し、進行のひな型となる英語表現に目を向けさせるとともに、LEARN WORDS, PHRASES & EXPRESSIONS に列挙された各プロジェクトの原稿作成に活用できる語句・表現の使い方について解説した。「故郷紹介」における「準備」の授業では、該当する MISSION がないために、教材（活用可能な語句・表現集）を作成・配布し、原稿作成の一助とした。

本書では、１つのプロジェクトは３週間で完結するように設定されている。

（５）WEEK１－サンプルを読む、語彙・表を学ぶ、原稿を書く。
WEEK２－PowerPoint 用スライドを作成し、リハーサルを行う。
WEEK３－発表する。

このうち WEEK２は、宿題として、期日までに PowerPoint 資料を e-mail 経由あるいは USB メモリーで提出させ、発表日当日までに、筆者のパソコンにクラス人数分をすべて格納することで、発表当日は、時間のロスなく、順次、スムーズに発表ができるように準備した。

前年度の英語プレゼンテーションは普通教室で実施したために、「スクリーンが見えにくい」、「音声が聞き取りにくい」などの支障があったため、プレゼンテーションの発表は、大スクリーンが設置されており、マイクロフォンが使用できる大講義室で実施することとし、プレゼンターはある程度の緊張感を持って英語プレゼンテーションを行え、聴衆は、プレゼンテーションをしっかり視聴できる環境を整えた。

４回分の英語プレゼンテーションはすべて録画し、DVD を作成した。録画したプレゼンテーションの映像に関しては、学生本人に自分が行ったプレゼンテーションを視聴させることで今後のプレゼンテーションの向上につながるヒントを自らが発見する機会を提供したいと考えている。

７月 26 日には、英語プレゼンテーションに関するアンケートを実施するとともに e-mail 経由で感想文を提出させ、文集（付録４）にして配布した。アンケートの質問項目［(６)（７)］及びアンケートの結果［(８)（９)］は以下のとおりである。

（６）あなたが英語プレゼンテーション（聴講を含む）によって伸長すると考える能力は何ですか。下から選び、該当する項目に丸をつけてください。（複数回答可）

・スピーキング力　・リスニング力・　ライティング力
・リーディング力　・その他（具体的には　　）

（7）実際に4回の英語プレゼンテーション（聴講を含む）を行った結果、下記の能力の伸長に関して自己評価をして下さい（該当する評価に丸を付けてください)。

・スピーキング力

(i)大いに伸びた (ii)少し伸びた (iii)あまり伸びなかった

・リスニング力

(i)大いに伸びた (ii)少し伸びた (iii)あまり伸びなかった

・ライティング力

(i)大いに伸びた (ii)少し伸びた (iii)あまり伸びなかった

・リーディング力

(i)大いに伸びた (ii)少し伸びた (iii)あまり伸びなかった

（8）・スピーキング力　【36/45 (80%)】

・リスニング力　【21/45 (47%)】

・ライティング力　【8/45 (18%)】

・リーディング力　【1/45 (2%)】

・その他

コミュニケーション力、プレゼンテーション技能、抑揚力、最適な単語を見つける力、説明する力、スライド作成技術、体で表現する力、英語での表現力、話の要点を見つける力、ユーモア表現力。

（9）・スピーキング力

(i) 大いに伸びた　【10/45 (22%)】

(ii) 少し伸びた　【28/45 (62%)】

(iii) あまり伸びなかった　【7/45 (16%)】

・リスニング力

(i) 大いに伸びた　【3/45 (7%)】

(ii) 少し伸びた　【28/45 (62%)】

(iii) あまり伸びなかった　【14/45 (31%)】

・ライティング力

(i) 大いに伸びた　【2/45 (4%)】

(ii) 少し伸びた　【26/45 (58%)】

(iii) あまり伸びなかった　【17/45 (38%)】

・リーディング力

(i) 大いに伸びた　【0/45 (0%)】

(ii) 少し伸びた　【19/45 (42%)】

(iii) あまり伸びなかった　【26/45 (58%)】

4．本年度後期の活動計画

本年度後期の活動計画を以下に示す。

(10) 平成29年度後期英語プレゼンテーション実施計画表

発表形態：個人による発表（1分間）

10月3日　夏休みの思い出（準備）

10月10日　夏休みの思い出（発表）

10月17日　研修旅行－見学先紹介（準備）

10月24日　研修旅行－見学先紹介（発表）

【10月30日～11月4日　研修旅行】

【11月21日～11月29日　後期中間学力確認週間】

12月5日　研修旅行－自主見学旅行（準備）

12月12日　研修旅行－自主見学旅行（発表）

【12月25日～1月8日　冬季休業】

1月16日　将来の計画・夢（準備）

1月23日　将来の計画・夢（発表）

「夏休みの思い出」は前期に実施した「夏休みの計画」の内容との連動で、その実現の割合にも言及させながらプレゼンテーションを行わせる予定である。「研修旅行－見学先紹介」に関しては、前年度同様、事前研修の一環であり、インターネット検索などで関連情報を収集させるとともに、MISSION 03 や MISSION 06 における記載を参考に英文を書かせる予定である。「研修旅行―自主見学旅行」に関しては、発表までに、研修旅行後、1ヵ月程度の時間があるので、事前アナウンスによって、周到な準備をさせ、充実した内容のプレゼンテーションを行わせる予定である。「将来の計画・夢」に関しては、MISSION 08 を活用する予定である。

5．まとめ

英語プレゼンテーションに関するアンケート調査の結果及び感想文（付録2、付録3、付録4）の内容から、実践的な英語力の向上（特に、スピーキング力とリスニング力）に英語プレゼンテーションが有効であると捉えている学生が大半であるということが伺える。例えば、平成29年度3ＥＩ学生の感想文で学生が言及している、伸長したと実感している4技能に関するクラス人員の割合は以下の通りである。

(11)・スピーキング力　［38.6%］
　　・リスニング力　　［27.2%］
　　・ライティング力　［18.2%］
　　・リーディング力　［ 0%］

リーディング力の向上を実感させるためには、英文資料（新聞記事、雑誌記事、学術論文等）を読ませて、その内容を紹介させるような課題を設定する必要があろう。

学生の感想からは英語プレゼンテーションを通したプラスの学習効果を認めることができるが、実際のプレゼンテーションでは、多くの学生に、文法の間違い、不適切な語彙選択、間違った発音、綴りの間違いが見られる。前期の授業では英語プレゼンテーションに慣れさせるために、「正確性（accuracy)」よりも「流暢性（fluency)」に重きを置き、間違いに対する指摘は行わなかった（学生間での間違いの指摘は見られた)。しかしながら、今後は、プレゼンテーション発表時のメモ取りや録画したプレゼンテーションの内容確認作業を通して、『間違い指摘シート』のようなものを作成・配布し、「流暢性」に加えて、「正確性」も向上させられるような指導を行っていきたいと考えている。

参考文献

飯田依子 (2012)「プレゼンテーションはコミュニケーション能力向上に役立つか？」The JASEC bulletin 21 (1)、123-132、日本英語コミュニケーション学会。

佐藤智子 (2006)「オーラル・プレゼンテーションを通した英語４技能向上の試み」『言語と文化』８、31-41、岩手県立大学。

藤田玲子、山形亜子、竹中肇子 (2009)「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」『人文自然科学論集』128、35-53、東京経済大学人文自然科学研究会。

〈付録 1 〉

Preliminary Research Report on Places to Visit on a Study Tour by Third-Year Students of the Department of Electronics and Information Engineering (2016/11/01 発行)　　(学生氏名は省略)

○ **Nagashima Spa Land** − Today let me introduce Nagashima Spa Land. Nagashima Spa Land is a major amusement park in Mie Prefecture. It is called "Naga Spa". It features several roller coasters, thrill rides, and so on. As of 2012, Nagashima Spa Land is the 18th most visited amusement park in the world. Now everyone from adults to children can enjoy Nagashima Spa Land. On holidays, it is very crowded and visitors wait for a long time to ride roller coasters. The famous roller coasters in Nagashima Spa Land are Steel Dragon 2000 and White Cyclone. First, about Steel Dragon 2000, its maximum speed is 153km/h, and its total mileage is 2479m. This total mileage is Guinness World record. Second, about White Cyclone, although its maximum speed and total mileage are worse than Steel Dragon 2000, surprisingly, White Cyclone is wooden. The two roller coasters have different thrill so they don't bore us. By the way, Nagashima Spa Land has not only exciting roller coasters but also many restaurants. For example, we can eat Japanese food, hamburgers, Chinese food, and so on. In Nagashima Spa Land, a lot of exciting events are held. Season of now is Halloween. So Halloween party is held in Nagashima Spa Land from October 10 to 31. As above, Nagashima Spa Land is a very fantastic amusement park so if you get interested in Nagashima Spa Land, I recommend that you visit there. Thank you.

○ **Itsukushima Shrine** − Hello, everyone. My name is Pooh. Today I'd like to talk to you about Itsukushima Shrine. Itsukushima Shrine is located in Miyajima, in Hiroshima. Itsukushima Shrine is one of three most famous scenic spots in Japan. The main shrine is a National Treasure of Japan. The Shrine pavilions, Otorii and Mt. Misen which is 535m in elevation are listed as a UNESCO World Heritage Site. By the way, have you ever seen this poster? The main shrine stands on top of the sea, which makes it a unique building in the world. The Otorii gate is not so deeply imbedded in the sea bed, and 7 tons of stone fill the upper cross beam, allowing it to withstand earthquakes and typhoons. Do you want to go there? I suggest you go there. That's all for my presentation. Thank you for your kind attention.

○ **Dazaifu Tenman-gu** − According to legend, Michizane was a gifted student who composed many poems dedicated to his favorite plum trees. Said to be favored by the gods, Michizane raised the ire of the Fujiwara clan, who exiled him to Kyushu. Michizane spent his exile studying, and died at the age of 57. When Michizane died, his body was carried by an ox that stopped near a Buddhist monastery. Unable to move the body along, Michizane was buried there by his follower, Umasake no Yasuyuki, and the shrine was built there. Today, a statue of an ox stands nearby to commemorate the event. It's also said that the plum tree inside the shrine flew from Kyoto to be reunited with Michizane in his death, and that it is always the first plum tree to bloom in Japan. Soon after Michizane died, five members of the Fujiwara clan, the royal family involved in Michizane's exile, died, one from a lightning strike that struck the clan's castle. Michizane, deified as Tenjin, was thus seen as a vengeful spirit. When disasters struck Kyoto, the same royal family aimed to appease Michizane's spirit and, as penance, reinstated his position and rank posthumously. Through this appeasement, Tenjin's reputation became associated with literature and education. The shrine's precinct spans over 3,000 acres (12km^2) and includes several structures. Its honden, or main shrine,

was first built by Yasuyuki Umasake in 905, two years after the death of Michizane. A larger structure was constructed by the Fujiwara clan in 919 but was destroyed in a fire during a civil war. The Momoyama-style shrine visitors see today dates from 1591 and is an Important Cultural Property. The grounds also contain two ponds, a bridge and a treasure house. One pond is a traditional garden style, shinji ike, named for being shaped to resemble the kanji character for “heart.” As well as the main shrine dedicated to Tenjin there are auxiliary and branch shrines of many other kami. The auxiliary shrine honden is an Important Cultural Property. The shrine is also known for its 6,000 ume(Asian plum) trees belonging to 167 varieties. One tree, known as Tobiume, stands directly to the right of the honden. Legend has it that after Michizane left Kyoto in exile, he yearned so much for this tree that it uprooted itself and flew to Dazaifu Tenman-gu.

○ **Gunkan-jima** － I introduce the “Gunkanjima”. The Official name of it is “Hasima”. The island looked like a battleship. For this reason, it is called Gunkanjima, Warship Island in English. Coal was mined at this area from the bottom of the sea at that time, so coal miners and their families moved to the island to live there. More than 5000 people lived there and the population density of the island was 9 times of Tokyo. The first apartment in Japan was built there. This island is part of the world cultural heritage.

○ **Nagashima Spa Land** － I am going to introduce Nagashima Spa Land. It is located in Mie prefecture. It is a very famous amusement park. It has a lot of charm. It is famous for many scary attractions, for example, Steel Dragon, White Cyclone and Acro Bat. Do you know Steel Dragon? Steel Dragon is a very terrible roller coaster. It is possible to climb 97meters in addition to its maximum speed is about 153 kilometers per hour. Its mileage is about 2.479 meters. Steel Dragon was recognized by Guinnes Worlds Records as the world’s longest mileage. I was very scared when I heard this, so I thought I won’t ride this attraction. Acro Bat is another roller coaster, but it is a little unique. It makes you feel like you are flying along. I want to ride this attraction. As I said above, Nagashima Spa Land is a very great amusement park, but I have never been there. Why don’t you go to Nagashima Spa Land? You will surely enjoy. Thank you for listening to me.

○ **Gunkan-jima** － I want to introduce Hashima. Hashima is called Gunkanzima. This spot has special mood. We can go to Gunkanzima by ship, but we can’t sightsee a large part of the island. In the past, Gunkanzima was a good coal mine and many people lived there. Gunkanzima supported the development of Japan. Gunkanzima had a variety of facilities such as hospitals, schools, temples, theaters and so on. However, now no one lives there and it is in ruins even though many buildings such as high-rise apartments, harbor houses are left in the streets. While you are visiting Gunkanzima, you will certainly feel how they lived at that time. It is a very precious experience. We should keep the Gunkanzima for the future.

○ **Henn-na Hotel** － I introduce Henn-na Hotel in Kyushu. It was built in 2015. The administration fees range from 9000 yen to 16000 yen. There are 80 robots in the hotel. It is the first robot hotel in the world. The staff are all robots. A robot carries the baggage. Rooms are operated by way of facial recognition, so it isn’t necessary to have a key. There are various types of robots such as a doll type, a dinosaur type and a porter robot. All the equipment in the guest room can be operated with a tablet. Room types are standard, superior or deluxe. The

second Henn-na Hotel will open near Maihama Station in Chiba next March. A slogan of the hotel is “we promise you to keep changing”.

○ **Itsukushima Shrine** – I introduce Itsukushima Shrine. This is located in Miyajima, which is located to northwest of Hiroshima Prefecture. Miyajima is known as one of the three most beautiful scenic spots in Japan. Itsukushima Shrine is one of many sightseeing spots in Miyajima. It was built in 593. Itsukushima Shrine developed along with the prosperity of Heike. In Sengoku period, Itsukushima Shrine declined. However, when Mouri Motonari won the battle of Itsukushima and paid reverence to Itsukushima Shrine, it prospered again. The Otorii of Itsukushima Shrine is built out over the sea. When the tide is low, we are able to walk to the Otorii Gate. On the other hand, when it is high, it seems to be floating on water. The following is the reason why it has been built out over the sea. From olden times, Miyajima was a sacred place and people were not allowed to live there. So the shrine pavilions was built outside the island. Itsukushima Shrine was registered as a World Heritage Site as cultural heritage in 1996. There are four reasons why it has been registered as a World Heritage Site. First, it is a masterpiece to express the creative talent of mankind. Secondly, it shows the important exchanges in the value of the human. Thirdly, it is an architecture to illustrate the historically important period of mankind and the excellent examples of the landscape. Lastly, this relates explicitly to the existing tradition, thought, and faith.

○ **Nagashima Spa Land & Hakata Station** – I introduce Nagashima Spa Land and Hakata Station. There are two popular attractions in Nagashima Spa Land. One is Steel Dragon 2000. It is one of the top three giga coasters in the world. It is the world’s second tallest coaster whose top height is 97 meters and the length of its track is the longest in the world (2,479 meters). The other is Free Fall. It is 45 meters high and it drops vertically at 90 kilometers per hour. Next I introduce Hakata Station in Fukuoka. It’s the largest and busiest station in Kyushu, There are many restaurants in the station. I think Showraku is the best one. It is a restaurant specializing in motsu nabe, which is Hakata’s specialty dish. Another specialty dish of Hakata is Hakata ramen. You can enjoy Hakata ramen at Hakata Station. This concludes my presentation. Thank you for hearing quietly.

○ **Yufu Hot Spring** – I went to Yufu Hot Spring in Oita. It has the second largest number of spas in Japan. We can bathe in hot spring at low fees there. In addition, we can enjoy the view from the spa as it changes from season to season, which heals our fatigue of travel. In fact, the view from the spa was really beautiful. We stayed at a Japanese style hotel called the “Makiba no ie”. In this hotel, guest stay in independent cottages. The straw-thatched roof produces a retro atmosphere. The food served there was wonderful. We enjoyed beef and Yufuin vegetables for dinner. I also was impressed with the delicious taste. We had a good time there. I want to go to Yufu Hot Spring again someday.

○ **Dazaifu tenmangu** – Today, I’d like to tell you about Dazaifu tenmangu. I’m sure that you also visited it. But let’s remember together what it is like. Dazaifu tenmangu is located in Dazaifu City, Fukuoka. It is a shrine which is surrounded by a lot of beautiful nature. We can see 500 sakura trees in spring, and 1500 ume trees in fall. By the way, can you say who has been enshrined there? The answer is “Sugawara no Michizane”. He was intelligent, and he did great as a scholar, a politician and a litterateur. So now, he is called “Tenjin-sama”. In Fukui, there is a custom of

hanging a Tenjin zo (hanging scroll) in January.

○ **Atomic Bomb Dome** － Hello, everyone. Today, I'm talking about "Atomic Bomb Dome". I'd like to introduce Atomic Bomb Dome's history. Before Atomic Bomb fell and destroyed it, Atomic Bomb Dome was called "Hiroshima Prefectural Industrial Promotion Hall". This hall was built in 1915 by Jan Letzel who was a Czech architect. Therefore, it was a European-style building. A German exhibition was held there in 1919 and baumkuchen was sold there. I wanted to visit Hiroshima Prefectural Industrial Promotion Hall.

○ **UNIVERSAL STUDIOS JAPAN** － Have you ever been to "UNIVERSAL STUDIOS JAPAN"? It is an amusement park in Osaka. It opened on March 31, 2001, so this year marks the 15th anniversary of its opening. You should definitely go there so that you will experience special times. For example, there is a roller coaster called "The Flying Dinosaur" with the longest track and the biggest difference in height in the world. The parade is also special. The theme of this year is "RE-BORN". Especially in the Halloween season, it holds a various special events such as Halloween-Horror-Night, Universal-Surprise-Halloween and Magic-Trick-Or-Treat etc. You will no doubt enjoy them.

○ **Hashima** － Hashima is called Gunkan-jima. It is an uninhabited island now. However there were coal mines from Meiji era to Showa era. In the past, the population density there was higher than that of Tokyo. In 2015 it was registered as a World Cultural Heritage.

○ **Henn-na Hotel** － I will talk about "Henn-na Hotel". It is located in Nagasaki. There are many robots there. This hotel is totally run by robots. Robots take care of check-in and check-out there. A robot arm called the robot clerk takes care of keeping our luggage in the locker. There is also a dinosaur-like robot at the entrance of the hotel.

○ **Izumo Taisha** － I will go to Izumo City on a school trip. Izumo City is famous for Izumo Grand Shrine. In Japan's old calendar, October is called the tenth month of the lunar calendar. Many gods come to Izumo Grand Shrine. Because there are also Izumo soba and thermal springs, I want to enjoy them. I want to have a good time.

○ **Hankyu Ferry & 99 Island Aquarium** － From October 24 to 27, I will go on a study tour. It is the study tour, but I think this trip is like a sightseeing tour. There is a training program for students at the college of technology on the first day only. I will introduce the following two things. First, I will talk about the Hankyu ferry. The 195m-long large ferry sails along the Seto Inland Sea. I am looking forward to traveling by sea because I have never done it before. However, I easily get seasick, so I'm going to bring a motion sickness drug and an etiquette bag. Second, I will talk about "99 island Aquarium". Unfortunately there aren't penguins there. You see a picture of a hammerhead shark on the official website but maybe it isn't there. However, I think I can see unusual sea animals through the backyard tour. Through this tour, I can learn a lot and grow, seeing and hearing a lot of things.

○ **Izumo Taisha** － I'm going to go to Izumo Oyashiro. Izumo Oyashiro is a big shrine that is located in Shimane. Okuninushi no Mikoto is deified there. He is also called Daikokuten. He is a member of Shichifukujin. His father is a very famous god. Long ago, he killed an eight-headed, eight-tailed serpent. His sister is the head of the gods in Japan. Her name is

Amaterasu Oomikami. And Okuninushi no Mikoto's father is Susanoo no Mikoto. Okuninushi no Mikoto is very famous and popular as the god of matchmaking. He forms love connections, business connections and so on. In October, almost all gods in Japan gather in Izumo Oyashiro from all over Japan. So, October is also called "Kaminashizuki"(a month without gods). However, it is called "Kamiarizuki"(a month with gods) in Izumo. It is said that the gods gather to form connection. Would you like to visit the shrine to get some connections?

○ **Kyushu University** – Kyushu University is a university in Fukuoka. There are six campuses, 12 departments in this university. This university assumed university setting age 1911, but it has the antecedent school. Therefore the foundation year is set in 1867. It conducts the 21st century program. Students who participate in this program can take classes from almost all departments. At this university, they have the event called "Kyudaisai"in November. More than 100 food booths stand and various events are held every year in classrooms and on a stage. Unfortunately, we cannot participate in this event.

○ **Universal Studios Japan** – Do you know Universal Studios Japan? I think that almost all Japanese know this amusement park, but they may not know what it is like at the time of Halloween. So, I'd like to tell you about three things you can experience at Universal Studios Japan in Halloween. First, an event called "Horror Night" is held. They say that it is much scarier than last year. Second, we can see zombies' dance. Suddenly music begins to play, zombies gather and they dance to the music through the park. It is an amazing and wonderful performance. And finally, you can dress up as your favorite character for Halloween. Go to Universal Studios Japan and enjoy the best Halloween in Japan.

○ **Fukuoka Airport** – Today, I introduce "Fukuoka airport"to you. It is located very near the Fukuoka urban area. Fukuoka City Subway lines and the Kyushu Highway provide easy access to the airport. It is the busiest single-runway airport in Japan, with about 170,000 annual aircraft movements, and it is the third largest passenger handling airport in Japan after Haneda and Narita. There are many shops, including shops selling typical souvenirs, gadgets, Fukuoka crafts, and air travel necessities. I flew from Fukuoka to the Nagoya Airport. This was the first time for me to travel by air.

○ **Hankyu Ferry Yamato** – There are various types of Hankyu Ferries. One of them is a ferry named Yamato. We will board it, so I will introduce the history of Yamato. It was built in 1988 as a substitute of New Harima Ferry. The weight of Yamato is lighter than that of New Ferry Harima, but the full length of the ferry is the longest of all ferries crossing Seto inland sea. Yamato links Kyushu with Kobe and provides us with comfortable cruising. When we are on board, it seems like a seaside resort hotel. We can enjoy luxurious time to spend seeing the sea. Yamato has various guest-rooms, so you can select the room to stay, depending on the price you can afford. In addition, there are shops and restaurants. Especially, I am looking forward to seeing the night view on the deck of Yamato. Our teacher, Mr. Hiroshige says, "We will be able to see the light-up view", so I really want to see it with my classmates.

○ **Abenoharukas** – I want to go to Abenoharukas in Osaka. It is the best high-rise building, which is 300 meters high, in Japan. I extract a passage from the official homepage to let you know its wonderfulness. "An indoor gallery constructed of glass all around from the floor to the ceiling. You can enjoy a panoramic view of the Osaka plain and other features

from the height of approximately 300 meters above the ground. It is a “space of wonderment” where you will feel as if you are walking in the air.” I am looking forward to going to Abenoharukas from now on.

○ **Izumo Oyashiro** − I am going to Izumo Oyashiro. It is a national treasure. The shrine is 24 meters tall, thus the tallest in Japan. The original building is over 1000 years old, so it was one of the oldest shrines in Japan but the present one was rebuilt in 1744. It is dedicated to Ohkuninushi-no-ohkami. He is the god of relationships, so people come here to pray for a good relationship. In the tenth month of the lunar calendar, Shinto gods from all over Japan gather there. There is also Torii. It is 23 meters high, so it is one of the largest Toriis in Japan. There are four ones. Please do go and see it yourself too.

○ **Huis Ten Bosch** − I’m going to introduce Huis Ten Bosch. Huis Ten Bosch means “house of the forest” in Dutch. Huis Ten Bosch is designed with a motif of Europe. It is located in Nagasaki prefecture, Japan. There are theme parks and lodging facilities there. And there are many kinds of restaurants there, so visitors can enjoy French food, Japanese food, fast food and others. Of course, there are many amusements in Huis Ten Bosch. I’ll tell you about my three recommended amusements. First, it is the attraction “Gray Odyssey”. You can have a fantastic experience by this attraction. I can’t bear to think of it. Probably you, too. Second, it is the attraction “Horizon Adventure Plus”. You can experience a deluge occurred in the Netherlands. To give force, this attraction uses a huge screen, heavy sounds, lighting and digital devices, and eight hundred tons of water in one performance. Because it is a simple story, you can enjoy this attraction with family. Third, it is the illumination “Kingdom of the light”. This illumination uses about thirteen million electric bulbs. It is one of the world’s biggest illuminations. By all means, please go there as well too.

○ **Nagashima Spa Land** − I introduce Nagashima Spa Land. It is in the north of Mie prefecture. It is the second largest amusement park in Japan. It started in May, 1996. There are many attractions. Many of them are so crazy. I’ll tell you about two attractions. One is “Steel Dragon 2000”. It has started since August 1, 2000. It is 97 meters high and it is the highest in Japan. It has a span of 2497 meters and it is the longest in the world, so it has a Guinness record. It is a really thrilling attraction. This attraction goes 153 kilometers per hour and you can enjoy the thrill of Guinness. The other is “White Cyclone”. It is made of wood. You can enjoy the sound of wood and it is so scary. They are very popular in Nagashima Spa Land. If you go to Nagashima Spa Land, you should ride these attractions.

○ **Hen-na Hotel** − What I want to introduce to you is the Strange Hotel. It is the first hotel to introduce advanced technology in the world. The main staff are robots. Even while working efficiently, you can enjoy conversation with the robots who feel the warmth. At the front desk, multi-lingual robots will make the procedure of check-in and check-out. In the cloakroom, a robot arm keeps your luggage and baggage. Porter robots will carry your baggage to the room. In addition, environmentally-friendly, modern and smart equipment provides the comfort and pleasure of the stay. Lighting is automatically turned off by the human sense of the sensor. It is also possible to switch the operation of the remote control. Since face authentication is used in front of the guest-room, you don’t need to carry the key. These various facilities will bring the comfort and excitement to us.

○ **Nagashima Spa Land** − I introduce Nagashima Spa land. It is located in Kuwana, Mie Prefecture. It is a

very crazy amusement park because there are many roller coasters. For example, there are roller coasters such as Steel Dragon, White Cyclone, and Ultra Twister. Especially, Steel Dragon is 97 meters high at the top of the loop and its maximum depth is about 94 meters so it is very scary. The top of the loop of Steel Dragon is higher than that of Ferris wheel. Its full length is 2,479 meters and it is the longest roller coaster in the world. I cannot understand the feelings of people willing to ride it. Its riding capacity is 28 people. White Cyclone is also scary. It is 45 meters high at the top of the loop and its full speed is 102 km/h. It is inferior to Steel Dragon in height and speed, but its sound and vibration inspires fear. Its full length is 1,715 meters. White Cyclone, as its name suggests, is a vehicle like cyclone. Its riding capacity is 28 people. However, it is not the only heavy vehicle. There is a vehicle ride to feel free. For example, there is Ferris wheel. Ferris wheel of Nagashima Spa land is 85 meters tall. One gondola can hold up to 6 people. There are 60 gondolas. It takes 15 minutes to go around. We enjoy beautiful views around Nagashima Spa land. At night, it is more enjoyable because we can see the brilliant lights of the city. Please try to go there and enjoy everything.

○ **Nagashima Spa Land** − The theme of my presentation is the introduction of a place which I visited on a training trip. I went to Nagashima Spa Land on October 28. It is located in Kuwana Nagashima-cho, Mie Prefecture. There are a lot of attractions there. Five famous theme parks are in Japan. In them, there are a spider man and a special mouse. The rate of this theme park is the lowest of these theme parks. There are fifty one kinds of attractions in this theme park. I introduce some attractions from those. First, I introduce Steel Dragon 2000. Steel Dragon 2000 is one of just three gigacoasters existing in the world. It's the world's second tallest coaster at ninety seven meters, and the longest with track of two thousand four hundred seventy nine meters. Appropriately launched in 2000, the Year of The Dragon, Steel Dragon 2000 will make you scream as it hits a peak speed of one hundred fifty three km/hour during a thrilling three minute twelve second ride. Second, I introduce Acrobat. It is one of the world's largest premature start roller coasters. The full length is one thousand twenty one meters. It glides through the air at a maximum speed of ninety km/hour. The course has a three hundred sixty-degree somersault loop, and it is a new sense of attraction. My recommendation is Steel Dragon 2000. The charm of Nagashima Spa Land is not only attractions. This theme park has a lot of delicious food such as hamburger, steak, and curry. It is the very good place that anyone can enjoy. Please go there once.

○ **Izumo Taisha** − I will introduce Izumo Taisha. Izumo Taisha is one of the oldest shrines in Japan. It is located in Shimane. Izumo Taisha is a very holy place. The rule here is slightly different from a normal rule. One of those is how to worship. At most shrines, visitors do two bows, two handclaps, and one bow. At Izumo Taisha, however, visitors must do two bows, four handclaps, and one bow. From this difference you can understand that Izumo Taisha is special. Visit this special place and feel the spiritual air.

○ **Gunkan Jima** − I will introduce the island called Warship Island in English. It is a deserted island, which is located in Nagasaki, Nagasaki Prefecture, and its area is 0.063 square kilometers. It is a World heritage site as the industrial revolution heritage of Meiji Japan. It was used as one of the shooting location of the live-action film "Attack on Titan". Next, I will introduce its history. In 1810, coal was discovered there. Mitubishi Corporation purchased the whole

island and the excavation of coal was initiated in 1890. As the coal there was in good quality, it supported the modernization of Japan. With the increase in coal shipments and rapid growth, 5267 people lived there in 1960. The population density at that time was the highest in the world. There were hospitals, schools, shrines, police stations, movie theaters and barber shops there. However, more than half of the island was the mining area. When the main energy source changed from coal to oil, it began to decline. The coal mine was closed on January 15, 1974 and all the residents left there on April 20, 1974, which made the island a deserted one. This concludes the introduction of Warship Island.

○ **UMEDA SKY BUILDING** － I will introduce UMEDA SKY BUILDING. It takes about 9 minutes to UMEDA SKY BUILDING from Osaka Station on foot. I think the charm of this building is the beautiful views from it. Especially, the views from the KUCHU TEIEN (hanging garden) are magnificent. Enjoying 360-degree panoramic views from a glass elevator, you can go up to the 35th floor. From there you can transfer to a tube-type, see-through escalator to the 39th floor leading to the open-air roof top “Sky Walk” where you can enjoy the magnificent views, feeling the wind on your skin. You can enjoy “Rumi Sky Walk” (illuminated Sky Walk) at night. You can also enjoy delicious food and drink with breathtaking views.

○ **Itsukushima Shrine** － I introduce Itsukushima Shrine. Itsukushima Shrine is located in Hiroshima. Itsukushima shrine is said to have been founded in 593. It worships Ichikishima-hime-no-mikoto, Tagorihime-no-mikoto and Tatsukihime-no-mikoto. Since the god of the sea resides in the shrine, many people visit it in order to pray for marine safety. In addition, Since Kiyomori Taira built it, Motonari Mori won the battle of Itsukushima, and Hideyoshi Toyotomi built a large building, many people go there to pray for victory. The shrine sells a lot of charms and amulets for “safety of family”, “safe traveling”, “academic achievement”, “business achievement”, and so on. The most popular charm is a shamoji-shaped charm for victory.

○ **Izumo Taisha** － I introduce Izumo Taisha. It is located in Izumo, Shimane Prefecture. It was built over a thousand years ago. The size is about 27,000 square meters, and it has enshrined Okuninushi Okami. The current main shrine was built in 1744. It is 24 meters tall. The oldest shrine is made of plain wood. The Kagra-den features the largest Shimenawa (Shinto sacred straw rope) in Japan. It is 13 meters long and 9 meters diameter and it weighs around 5 tons. There is an avenue of ancient pine trees approaching the entrance, which is also referred to as the “Matsunobara” and it is selected as one of the 100 best pine trees. October in the lunar calendar is called Kannazuki and in Izumo it is called Kamiarizuki in reverse because Gods in Japan gather in Izumo.

○ **Izumo Taisha** － Our team went to Izumo Taisha as a self-trip. Izumo city is known as a city of God. Even now, there are many old shrines everywhere, and the center of them is Izumo Taisha. The shrine enshrines Okuninushi Okami. He is God that governs the fate. There is a legend that Gods who gathered from all over Japan discussed marriage of people. So Today, people come to the marriage shrine from all over Japan. The place gives the hope to people who have never been blessed with fate. With the hope in my heart, I will close this speech. Thank you for listening.

○ **Den-Den Town** － Do you like Anime or PCs? Not only students, some of teachers also like them. In Japan, Akihabara in Tokyo is called the holy place of

them. It's the largest scale in Japan, and it is always crowded. Foreign people often go there, too. Then, in Osaka, is there a place such as Akihabara? Of course! It is Denden-Town. It's also called "Ota-Road", and it is located in between Nippon-Bashi and Ebisucho. In Denden-Town, there are many stores selling parts of PCs, PCs, Anime, and so on. I often go to Denden-Town to visit stores of PCs. But, whenever I go there, I find stores which I never visit. If you are interested in PCs or Anime, I suggest that you go there.

〈付録 2〉

平成 28 年度 3M英語プレゼンテーション感想文（研修旅行編）

（学生氏名は省略）

〇僕はこのスピーチをやってよかったと思います。理由はこのスピーチのおかげで普段あまり喋らない子たちがどこに行ったかとかどう思ったかが分かったからです。今後もこんな感じのであればやってもいいと思います。

〇まず、日本語で文章を考えて、それを英語に直していって原稿を作成したが、文脈を考えて、言葉を変換しないといけなく、難しすぎる英語は、なかなか伝わらないので、それを考えながら言葉選びをするのが難しかった。本番では、緊張してしまって、思い通りのプレゼンが出来なかった。しっかりと練習をして、本番に臨むことは、非常に大切だと感じた発表であった。

〇英語を使ってプレゼンをする機会はほぼないので貴重な経験になったと思う。ネタにする研修旅行というのもとてもやりやすく、出発前は旅行の楽しみ方が増えるし、出発後も様々な思い出に浸ることができ、楽しむことができた。また、別の言語で話すので、自分たちの伝えたいことをいかにスライドに表すか工夫し、画像だけのスライドを作るという新しい発想ができた。苦労した点としては、やはり自分の伝えたい言葉を英語にする作業が挙げられる。しかしこれが学習なので、英語を用いたプレゼン発表はぜひともまたやってみたいと思う。

〇 pp の作成がほとんど見学旅行後にしか出来ないようなことばかりなので授業中の pp 作成の時間を見学旅行後に多くした方がいいと思った。留年生など見学旅行に必ず全員行く訳では無いので困ると思う。発表の流れや観客が聞く姿勢を整えないと発表がまとまらないと思った。

〇日本語で作ったのを英語に直して言ったが、おもったより長い文にならなくてびっくりした。簡潔に書くことも大事だが、簡単な英語をつかってくわしくわかりやすく長く書くのも大事なのがわかった。プレゼンや書くことを決める時間は研修旅行前におおくやっていた感じがしたが研修旅行後に少ない感じがした。行ってみないとわからないことも多いので、行ってからの行動時間を英語の時間にとって欲しかった。あと、研修旅行のことはみんなが知っていることなのでここのグループはここの会社などと限定したほうが詳しくかけるし、被りがないので全体として面白いプレゼンになると思う。

〇今回の私のグループのプレゼンの反省すべき点は、パワーポイントを作っただけで満足し、原稿を書いたり打ち合わせをしたりといったことをまったくやらなかったことです。プレゼンをする前は、何とかなるだろうと楽観的に考えていましたが、いざ教壇に立つとぐだぐだになってしまいました。今回のプレゼンで最も印象に残ったグループは松田の率いるグループのプレゼンでした。彼らは、自分たちの行った土地の魅力をアニメの映像を使ったりしてとても面白く伝えていました。私には、彼らのように自分の好きな物を貫く潔さはないのでただただ感心してしまいました。次にこのような機会があれば、松田たちのように人の興味を引いて楽しんでもらえるようなプレゼンがしたいです。

〇このプレゼンを行って難しかったものは、複雑な日本語を聞いている人が簡単に理解できるような英語に変換することでした。ほかのグループでよかったと思ったものは、動画などを使って相手の興味を引くような発表をしていたことです。このプレゼンで学んだのは、英語で発表す

るときにどのような英語を使ったらよいか知れたことです。

〇英語で伝えるということが難しいと分かった。日本語で原稿を考えても英語に訳すのが大変で、日本語だとうまく言えるけど英語だとしっくりこないところもあって、ただ単に単語を引っ張ってきてもいいものにならないと感じた。発表でせっかく考えた原稿を正しくしっかり読もうとしすぎて目線が聴衆ではなく、原稿にいってしまって残念だった。プレゼンを作るのに精一杯で練習なしでやったため、ぐだぐだになったところもあり、反省点だと思った。

〇英語でのプレゼンは思った以上に難しく聞き手にうまく伝わるようにかつなるべく簡単な文法を使って聞きやすくしたつもりがなかなかうまくいきませんでした。ほかのグループを見ていて各グループによってさまざまなプレゼンの仕方があって今後のプレゼンの参考にしていきたいです。

〇英語でプレゼンをしたのは初めてでした。パワーポイントについて、他の班は画像を多く使っていたため、聴衆の注意を引けていたが、僕の班はあまり画像を使っていなかったため、聴衆の興味を引けていなかったと感じた。原稿を作るときは、聴衆が聞き取れないような難しい単語を使わないよう心がけた。しかし、班員全員がそうしたわけではなかったので、もう少し打ち合わせをしておけばよかったと思う。今回のテーマは研修旅行だったため、旅行自体が終わらなければ原稿が書けなかったので、次に英語のプレゼンは、初回から原稿が練れるテーマでしたい。

〇発表は大きな声で出来ていたと思う。旅行に行く前の二回の授業より、旅行に行ってからの時間が欲しかった。スライドをもっと見やすく作れたと思う。本番の前に一度チームで通してみる必要があると思った。

〇まだプレゼンをする機会が少ないので、人前でプレゼンをする練習ができてよかった。用意していた英文が思っていたより早く読み終わってしまい、引き延ばそうとかたことの英語をしゃべってしまったので、事前に時間をはかってしっかり準備しなければならないと思った。

〇今回のプレゼンは課題にするべきところが多くとても為になった。パワーポイントを使ってプレゼンをするのはそんなに珍しくないが英語でスピーチをするのは英語の授業だけしかないので貴重な体験をした。自分の所のグループはパワーポイントに文字を書かず写真を見せてそれについて説明するというスタンスで発表した。写真を英語で説明するのにとても苦労した。詳しい説明をしないと伝わりにくいし、詳しくしすぎても英語が聞き取りにくくなるのでだめなのでそこの線引きをするのがとても難しかった。でもこのグループは旅行中のハプニングが多かったので話題に尽きることはなかったしそのハプニングを生かして冗談混じりに聞いている方を楽しませることができたのがとてもよかった。写真に関してはもうちょいいろんな方向からの写真があってもいいかなと思った。これらの課題点を生かして次のプレゼンが英語でなくともいいプレゼンになるように心がけたい。

〇今回のプレゼンテーションではこういった経験が少なかったことから話すテンポなど聞く側のことを考えながらプレゼンすることができませんでした。準備のほうではパワーポイントのスライドに図などを入れるなどをして、もっとわかりやすくできたと思います。

〇今回研修旅行についてのレポートを通して、まずはこのような機会を設けていただき、非常にうれしいです。準備の段階では、パワーポイントの完成度は高かったのではないかと思います。写真を多用し、旅行が素晴らしかったことを伝えられたのではないかと思います。発表原稿に関しては、できる限り伝えたいことを盛り込むように心がけました。実際の発表では、パワーポイントをすべて見せることができませんでしたが、それ以外はスムーズに発表を進めることができました。できるだけ発音やイントネーションに気を配り発表しました。人前で立って発表するのはとても緊張しますが、これからもやる機会はおおいので、積極的に取り組んでいきたいです。

〇事前に２回授業しましたが、そこまでやることが見つか

らずむしろ旅行後にもっと授業を増やして欲しかったというのが率直な感想です。本番は慣れないことをしたので緊張しましたが、原稿があったのでそれに沿って話すことができました。次機会があれば原稿を見ずに聴衆の目を見て話せればいいなと思います。

〇今回のプレゼン準備で、まず研修旅行の写真が圧倒的に不足していたのが印象に残っています。写真から、文章を起こそうとしていたのでより意識して写真を撮っていく必要があったと思いました。

〇まず、僕は 11 月 10 日の英語の授業を風邪で欠席したので、実際のプレゼンテーション発表の感想・反省と他グループの発表の感想は省きます。僕の主な役割はプレゼンテーション用の PowerPoint の作成でした。文書や使用する写真・資料の内容は全員で考えましたが、文字の配列のまとめや見易さの調整はほぼ僕が行いました。客観的な意見も取り入れ､結構頑張りました。反省すべき点としては､後日他グループの作成した PowerPoint を見せてもらったのですが、まずは内容の量が少なかったこと。考えればもっといろいろな案も出せたはずでしたが、楽をしようと作業が疎かになっていました。次に、使用する写真や資料が少なく、工夫も無かったこと。事前に準備しているグループもあったと聞いていますが、自分たちは授業の間でしか作業をしておらず、そのせいでこういった工夫も出来ずに発表当日を迎えてしまったのだと思います。こういった点を踏まえ、今後プレゼンテーションを行う際には、自分たちの意見を遠慮せず伝え合うことを意識しながら、良い作品が出来るように努力を惜しまないことを頑張りたいです。

〇この授業のよかったところ：・英語のプレゼンのやり方、決まり文句を知れたこと・思い出を振り返られたこと・自由に活動できたこと。プレゼンの改善点・よかったところ：・前を向いてしゃべれなかったこと・自分たちが感じたことをもっと入れればよかった・写真をいっぱい使えたところはよかった・文字をできる限り減らしてパワーポイントを作ったこと。苦労したこと：・自分がしゃべれるような英語の言い回しを考えること・聞き取りやすいようにしゃべること。ほかの班の参考にしたい点：・動画で楽しく伝えていた点・笑えたところ。

〇初めと終わりの決まりの言葉を忘れてしまった。他の班の発表を見ての感想：・どの班もきちんとしていた。普段の授業と違ってよかった点：・みんなが話しているところを聞けて楽しかった・緊張したけど楽しかった

〇自主研修旅行で北海道に行ったのは自分たちのグループだけだったので、できる限り簡単な表現で、それでいて具体的に説明しようと意識しながら原稿を作りました。パワーポイントでは写真だけにスペースを割くことができ、北海道のイメージをより伝えることができたと思います。また少しジョークを入れることで発表にメリハリを出し、印象づけることもできたと思います。

〇初めと終わりの定型文を忘れてしまった。他の班はきちんとしていたのですごいと思った。動画を入れている班とかもあって驚いた。いつもの授業と違って、前で発表するのは緊張したけど楽しかった。

〇自分が担当した部分は陸上自衛隊広報館です。自主研修旅行の行き先を決める際に強く希望した場所でありました。まず、パワーポイントのスライドをつくるにあたって必要なのは施設の写真です。その点広報館は実際に「見て」楽しむ施設であるので写真は豊富に撮ることができました。展示内容や陸上自衛隊という組織についての簡単な説明もスライドに入れましたが、これにおいても自分の記憶ないしネットの情報でも十分に説明できるものであったので別段苦労はしませんでした。次にスピーチ内容に関してです。内容はスライドの流れに準ずる形で施設名称→組織の説明→展示内容→展示物の具体例を挙げた説明といったものになりました。「自衛隊」の英語での説明は（一応「軍隊」でないので）意外と難しかったです。結局、“Japanese Army”と書きましたが。今回の発表では、同じ班である松田英孝の発表が一番良いと感じました。実際しゃべる言葉の数を少なくして、なおかつ明確に目的の伝わる画像、動画を用いることで聞く側にとって非常に伝わりやすい発表になっていたと感じました。

〇研修旅行についての英語でのプレゼンテーションを振り返って、映像や音は、見ている人に想像以上の影響力を持つことが分かりました。自分は最初「映像を載せるのはどうなのか」と思っており、本番でどうなるか不安でしたが、うまく聴衆を引き込むことに成功し、編集技術も相まって、映像の力は凄いなと感じました。また失敗した点について、慣れない英語でのプレゼンテーションで複雑な説明をしてしまったこと、また発表の練習が足りなかったと痛切に感じました。皆忙しかったこともありますが、原稿あわせや発表練習を殆ど行うことなく本番を迎えてしまったので、発表での口調やプレゼンのシート切り替え時に支障が出てしまい、全体的におぼつかないプレゼンテーションになってしまったかと思います。また今度このような発表を行う機会があれば、発表時にミスなどが出ることのないように練習をしっかり行おうと思います。

〇このプレゼンを準備するにあたって、「普段使わないような独特の言い方」と「どのような順序で切り出すとわかりやすいプレゼンになるか」ということを学べました。特に言い方については、自分のいる立場や状況などでそれぞれ適した言い方があることを知りました。今後どのくらい英語でのプレゼンの機会があるかわかりませんが、今回の経験を活かしていきたいと思います。

〇・話しているときに詰まってしまったので、次回はそれをなくしたい。・パワポに映像を使っているグループがいたのですごいと思った。・僕は英語が苦手なので原稿を作るのが大変だった。

〇プレゼンでは最初のインパクトが大事なのだと思いました。プレゼンの順番が最後の方になると、見ている人もマンネリ化してきてあまり集中できなくなります。そこで、Power point などの最初のスライドを印象強くすることで見ている人の注意を引けるのだと気づきました。また真面目なプレゼンだけでなく、共感しやすいもの、ネタ枠などを交えて発表すれば、見ている人の関心が自分に向きます。プレゼンでまず重要なのは「見ている人の関心を掴むこと」だと実感しました。身振り手振りも重要な要素になると思いました。反省点としては、カンペに集中しすぎて見ている人の反応を見ながら発表できなかったことです。反応を見れば発表内容にアドリブを加えて方向転換してよりよいプレゼンにできたものと思います。事前に練習で一回通すことはやはり大事なのだと思いました。工夫した点は、見ている人の反応を予測しながらプレゼンを作ったことです。実際のプレゼンを予測して、スライドを修正・追加を多く行いました。

〇今回のプレゼンテーションを終えて、自分たちの班のプレゼンはいろいろと足りないところが多いなと思いました。まず、原稿を読む練習などをあまりしていなかったことです。他の班は原稿をスムーズに読み進めていてとても見やすいプレゼンだったと思うけれど、自分たちの班は結構読み間違えたりしてグダグダになっていました。また、プレゼンの写真が圧倒的に少なかったです。もっと研修旅行中に写真を撮っておけばよかったと今更ながら思います。プレゼンの中で一番良かったと思うのは松田や藤たちの班です。実際の写真やアニメの映像を比べながらのプレゼンはとても面白かったです。プレゼンすることは今まであまり無かったので今回のことはいろいろと勉強になりました。またプレゼンする機会があれば今回の反省を活かかせていければいいなと思います。

〇今回の発表を終えて、英語で思っていることをそのまま伝えることの難しさと自分の勉強不足が改めて分かりました。さらに、発表をするときの自分は原稿を見てばかりで全然聴衆の方を見て話せていなかったと思います。次の機会があるのならば、これらの失敗を踏まえ、分かりやすく聞きやすい発表ができるように努めたいです。

〇・プレゼンだったから短い言葉で分かりやすい英文にしようとしたけど難しかった。・映像を使ったプレゼンは分かりやすくてインパクトがあって見ごたえがあった。・人前で話すのは緊張してうまく話せないので、出来れば数は少ない方がいい。・自分の英語で伝わっているのかわからなくて少し困った。

〇苦労した点：デジカメで撮った写真が思った以上に少なく、種類も多くなかったため、軽く出てくるものだと思っ

ていたネタを軽く絞らなければいけなかった点。いざやってみて感じた点：やはり台詞を覚えないと、聞いてもらっている人にアイコンタクトはできない点。ほかの人を見て思った点：自分の班の聖地巡礼記事や、ほかの班の旅行記を見て、動画も悪くないなと思った点。

〇この授業形態のよかったところ：・英語でのプレゼンを体験できたこと・調べて出てきた言葉を英語に直す練習ができてよかった。苦労した点：・研修旅行が終わってからの期間が短く、その前に思っていたこととずれていて直すのに苦労した・思っていたより英訳が難しかった。プレゼンの改善点：・もう少しスライドを増やすべきだと思った・もっと文を推敲するべきと思った。ほかの班を見て思ったこと：・動画を用いて発表していたのがすげーと思った・スライドのデザインももっと考えればよかった。

〇私は今回の研修旅行に参加できなかったのでプレゼンの内容がみんなのよりも少し薄いものになってしまいました。研修旅行に参加できなかった心境などをもうちょっと付け加えた方がよかったかなと思いました。また、プレゼン後の反省として、プレゼンの練習量が足りなかったと感じました。次回があれば、しっかりとプレゼンの練習をしてから本番に臨みたいです。他の班のプレゼンはみんなの個性がそれぞれ出ていてよかったと思いました。特にアニメを流した班のインパクトがすごかったです。

〇今回の発表で一番大変だったのは、寄生虫の英語訳でした。難しい単語をたくさん使いました。次発表をする機会があったら、なるべく簡単な単語を使って文章を作りたいと思いました。

〇今回の英語の授業では、研修旅行で自分達の行った場所についてのプレゼンテーションを行いました。私は自主研修に参加しなかったのでグループとしての発表はしていませんが、他のグループの発表を聴いて、写真や文字を話に合わせて小出しにしたり、退屈しかけている聴衆の気を引くために途中で可笑しい画像を放り込む等の工夫が見られ、これからのプレゼンの参考にしようと思いました。

〇今回のプレゼンでは、スライド内になるべく文字を置かず、写真をメインで魅せるレイアウトにして、それらについての情報を口頭で説明する形を取ることで、聴講者たちが見ていて楽しいプレゼンになったのではないかと思います。発表原稿はスライドに表示される写真についての具体的な情報をメインに、その他の補足情報を付け足す形で作り、聞いていて飽きないように意識して作りました。反省すべき点としては、少々、原稿の英文の発音の調べが甘かったところがあり、詰まり気味のスピーチになってしまった点なので、次の機会があれば、丁寧な準備の上発表に望みたいです。

〈付録 3〉

平成 28 年度 3 E I 英語プレゼンテーション感想文(研修旅行編)

（学生氏名は省略）

〇プレゼンは難しいと思いました。特に慣れていない英語でプレゼンをするのはもっと難しかったです。英語でプレゼンを上手にするには、まず英語ができるのは前提で、そこから話す技術を練習してつけていかなければいけないのだと感じました。

〇今回、初めて英語でプレゼンをして、（しかもトップバッター）とても緊張しましたが、どうにか終わらせることができ、ほっとしました。プレゼンするにあたり、練習では、流暢に読めることと、伝えたいことを主張できるように頑張りました。

〇本番では早口になってしまったかもしれませんでしたが、練習の成果が出てよかったなあと思っています。自分の発表も終わり、他の人の発表を聞いていて、とてもスライドが凝ってある人や、原稿を見ずにプレゼンしている人がいて自分ももう少しなんかできたな…と少し反省しました。次、英語でプレゼンするときは、今回より良いプレゼンになるよう、工夫したいです。

〇私は後半の班別行動ではあまりたくさんのところに行

かなかったので、みんなのスピーチを聞いて楽しそうだなと思いました。自分が行ったことのある場所もあったのですが、行ったことのない場所もたくさんあったので、いつか自分も行ってみたいとおもいました。英語でのスピーチはあまりやったことがなかったのでとても緊張してしまってすらすらと読めなかったのですが、みんなすらすらとはっきり話していたのですごいなと思いました。

〇今回のプレゼン発表会で、自分が修学旅行で行ってはいるもののあまり知識はなかった場所や、個人の旅行で行ったさまざまな場所についての知識を少しではあるが得ることができた。また、自分のプレゼンを造る中でいろいろな英語の表現方法や、単語も学習することができ、良かった。

〇今回、研修旅行の発表を英語で行って、パワーポイントの写真があったためある程度話が分かったが、聞くだけだとあまり理解できていないことに気づいた。これをきっかけに英語力を付けたいと思った。

〇今回のような英語を使用したプレゼンテーションは初めてであり、普段とは勝手が異なるため戸惑う点もありましたが発表ができたので良かったと思っています。この経験をもとに、今後プレゼンを行う際はよりよい発表ができるように工夫を施していきたいと考えています。

〇 Power point を作ったときにどれくらい時間がかかるか一回練習して時間も２，３分とちょうどいいぐらいにできていたのに実際にみんなの前で話すときは緊張してしまって早口になり少し残念です。英語で自分の思うように書くのは大変難しくわからない単語をたくさん使ったのでとても勉強になったと思います。僕はリスニングが苦手なのでみんなの発表を聞いても単語もわからないし、なにを言っているのかわからなかった。しかしたまに言っていることがわかるところもありうれしかったです。

〇英語でプレゼンを行うのは初めてだったので、どういう単語を使えば伝わりやすいかなど考えることがあって難しかった。他の人のプレゼンを見て、英語だったので分からないところも多かったがある程度内容を聞き取れたのでよかった。

〇今回の英語のプレゼンは初めての英語でのスピーチだったのでいつにも増して緊張しました。でも思いのほか大きいミスをせずに乗り切ることができてよかったです。他の人のスピーチはみんな聞き取りやすい速さでスピーチをしていたので内容をしっかり理解しながら聞き取ることができました。また台本を見ずにスピーチしていた人がいてとても驚きました。英語のスピーチを通して、僕は圧倒的に単語力が不足していることを再確認したのでこれから単語力をもっとつけていき、次、英語のスピーチをする際は、今よりも、もっといい物を作成したいと思います。

〇今回、英語でプレゼンテーションをクラスで行ってみて単純に人のプレゼンを聞くことが凄く面白いなと思いました。クラス研修で行ったところはもちろん、各々で向かった個人研修地の話は自分の知らないことだらけでとても興味深い話がたくさん聞けました。英語でのプレゼンだったので聞きなれない単語・熟語に耳が引っかかる所もありましたが､何とか聞き取れたので良かったです。また､自分のプレゼンも少ない練習時間のわりには上手くできたので安心しました。

〇まず、研修旅行で訪れた場所について１分間のスピーチをすると聞いたときは、コンテストで７分のスピーチを行ったこともあり、緊張しないだろうと思っていました。しかし実際に前に立つと、覚えたと思ったはずの原稿が頭から飛んでしまいました。その後なんとか思い出して話せたとは思っていますが､少し焦ってしまいました。やはり､スピーチは難しいなと改めて感じます。また、人のスピーチからは、それぞれの場所での楽しさや思い出が伝わってきて面白かったです。

〇今回、初めて英語でプレゼンテーションを行ったのでとても緊張しました。普段あまり自分で英文を書くことがないので原稿を考えるのが一番難しかったです。それでも何とかなったのでよかったです。また、ほかの人たちのプレ

ゼンテーションも見てみて参考になるプレゼンテーションが多くありました。とてもいい経験ができたので、今回のことを糧にしてまた英文を書いたりプレゼンテーションを行うときに活かしたいと思います。

〇英語でプレゼンするのは初めてだったので、日本語のプレゼンをするよりも緊張しました。また、皆のプレゼンを意外に聞き取ることが出来て、自分でもびっくりしました。将来、海外の人の前で英語でプレゼンすることもあるかもしれないので、いい経験になりました。

〇このプレゼンを通して、英語で他の人に物を伝えるということの面白さが感じられた。他の人のプレゼンをみて、自分のプレゼンの物足りないところを感じることができた。これを踏まえて、次そういう機会があったとき、自分のプレゼンをよりいいものにしたいと思った。

〇専門の授業でプレゼンをする機会はあったのですが、英語でしたことはなかったので緊張しました。就職すると海外で働くこともあると思うのでしっかり英語を話せるようにしておきたいと思います。

〇私のプレゼンは出雲に関することをプレゼンしました。自分は少し、勘違いをしていてプレゼンなのに、紹介ではなく感想文になってしまいました。また、１分間の発表ということで、時間が短いので英文が少なくてもいいかなと思っていたら、思っていたより時間が残ってしまったように感じた。また、ほかの人の発表を見て感じたことは、英語だけを聞いていてもほとんど頭に入ってこなかったので、パワーポイントの大切さがわかりました。

〇思っていた以上に皆のパワーポイントの出来が良くて、見習わないとな…と思いました。発音がネイティブに近い人も何人かいたのですが、恐らく英検を取っているのでしょう。皆将来を見据えて英語を勉強していたのだと痛感しました。

〇ただでさえ、人前に立ってスピーチすることがあまりなく得意でもないのに、英語でプレゼンするのは余計に緊張しました。他の人のスライドを見ていると、自分が作った物と比べデザインが良い物が多くあったので参考にしたいと思いました。

〇思っていたより喋れないもんだな、と思った。特に資料を見ているとどうしても余裕がなくなってしまった。一部の人はそれでも流れるように発表していてすごいな、というのが大きな感想としてある。某氏は英語プレゼン発表をしにいっただけあって、前まで見る余裕があって貫禄あるなあと思いながら見ていたが、そういう面での他の人の凄さを知るプレゼンだったと思う。

〇久しぶりに前で発表したのでとても緊張しました。みんながわかるような英単語を使ったので、みんなにわかってもらえたのではないかと思います。みんなのスライドの写真がとても綺麗で、感動しました。発音って大事だなと思いました。そして、自分も発音を気をつけたいと思いました。

〇自分は、英語でプレゼンをするのは初めてでしたが、周りの人たちのプレゼンと自分のプレゼンの違いが多く見つかりました。まずプレゼンに文字を多く入れないことです。自分は言葉で発言すること全てスライドに書いていましたが、プレゼンが上手い人は文は必要最低限でスライドにはその説明がわかりやすくなるよう画像や、図を使って説明していました。また、自分は声に出して言うときにイントネーションよりも発音があってるかに気を取られていました。これも上手い人は、イントネーションもよくmost や many 等強調するところで強く読んだりなどうまく読めていた。自分も次回プレゼンをするときは英語日本語問わずこれらの点を意識して行いたいです。

〇英語でのプレゼンというのは人生でも初でしたのでどう話に人を惹きつけようかと考えてプレゼンをしました。結果的にはみんな僕の話はネタ的に聞き入ってくれたので良かったです。ほかの人の英語のプレゼンを聞くというのは結構人によって訛りがあったりして聞くのは難しかったです。

〇英語でスピーチするというのが初めての経験で、どうなることかと内心ひやひやしていましたが無事終わることができました。ほかの人と私のスピーチやパワーポイントを見て感じたことは、まずパワーポイントに補足説明を入れるべきだと思いました。その場所の名称や説明文を大きめの字で書いておくだけで印象が変わると思います。また思った以上に早くスピーチが終わった気がするのでもう少し文章量を増やしてもいいかと思いました。これから英語でのスピーチが増えてくるので発音練習をしっかりしつつ今回のスピーチの経験を活かしていきたいと思います。

〇私はプレゼンテーションの準備が足りていなくて、発表の時にあまりスラスラ言うことができませんでした。けれど、こういう機会に話すのは初めての経験でいい経験になったと思います。次こういったプレゼンテーションをするときは、しっかり準備をし、万全の態勢で臨めるようにしたいです。また、ほかの人の発表を聞いて、原稿を見ずに発表している人がいてとても練習しているなぁと思いました。またそれぞれ人によってスライドの個性があって、面白い発表会でした。この経験を生かして社会人になった時に緊張せずに発表、プレゼンテーションをしていきたいです。

〇クラスメイトのプレゼンはわかりやすいものも多くあり、勉強になった。しかし、自分のリスニング力や単語力が低く、聞き取れないものもあった。今後も英会話を続けて、発音やリスニング力、また単語力なども高めていきたい。

〇今回のプレゼンが初めての英語でのプレゼンでした。途中詰まるところがあって、練習不足を感じました。もし次回があるなら、そこを改善していきたいです。ほかの人の発表を見て、話すことと、スライドの内容が一致している人が多く見やすかった。自分は原稿とスライドを合わせるという事をしなかったのでそこも改善点になるなと思った。ほかの人が自主研修でどんなところに行ったのか知ることができてよかった。

〇英語でのプレゼンテーションは、経験したことがなくとても戸惑いました。他の人のプレゼンテーションを見て失敗したと思う点が多々あります。１つはプレゼンテーションの画面に、読む文章を全て映してしまったことです。文章が書いてある方が、みんなに意味がわかってよいかなと思っていましたが、耳で聞いていてもある程度意味が分かったプレゼンがいくつかあったので必要ないと感じました。２つ目は文章の難しさです。みんなが分かるように習ったことのある、又は直感で分かる単語をもっと調べて作るべきでした。

〇英語でのプレゼンはなかなかする機会がなくて、自分もそうだけど、英語を話すことに羞恥心を感じている人が多いように感じました。英語と日本語じゃイントネーションが違うので、なかなかな感情を込めて話すのが難しかったです。

〇英語でプレゼンを行う経験があまり無かったので、とても新鮮でした。英語のリスニングが得意ではないので、みんなのプレゼンはほとんど聞き取れなかったけれど、楽しそうな雰囲気は伝わって来たので、紹介されていた場所に、いつか行ってみたいです。

〇今回のプレゼンを作るときに気を付けたのは、他の人とテーマがかぶっても話題がかぶらないようにしようということでした。僕のテーマは出雲大社だったのですが、お参りの仕方という話題は僕だけしか出てこなかったので、その点に関しては良かったと思っています。しかし、プレゼンを聴いていてつまらなくならないように工夫もしたのが、逆にふざけているように見えてしまったことに関しては、少し失敗だったと思います。みんなのプレゼンはもう少し緩い感じだと思っていたので、当日になってみんなの真面目ぶりを見て、やってしまったとさすがに思いました。なので、今後は場の空気を考え、みんなに興味を持ってもらえる話題を提供しつつ、飽きないような工夫をしていけるようになっていきたいと思います。そして、英語でプレゼンするのは結構楽しかったです。特に、聞き取りやすいようにはきはきと、区切りをつけてしゃべるというのは勉強になりました。

〇プレゼンを行ってみてわかったことは、指定された時間がわかっていても気づけば時間が過ぎていたりしました。そして説明に必要なことと必要がないことはプレゼンを行ってみるまで全然わかりませんでした。どうしても説明口調になってしまったり、プレゼンを聞いてくれている人の顔を見て話さずに原稿をずっと見ていたりしてしまいました。これから、プレゼンを行う機会はどんどん増えていくと思うので今回の経験を踏まえて、気を付けていきたいと思いました。

〇英語の文法についてはあまりわかりませんでしたが、それぞれの伝えたいことが伝わりました。英語の単語の意味が分かれば伝えたいことは大体伝わることが分かりました。プレゼンのスライドがあったのでさらに内容が伝わりました。自分のプレゼンがみんなに伝わったか心配でした。スライドの重要性がみんなのスライドを見ていてわかりました。また、自分の伝えたいことを英文にするのが難しかったです。伝えたいことがうまく英文にできませんでした。身振り手振りや、特に伝えたいところでは強調した言い方をするともっとよく伝えられたのかなと思いました。

〇日本語でのプレゼンテーションは去年、一昨年とやっていたが英語で人前に出て話すのは中学校以来でとても緊張した。英語はこれからの社会でとても重要だと思うのであああいう場での発表を経験できたのはとてもよかったと思う。もっと英語を使って自分の考えを伝えられるようになりたいと感じた。

〇英語でのプレゼンは初めてだったので、普通に日本語でプレゼンするよりも緊張した。僕はただ写真を貼り付けただけのスライドだったが、他の人はスライドにアニメーションや説明などが書いてあって分かりやすいと思った。

〇プレゼンを終えての感想。自分は思っている以上に人前に立って発表することと、英語の発音が苦手なことが発覚した。直前まではすらすら読めていたはずの英文が、本番になった瞬間、まったく読めない。ついには、直前まで何の躊躇もなく読めていた英単語ですら本番で読めない。“speaking”の部分の弱さが顕著に出たプレゼンだった。もともと、その弱さについては重々把握していたつもりだったし、その上で PowerPoint の方に工夫を凝らし、視覚的なアプローチでプレゼンに臨んだはずだった。凝ったアニメーションや派手な場面転換、さりげない小ネタや演出、またそれらが 1 クリックで動くようにし、本番中での PowerPoint の操作の負担を軽減させたはずだった。しかし実際には、緊張で上がってしまって目の前にあるスライド画面を確認する余裕すらない。手にある原稿を凝視して読むのが精一杯。しかも読めてない。これはひどい。そろそろ人前にたって発表することに慣れてしまいたいのだが…。ほかの人の発表も、各々特徴があり非常に興味深かった。特にそれぞれのスライドの作り方に出る、微妙なこだわりが見ていて非常に興味深かった。例えばスライドデザインやスライド構成、写真のチョイスや配置、フォントの選び方などなど…。特に高木君の、軌道のアニメーションをフル活用した PowerPoint には衝撃を受けた。中学校のころから PowerPoint を使って、たくさんのスライドショーを作ってきたが、あんなアニメーションの使い方は初めて見た。カクついてしまっていたのが非常にもったいなかった。ファイル容量が 2000KB 程度だったので、写真データの解像度は下げられていたと考えると、パソコンのスペックに対して作成したアニメーションがオーバースペックだった可能性が高い。当然といえば当然だが…。ほかの人のプレゼンからたくさん学んで、自分のプレゼンに活かしていかなければ、と思った。

〇今までは日本語のプレゼンテーションしか作ったことがなかったので、原稿の作成は特に苦労した。時間制限のこともあったので、先に提出した英作文を大幅にカットした結果、内容が一部伝わりにくくなってしまった。また、発表を聞いていると、文字があるとわかりやすいなと感じた。アニメーションだけに凝らず、視聴者がわかりやすいプレゼンを作らなければならないと痛感した。次回からは気をつけたい。

〈付録４〉

平成 29 年度３ＥＩ英語プレゼンテーション感想文(前期４回分)

(学生氏名は省略)

〇英語プレゼンテーションで、英語での文章表現を実践的に身につけることができた。また、伝えたい事柄を聞き手が直感的に理解するにはスライドと英文をどのように組み合わせれば良いのかを考え、数回のプレゼンテーションで理解することができた。

〇今年度の授業のように短期間で複数回のプレゼンをするという経験は初めてだったので、大勢の前で発表することが苦手な私にとっては英語のスピーキング能力やリスニング能力の他にもコミュニケーション能力を上達させる良い機会になりました。内容を分かりやすく伝えるために図を使ったり難しい部分は日本語の意味を説明したりといったような工夫をしている人も居て正確な英語を使うだけではなく、「分かりやすく理解しやすい、簡単な説明」というものが求められていると感じました。

〇プレゼンテーション自体は何度かすることがあったものの、二週間ごとにプレゼンテーションを作成するということが私にとって大変なことだった。最初の方は凝りすぎてパワーポイントの作成に時間がかかってしまったが、最後の方にはいかに短い時間で見栄えがよく、話している内容をイメージしやすいか、ということを意識できた。肝心のプレゼンテーションでは、原稿を頭に叩き込めず、何度かど忘れしてしまったのが自分の中での課題点だ。英語を喋るということ自体はそこまで苦手ではないので、英語でのプレゼンというよりプレゼンそのものに対する課題が私の目には大きく映った。

〇人前で発表するのは苦手ですが、自己紹介、友達紹介、地元紹介、夏休みの予定紹介と計４回の英語のプレゼン発表を通して、パワーポイントを使ってクラスメートに英語で紹介や説明することに少しは慣れることができました。クラスメートの前で改めて自分や身の回りのことについて発表する機会は他の授業ではなく、それがあるのは唯一英語のプレゼン発表だけなので、大切にしたいです。後期も英語のプレゼン発表を頑張り、前期よりも良いものを作りたいと思います。

〇今回のプレゼンテーション学習で得た事はとても大きいと感じた。特に１分間という短い時間の中で伝えたい情報をどれだけ伝えられるかということを考えさせられた。できるだけ詳しく、そしてわかりやすい翻訳で、よりコンパクトにプレゼンができるかを心掛けた。また、なるべくスライドには文章を書かず、伝えたいポイントだけを書いたシンプルで見やすいスライドになるようにした。ただ、スライドのレイアウトやスライドの切り替え方などの工夫できる点を多く残したとも感じた。

〇英語でのプレゼンテーションは今までやらなかったので難しかったです。自分で文章を構成するのはもちろん、発表するときに早口にならないように気をつけるのが大変でした。私は聞き取りが苦手なのでみんなの話す内容がしっかり聞き取れていたかは自信がないですが、スライドが見やすかったりゆっくり話していたりしていたのでわかりやすかったです。英語でのプレゼンテーションはわりと楽しかったので、またやりたいと思いました。

〇英語でのプレゼンテーションをしたのはこれが初めてで、最初はパワーポイントのファイルを作るだけで手間取ってしまった。何回も作っていくうちに、英文の量を増やしたり、アニメーションを使ってより良いスライドを作ったりする余裕が出てきた。人前で話すことに慣れていなかったため、英語で話すというプレッシャーもあり最初はうまく話せなかったり、噛んだりもした。しかし、数をこなしていくうちに慣れ、スムーズに話せるようになった。すらすら話せると気持ちいいので、練習してもっとうまく話せるようにしたい。

〇英語のプレゼンにおいて、人により完成度に大きな違いがあり、ものによっては量的に問題があると感じたものもあった。２週間に１回のペースでのプレゼンテーションは負担が少し大きかった。簡単な英語を使い相手に伝えることを重視したため、ライティング力はあまり上がらないと感じた。スピーキング力は、意識してしゃべらないと向上

するとは感じなかった。リスニング力は簡単な英語を用いることが多く、あまり向上するとは感じなかった。よって、スピーキング力は自分の意識によって向上するものと感じた。

〇これまでのプレゼンテーションを通して、一回目のプレゼンよりも、二回目、三回目と回数を重ねるごとに慣れていき、上達していったと感じた。しかし、慣れの反面、パワーポイントの作成が疎かになったと思う。次回はもっと工夫したものを作りたい。他の人のプレゼンも工夫されたものがいっぱいあった。一分という短い時間で話をまとめるのは簡単そうで難しかった。こういった授業を頻繁に行うことで英語の表現力は確実に向上すると思った。

〇これまでのプレゼンを振り返ってみて、最初より、他の人のプレゼン内容を聞き取るリスニング力や、自分の言いたいことを伝えるスピーチ力が少し上がったように思う。自分のプレゼンで原稿を忘れてしまったときはボロボロになってしまったのでもったいないな、と思う。うちのクラスではみんなよかったが、中でも古賀くんのプレゼンは内容もわかりやすく、面白さもあって楽しいプレゼンだった。また、あまり耳にしない英単語をスライド内、または口頭で説明しているプレゼンは英語のプレゼンとしてはダメかもしれないが、聞く側としてはわかりやすく、よかったと思う。

〇英語でのプレゼンを行うにあたり、英語を使って自分の伝えたいことをいかにわかりやすく伝えるかが難しかった。そもそも英語が苦手で文法や単語をあまり覚えておらず、日本語訳を調べたりグーグル先生にお世話になったりした。また、自分のつたない英語力では１分間ですら話し切るのは難しいと判断し、スライドを使ったりちょっと間をあけたりなど、姑息な手段を使ってしのいでいた。後期からはもっと聞き手にわかりやすいスライド作りと、もう少し話す内容を長く、濃くするよう心がけていきたい。

〇英語のプレゼンテーションの一回目は、パワーポイントのスライドや原稿を作るのにとても時間がかかったが、回数を重ねるごとに早く作ることができるようになった。また、一回目や二回目は、スライドに書かれていることしかしゃべることができず、アニメーションなどを使う場面がわからなかったが、三回目や四回目はそれ以外のこともしゃべることができるようになり、アニメーションなどもある程度使えるようになった。これからも頑張りたい。

〇プレゼンテーションを何度かして思ったことは、やはり人前で話すのはとても苦手ということと、同じ題材で他人のプレゼンを聞くのは面白いということです。ばらばらの題材ではなく同じ題材でプレゼンすると、その人の人柄のようなものがプレゼンに表れて見えるので、普段過ごしているだけでは見えないことも見えたようで面白かったです。でも自分が発表するのは好きじゃないなととても実感しました。プレゼン発表は見ているだけで楽しいです。

〇英語のプレゼンを通して分かったことは、人に何か伝えるということは必ずしも、言葉の量だけが伝えやすさに起因するわけではないということである。プレゼンという、限られた時間の中で、人に情報を伝えるということは、英語の文章の読解、リスニングとは、一味違った経験になりうる。英語でのスピーチがプレゼンの中心を占めるが、それらを補足するジェスチャー、視線誘導なども、英語のプレゼンにおいて必要とされる技術の一つである。よって、英語でのプレゼンは、英語を実践的なレベルで学ぶことができる方法として、とても有効な手段である。

〇三年生になって初めて、二週に一回プレゼンテーションを行うという講義を体験しました。最初は、二週間に一回パワーポイントと原稿を作成し、プレゼンテーションの練習をするというのに時間が足りず、不慣れな点もありましたが、現在も実験レポートや課題に上乗せされ、時間は足りてないです。プレゼンテーション自体は、クラスメイトの意外な一面や、今まで知らなかった事を知ることができて、良かったと思います。英語力が上達したかと聞かれれば YES とは言えないですけど。

〇与えられた題の中で原稿・パワーポイントを作成する中で、どのような表現が一番伝わりやすいのか、ウィットに富んだ表現にするにはどのような語句を使えばいいのか

と試行錯誤した結果、文章を構成する力が付いたと感じた。またクラスメイトの発表を聞くと、効果的な強調方法やパワーポイントのアニメーションと連動した内容であったりして、それぞれの個性が発揮されているなと感じた。自身の発表にも応用できそうなものもあったので、積極的に取り入れていきたい。

〇今回のプレゼンテーションを通して、スピーチ力とスライドの作成能力が上がったと感じた。実際プレゼンをする機会は少なかったので、今回複数回行えたことは大きな経験だと感じた。40 人強の中で一人でプレゼンするっていうのは初めてだったし、しかも英語でっていうのはあまりないことだと思った。また､プレゼンの中でも英語で紹介、伝えるというのはとても難しいことだと思った。後期からはもう少し出来を上げるのと、もう少し早く完成させることを目標としたい。

〇全体的に噛んでしまって伝えるのに時間がかかってしまいました。また全体的な印象として、伝えたいことがばらばらになっていることが悪かったと思います。伝えたいことは結構あるので１分という短い時間でいろいろ伝えたいと思ったので１つのことを短くしたのですが１つに絞って掘り下げたほうがよかったと後悔しています。しかし、聞くということに関しては前よりもよくなっていると聞いていて思いました。友人の発表の意味が大体わかったことから思いました。

〇私が、今回のプレゼンテーション演習で最も得られたと感じたものは、英語で話す能力です。これまでも英語の授業で英語を使ってプレゼンテーションをすることはあったのですが、うまく英語を使って発表することができず、パワーポイントに頼った発表しかできませんでした。しかし、今回のプレゼンテーションを通して少し英語を使ったプレゼンテーションにも慣れてきてまだまだうまくはないですが、自分でも成長が感じることができました。

〇今年度の英語のプレゼンテーションは、私にとって英語での会話力を向上させるためのいい機会になったと考えています。自分で話す力を身につけたり、リスニング力を身につけることが出来たので良かったです。また、人前で発表する事への抵抗感が減るのもいい事だと思いました。後期からは、もう少し難しいお題でプレゼンテーションを行ってもいいと感じました。

〇プレゼンテーションを終えて他人に思っていることを説明するのは大変だということがあらためてわかった。ましてや、自分の母国語以外ということで事前準備をしっかりと行っていかないとしっかりと話すことはできず、支離滅裂なプレゼンテーションとなってしまう。今後社会に出てからも英語や英語以外の言語でプレゼンテーションを行うことはあると思うので、今後もプレゼンテーションを行う機会があればしっかり準備し、またその場その場で改善点をみつけて改善していきたい。

〇この時間を通して、英語力が向上したと感じる。特にリスニング力は大きく増加したと実感できる。また、プレゼンテーションの原稿・パワーポイントづくりによって英語のライティング力も向上したと思う。今まであまりしたことがない作業であったため、苦労したこともあったが良い経験になったと感じる。

〇プレゼンテーションによって、クラスメイトについてより詳しく知ることができた。あまり話さない人のことも知ることができ、驚いたことも多かった。同時に、自分についてもより知ってもらえたならうれしい。

〇僕はもともと大勢の人の前で話すのが苦手だったので定期的にパワーポイントを使ってクラスの前で発表するということを聞いたときは正直嫌でした。１回目の自己紹介の発表では、緊張して言葉が出てこなくてうまく発表できませんでしたが、回が増すごとに落ち着いて話すことができるようになっていきました。今でもまだうまく話せなくなることがありますが、初回よりかはだいぶましになったと思います。また、いろいろな発表を聞けて良かったです。

〇いろいろなことをプレゼンにしてほかの人に発表するのは大変だったけど楽しかった。事実だけをプレゼンする

だけでは面白くないと思ったので、自分は、何か笑えることを一つは入れるようにしていた。笑ってくれていたので良かった。日本語で言いたいことがあっても英語にすることが大変だった。そのまま翻訳すると難しい言葉になって伝わらないと思ったので、なるべく簡単で分かりやすい言葉で言うようにしていた。

〇最初はプレゼンするのはめんどうくさいなとかやりたくないなって思っていたけど何回か回数を重ねていく毎にプレゼンが上手くなり同時に楽しくもなりました。プレゼンをすることによって人に伝える力や英語を話す力、聞く力もつきました。プレゼンをするだけで英語の力がついてくることはいい事だなと思いました。さらに、知らない英単語なども調べたりするので語彙力もあがるからとてもいいと思います。また、これからもこのプレゼンは続けていくと良いなと思います。

〇英語のプレゼンは、１分という短時間だったが、テーマが「友人紹介」「地元紹介」「夏休みの計画紹介」というように難しいものが多く、特に夏休みの計画はまだ何も定まっていなかったので、プレゼンを作るのに苦労した。ほかの人のプレゼンを見た感想としては、ユーモアあふれるプレゼンやシュールな笑いを誘うプレゼンが結構多く、楽しむことができた。自分のプレゼンにはそういったユーモアが不足していると感じたので、次回以降のプレゼンはその点を意識していきたいと思う。

〇英語は比較的得意な教科です。しかし、プレゼンでは、資料を見せつつ、英語をしゃべらなければいけなかったために、難しいと思いました。発表用の PowerPoint 資料制作では、全員共通のテーマの中で、個性を出すことに難しさを感じました。資料作りですが、最初のほうは、慣れていなかったのか、発表原稿を PowerPoint に書き、それをそのまま発表しているようなプレゼンが多かったように思います。しかし、回数を重ねるにつれて、画像やアニメーションを多く使ったプレゼンが増えていったような印象です。特に出身地のプレゼンでは、興味深い写真が多かったです。

〇英語のプレゼンテーションでは多くのことを学ことができました。私は、以前は、自分で英文を１から作るということが苦手でした。しかし、プレゼンテーションの原稿を何度も書くうちに文章の作り方や話の組み立て方、英語の口語の使いかたを学習することができました。また、プレゼンテーションでは自分自身のことや考えを発表するので自分のことを周りに知ってもらったり、人のことを知ることができたりして、仲良くなることが出来たので非常に良い授業だったと思います。

〇今年からプレゼンテーションを行う回数が増えたことで、自分の英語力やプレゼンテーション能力の向上につながったように感じました。特に、プレゼンテーションで聞き手を飽きさせないアニメーションなどでの表現の仕方はとても参考になりました。しかし、自分のプレゼンテーション能力はまだまだだとプレゼンテーションの回数を重ねる度に強く感じるようになりました。後期は、自分でも納得できる、よいプレゼンテーションを行っていきたいです。

〇前期のプレゼンテーションでは、自分の伝えたいことを英語で伝えられる力が身についたように思う。原稿を考える時も、自分の考えを伝えることを意識し、正しい英文とは思えなくとも大切な単語を強調することで、写真と合わせて分かりやすくした。また、他の人のプレゼンを聞くときも、正しい英文を聞く自信はなかったので、大切な単語を聞き取るように意識した。しかし、みんなのプレゼンも分かり易く伝わるよう意識されており、写真を用いるのはもちろん、アニメーションや文字のフォントなどを用いて、さらに分かり易く工夫されていたので、多少聞き取れなくても理解ができた。さらに、他の人のプレゼンから、分かり易いプレゼンを学べたので、その次のプレゼンに活かすことができた。プレゼンの能力が上がった実感はないが、もしかしたら、あわよくば、プレゼンの能力は上昇しているかもしれない。

〇プレゼンテーションの授業をして感じたことは発表する資料の準備が大変だということです。パワーポイントのスライドを作るとき、必要以上に文字を書かないことやア

ニメーションをつけて見ていて楽しいものにすることを主に考えました。少し面白くなるようなことも考えました。プレゼン発表の時には自分が作ったパワーポイントを詳しくするような原稿を考えました。発表の時は原稿をただ読んでいるようにならないよう心がけましたがあまりできた気はしません。クラスメイトのプレゼンを見て面白い人やとても考えてあると思う人がいました。

〇２年生のとき、自分の作ったプログラムを説明するというプレゼンテーションの授業がありました。しかしまだプレゼンに慣れていないころだったので、あまりうまく出来ませんでした。３年生になって英語のプレゼンがあると聞いたときにはうまくやれるのかという不安と、２年生のときのリベンジをしたいという期待の気持ちがありました。なるべくスライドは見やすく文字を少なめにし、発表時の原稿は簡単な英語にするなどの工夫をしました。まだすごく上手くなったとはいえませんが、２年生の時よりは確実に上達したのでうれしかったです。

〇前期のプレゼンを通して、英語力のリスニング力とスピーキング力が少しずつ上達してきたように思います。プレゼンを繰り返していくうちに、他の学生のプレゼンの内容がすんなり頭に入ってくるようになりました。今まで、パワーポイントを見てやっと理解できたくらいだったので、学生の言葉を聞いて内容が理解できるようになり、リスニング力の上達を実感しました。また、自分のプレゼンの時、あらかじめ作っておいた内容をその場で変えたりして、聞き手がわかりやすいように、添削できるようになりました。

〇前期の４回のプレゼンテーションを通して、自分の英語力やプレゼンテーション力など、いろいろな力が伸びたと思います。発表する前はいつも、本当に自分が作ったものは大丈夫なのだろうかと思っていましたが、クラスメートの様々な発表を見ていく中で、自分の発表にもだんだんと自信がついていきました。自分が作ったプレゼンに、みんなが反応してくれるのは嬉しかったです。また後期も可能ならばプレゼンをしてみたいと思いました。

〇前期でのプレゼンテーションでは、自分のことや住んでいる街についての紹介をしながら、基本的な文法を用いた紹介を行った。スライドの枚数や単語数などに気を使いながら、制限時間内にうまく収まるようにプレゼンテーションを構成し、傍聴者に注目してもらえるように様々な工夫を行った。特に、前期のスライドには目に優しい色使いなど、単純な表現を駆使して傍聴者に訴えられるようにした。今後は、スライドの構成だけでなく、発言や身振りなどにも気を配り、傍聴者により注目してもらえるよう工夫していきたい。

〇プレゼンテーションでは、英語を話す力や、リスニング能力を伸ばすことができたと思うので、よかったです。また、ほかの人達のプレゼンテーションを聞いたり、見たりして、面白いものや、アニメーションを使っているものもあり、すごいなと思うものがたくさんあったので、自分のプレゼンにも取り入れたいなと思いました。次回からのプレゼンもスライドなどを工夫して見ている人を引き付けられるようなプレゼンができるようにしたいと思います。

〇前期のプレゼンを通して、たくさんのことを学ぶことができた。１、２年とあまりプレゼンをやってこなかったのもあり、最初は不慣れだったが、いろいろな人の発表を見て、こういうプレゼンもあるのかやこういうパワーポイントの作り方もあることも学ぶことができ、上達したと思う。４、５年生では卒業論文などで発表の場が増えると思うのでそれに活かせるように後期のプレゼンも頑張りたい。最初は緊張したが、今は堂々と発表できるようになったので、よかった。

〇はじめのうちはプレゼンの仕方もパワーポイントの作り方も全くわからず、緊張してうまくプレゼンができなかった。しかし、皆のプレゼンを見て参考にしたり、慣れたりしたこともあり少しだけプレゼンが得意になった気がした。また自分のプレゼン、他の方のプレゼンを通してプレゼンには人を聞きたいと思わせるような工夫があり、かつ聞き手に伝わりやすいようにプレゼンテーションを行うことがとても大切だと感じた。

〇英語の授業でプレゼンテーションの時間を設けていただいて、私自身のスピーキング力、リスニング力が鍛えられたと思います。また、プレゼンテーションの内容の構成などを考える上で、どう伝えたら印象に残るか、どう伝えたら興味を持ってくれるかなど、プレゼンテーションの基礎となる能力も鍛えられたと思います。他の人のプレゼンテーションを見ていて、リスニングだけでなく、構成など、勉強になることがたくさんあったので、お互い良い吸収ができたと思います。

〇自分はプレゼンが苦手なので、こういった機会があることがありがたかった。さらに、高専の英語学習ではあまり伸びないリスニング能力やスピーキング能力を鍛えられるので良かった。実際に英語力が向上したように感じた。他の人のプレゼンでは私が言わないようなジョークなどが聞けたり、個性的なプレゼンがあったりと学べることがたくさんあった。また、興味を引くようなプレゼンも多くあったので後期からのプレゼンの参考にしたいと思った。

〇英語のプレゼンではパワーポイントの方に力を入れがちなのでもったいないと思った。また発表時もパワーポイントを見ていれば内容がわかるので聞き取りの力はそこまで伸びないのではないかと思った。文章を作る点では聞き取りよりも比較的伸びるのかなとも思うが翻訳サイト等で作れてしまうのでいまいちだと感じた。ただ話すことは文法や聞き取りに関係なく全員が等しく行うので発音がしっかりしていれば力がつくのではないかと思った。

〇４回の英語プレゼンテーションを終えて、改めて自分のことを言葉にして相手に伝えることは大変なのだなということを学びました。プレゼンを作ることにしても、原稿を作ることにしても頭の中で何を発表したいかイメージをすることはできるのですが、いざ形にしようとすると、なかなかできませんでした。しかし、４回プレゼンテーションをしたことで今年の４月の時よりかは確実に自分の言葉をまとめるのが上達することができたなと思います。みんなに自分のことについて伝えることができてよかったです。

〇今までのプレゼンを通して、身についた力は英作文を作る能力だと思います。普段の授業や日常生活において、英語の文章を自分で考えるなんてことはほとんどないです。しかしプレゼンを行うにあたって英作文を作る能力は必須です。インターネットに上がっている文章を参考に自分で文章を書くことで、この能力が少しは上がったと思います。他にもクラスメートのプレゼンを観ることで、友達のことをもっと深く知ることができました。普段話さないようなことがお互いに知ることができてよかったです。

〇洋楽の歌詞の聞き取りや英語のプレゼンテーション等、英語を暗記させるのではなく１つの言語として実戦的な勉強ができ、英語に親しむ事ができた。また、授業で扱う教科書も一般の物ではなく、自分たちの専門分野に関する内容の教科書を使うことによって、授業の内容が頭に入り易くなっていたと思う。今までの英語の授業はどうしても、受験のための英語であったり暗記するだけの英語だったので、実際に英語を話したり聞いたりして進めていく授業は新鮮で楽しかった。

『ダウントン・アビー』考察（Ⅱ）

原　口　　治*

On *Downton Abbey* (Ⅱ)

Osamu HARAGUCHI

This paper deals with *Downton Abbey*. *Downton* has been one of the best hit TV dramas worldwide. It was televised by ITV. It has six series. As a main discussion, I attach great importance to the popularity of *Downton*. Four chapters are set in this paper: (Ⅰ) The Acceptance of Change, (Ⅱ) The influence by the National Trust, (Ⅲ) The influence by America, and (Ⅳ) The Importance of Balance. Englishness is a main theme in our discussion. I would like to maintain that the Englishness as a popular image in *Downton* is constructed under the influence of the above four points.

As a main objective, I try to analyze the construction of the image of Englishness in *Downton*. Historic facts are certainly well considered in *Downton*. However, the image of Englishness in *Downton* is very much influenced by the ideal and fictional images which many people worldwide have towards England with the respect to its tradition and aristocracy.

Keywords：Englishness　Great Tradition　Architecture　The Edwardian Era

0．序論

本稿は、イギリスの民放テレビ放送局ITNで6シリーズにわたり放映され、世界的にヒットしたドラマ、『ダウントン・アビー（*Downton Abbey*）』について、幾つかのイギリス的価値観に基づき、ドラマの構造を概観することを目的とする。「ダウントン・アビー」という名称は、このドラマの舞台となる貴族の屋敷の名前である。そしてこの屋敷を中心とした村がダウントン村と呼ばれている。

昨年度の論考で私は、本ドラマのテーマが「目覚め」であると主張した。具体的には、20世紀初頭のイギリスにおける転換期において、イギリスらしい価値観の分かりやすい表象の一つといえる伝統的な貴族階級（グランサム伯爵一家）が時代の変化を受け入れ、自らの生き残り＝家の存続を図ろうとするのが本ドラマの骨格であると指摘した。その際、イギリス文化における「家」の概念を重視して考察を行なった。昨年度のいわば前稿を基にして、本稿では、４つの主要テーマを選定し、文学や文化的範囲でみられるイギリス的価値観（Englishness）を重視して稿を進めたい。なお、最終シリーズである第6シリーズの考察を特に取り入れる。

『ダウントン』の日本におけるTV放映も好評であり、既に最終シリーズがNHK総合（地上波）チャンネルや有料チャンネルで放映されている。

本稿を、イギリスの一テレビドラマがここまで世界的大ヒットとなったのか、という点についての多角的考察につながる論考としたい。

1．変化を受け入れる

昨年度公刊した前稿で、私は、「目覚め」こそが『ダウントン・アビー』のテーマであると主張した。これは、本物語の時代設定が、ヴィクトリア朝が終焉したばかりの20世紀初頭のエドウォード朝から第2次世界大戦に向かう、「戦間期」であり、否応なしに社会全般が時代の「変化」を受け入れ、折り合いをつけざるを得ない状況にあったこ

*一般科目教室（人文社会科学系）

とが念頭にある。「目覚め」の比喩はこの状況の説明に適している。では。「目覚め」となる社会変化とはどのようなものであったのか。ここで、『ダウントン』の時代背景をおさらいしておく。

『ダウントン』第 1 シリーズ第 1 話は、電信の打音とそれを刻む機械がクローズ・アップされた場面で幕を開ける。ベルによる電信の開発により、『ダウントン』第 1 シリーズは、世界が電話（電信）で結び付く時代設定であった。

この電信により、イギリス全土に伝えられた速報ニュースは、イギリスの豪華客船『タイタニック号』の遭難であった。

これは、『タイタニック』遭難に関する有名な話だが、『タイタニック』は「沈まない（unsinkable）」船との一般的な評判があった。現代の日本を考えたとき、一例として、32 年前に起こった日本航空 123 便墜落事故が想起されよう。墜落したジャンボ・ジェット機に対する当時の一般的評判は、「墜落しない（ハイテクで性能が秀逸等の理由で）」航空機と言われていた。圧力隔壁の疲労破裂から垂直尾翼の破壊で操縦不能に至ったといわれているこの航空機事故は、『タイタニック』のそれと酷似する。『タイタニック』では、船倉が区画で区分されており、一つの区画に浸水しても他の区画に浸水することはないとの想定があったのだが、氷山が区画をまたぐ形で衝突したためこの設計は有効に機能せず、『タイタニック』の船腹に致命的な損傷を与えたのであった。

一般的にいえば、科学技術への過信と、人知を超えたものに対する畏怖の念が薄れた等の当時の状況があてはまる。これは 100 年ほど前と同じく、現代にも十分通用する考え方でもある。

前稿ではまた、「目覚め」のテーマに関連して、「スピード」を重要な要素として挙げたが、本稿では発展させ、「スピードによるコミュニケーションの変化」を挙げたい。『ダウントン』の冒頭を見れば、スピードを重視したコミュニケーションの主要手段」が満載である。既に紹介した、電信、さらには鉄道（蒸気機関）である。比較として、Jane Austin の時代を考えると、隣の屋敷まで数マイル離れているのが普通であり、馬車の時代なので徒歩による移動も普通であった。一見、コミュニケーションの範囲が限定されているようにもみえるが、対面形式のコミュニケーションがほとんどであり、現在に比べてより密接なものであった。

オースティンの珠玉の小説の中で、特に国民的に有名なものに *Pride and Prejudice* がある。その中で、この距離感を如実に示す一場面がある。

主人公 Elizabeth エリザベス（ベネット家の二女）が、長姉の急病を朝食時に届いた手紙で知り、彼女のもとに駆け付けることとなる。元々、長女は、母親のベネット夫人の計画により、雨の中を馬の背中に揺られて隣の屋敷（といっても 3 マイル離れているのだが）を訪問するように仕向けられたのだ。その理由はただ一つ、条件の良い結婚相手の男性を娘に見つけるためである。相手の屋敷には、「年頃」の男性が住んでいる。病により、二人の仲を近づけるというのである。

朝食の席で、断固として自らの意志で徒歩により長姉の看病に駆け付けるエリザベスの心情は、姉の身を案じる一心であろう。それに対し、ベネット夫人は次のようにたしなめる。例えば、BBC 製作ドラマでの台詞を引用してみよう。

「三マイルも歩くのですって！　人目についたらどうするの！」

この時代、貴族の娘で未婚の女性が単独で戸外を歩く、それも現代のように舗装されていない足元の悪い道を三マイルも、である。これは当時の一般論からすれば、非常識であった。屋外での危険も当然考えられる。

しかし、『プライドと偏見』では、結婚における、恋愛というロマンス的要素は 2 次的な理由であろう。主要素はただ一つ、「限嗣相続」の故である。この相続方法だと、貴族の莫大な遺産は男性しか相続できない。実の娘であっても、びた一文相続ができない。そのため、この場合にベネット家の長女が結婚しないことは、すなわち、ベネット家の没落の可能性も生じさせるのだ。そしてこのシナリオは『ダウントン』でも使われている。

『ダウントン』は、相続人とされていた男性親族がタイタニック号沈没により亡くなった場面で始まる。『ダウントン』を代々相続しているグランサム家は娘三人しか子供がいない。そして前述の限嗣相続に縛られているため、男性の相続者を探すしか方法がないのだ。イギリスらしい価

値観で重視される家系図を辿ってグランサム家の後継者となったのは、新興工業都市マンチェスターで弁護士をやっている、マシューであった。

マシューは産業革命以後のイギリスの新興階級を体現している。彼の生活拠点マンチェスターは 18 世紀の産業革命以降にイギリスの新興工業都市として有名になった。工場とその煤煙、レンガ造りの集合住宅の列が同じつくりで郊外まで伸びている。それはまさに「スプロール（sprawl）化現象」であった。それは、レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）のいう「田舎と都会」という二分法的な観念が生まれたことを意味する。田園生活を中心とした古き良きイングランドは産業革命により失われてしまったという「神話」がここで読みとれる。

更に例を挙げると、マンチェスター同様、炭鉱を中心とした工業地域で名高い、イギリスミッドランドのノッティンガム出身の小説家に D. H. ロレンスがいる。彼は、『チャタレイ夫人の恋人』の著者として有名であるが、出身地であるノッティンガムのイーストウッドの社会変化を多く小説の場面に取り組んでいる。

本章をまとめると、『ダウントン』では、そのような時代の激変の中で、貴族制度とその象徴である屋敷という「古き良きイングランド」ともいうべき価値観の継承というテーマが作品の流れに込められていると言える。

2．ナショナル・トラストとイギリス的風景の保存

イギリスの自然保護運動でまず想起されるのは、ナショナル・トラスト（The National Trust）運動である。ナショナル・トラストとは、『ピーター・ラビット』の作者で有名なビアトリックス・ポター（Beatrix Potter）の運動がきっかけとなっているのは周知の通りである。近年、映画が公開されている。現代では、自然保護と同義で語られることも多くなっている。

ナショナル・トラストが設立されたのは、20 世紀初頭であった。設立に尽力したメンバーはオクタヴィア・ヒルらであった。この 20 世紀初頭という時代は、『ダウントン』の舞台設定の時代とも一致する。世界に植民地を広げ、大英帝国の名を欲しいままにしたヴィクトリア女王の治世は 1901 年に終わり、エドウォード朝時代になる。現在から 120 年ほど昔になるこの時代は、前のヴィクトリア朝時代に比べて 10 年余りの短い治世であったが、イギリス人の精神性にとって無視できない時代であった。まず、「世紀末」から新世紀への転回に関する混乱や不安。そして徐々に迫りくる第一次世界大戦の暗雲。15 年ほどたつと、史上初の世界大戦を人類は経験することになる。そのような時代背景の中で、階級社会のイギリスといえども、一般民衆まで、自らの祖国としてのイギリスのアイデンティティを自らのそれと同一視するようになったのだ。我が祖国、「イギリス」とは何か。そしてイギリスを表象するもの、すなわち「イギリスらしさ」の探求。この問いが共有されることとなったのだ。そしてイギリスらしさの表象として、イギリス的田園風景が前景化され、意識されることとなっていく。

イギリスの田園風景は現在でも多くの人々を世界規模で魅了し続けているが、大抵の頭に浮かぶのは、主にイングランド南部の田園風景ではないだろうか。コッツウォルズやケント州、うねるように起伏に富んだ（Rolling up and down）田園風景、そしてその自然と共生する動植物。『ピーターラビット』はその代表例である。しかし、これらの地理的条件を吟味すると、単純に「イギリス的」風景との一概念に集約できないことが明らかになる。この点について、『ダウントン』のケースを考察してみる。

『ダウントン』の舞台設定は、イギリス北部のヨークシャである。この地理的確認は重要である。前稿でも指摘したが、日本で発売された『ダウントン』の第 1 シリーズの DVD には、「ダウントン・アビー」邸の所在地は、「イングランド郊外」とある。厳密に言えば、これには議論の余地がある。まず、ヨークシャとはイギリス北部であり、いわゆるイギリス的田園風景の代表例に挙げられる「南」イングランドとは地理的にも風景的にも大きく異なる風土を有している。私は本稿においてこれまで、「イギリス」という言葉を幾度となく使用したが、正確には「イングランド」である。言うまでもなく、イギリスとは通称であり、正式名称の「グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国」とは 4 つの地域から成立している連合国家である。この 4 地域とは、すなわち、イングランド、スコットランド、ウェールズ、そして北部アイルランド（アイルランド連邦共和国を含む島の北部）である。ヨークシャは、イン

グランド北部とは言え、極めてスコットランドに近い位置である。この地域におけるイギリス文学では、『嵐が丘』や『ジェイン・エア』等で有名なブロンテ姉妹である。ハワースや荒野に表される冬の厳しい気候を、小説の女性登場人物の描写に取り込んでいることで名高い。では、『ダウントン』では、そのような地理的設定はどのようになされているのか。

実は、『ダウントン』の撮影は、ヨークシャで行なわれていない。ロンドンの特設セットスタジオを除けば、ダウントン・アビー邸は、イングランド「南」部のカーナボン城（伯爵邸）がロケ先として使用されている。また、『ダウントン家』長女のメアリーの結婚パレートで使用された村は、イングランド中部のオックスフォード州に現存する小村である。ちなみに、どちらの地も『ダウントン』の聖地巡礼先として現在かなり有名な観光スポットとなっており、ロンドン出発のツアーの参加者も多い、との評判である。

話を戻すが、ここで重要なのは、ヨークシャの厳しい自然気候風土は、『ダウントン』においては十分に映像化されてないことである。『ダウントン』の視聴者が目にしている、「イギリスらしい風景」とは、まさに典型的なイングランドの田園風景であるのだ。この評価は留保するにしても、ここに指摘した決定的な相違を理解することは、『ダウントン』の理解において必要である。

更に、地理的背景と言えば、そこに暮らす地元民の気質にも影響する。『ダウントン』では、グランサム伯爵一家によるスコットランド貴族邸の定期的訪問や、ヨークシャの家畜飼育により、長女メアリーがグランサム家の存続を図ろうとする例のように、ヨークシャの地理的相関を考慮したプロットはあるが、間接的である印象は否めない。

家畜経営、広く言えば農業は、ヨークシャの主要産業であり、羊毛等が有名である。ダウントン村も同産業に依存してきたことが描かれる。

後期のシリーズで、農業の生産効率を高めようとし、グランサム家主人のロバートと娘のメアリーらが対立するエピソードがある。前者が伝統的な農業手法の世代、後者が近代的な生産成功率を重視した近代的な農業手法の世代をいわば代表しており、その場面には農業の直接的なエピソードが描かれる場面は極めて少ない。唯一といってよいエピソードに、メアリーが農家の視察を行なっているとき、豚の病気に出くわす場面がある。ここで、彼女は同行した男性と共同作業を行ない、状況を安定させるのであるが、その後の場面で彼女が行なうのは、豚小屋で相手の男性と、泥をぶつけ合うことである。農業に関する描写が、結局は恋愛的戯れの場を提供することに成り下がっている。つまり、直接的な行為として伝わってこないのだ。いわば、厳しい現実が「修正」されているとも読み取れるのだ。

決定的な指摘として、言葉（方言）の問題も挙げよう。イギリス英語と方言の関係は、階級というイギリスの本質的社会構造を体現している。オードリー・ヘップバーン主演の古典的名作、『マイ・フェア・レディ』の女主人公、イライザ・デューリトルが文学作品からの一例として容易に思い出される。ロンドンのコヴェント・ガーデンの貧しい花売り娘だった彼女は、ロンドンの下町訛り（コクニー）を、ヒギンズ教授に矯正してもらい社交界にデビューするというプロットである。言葉が、それを話す人間の社会的アイデンティティを規定しているといっても過言ではない。そうだとすれば、『ダウントン』のケースはどうであろう。

スコットランド訪問時に接した貴族に引き抜かれ、突然邸を出て、インドへ向かうことによりシリーズ途中で姿を消す第一侍女のオブライエンは、訛りを強調したアクセントをもっている。しかし、これはドラマの中ではごく少数である。このヨークシャの小村ダウントンで何百年も続くダウントン・アビーを継承してきたグランサム家の当主、グランサム伯爵は、実に「きれいな」英語を話す。それは、『マイフェア・レディ』のヒギンズ教授のモデルとも噂される、ヘンリー・スウィートやダニエル・ジョンズらロンドン学派を想起させる。すなわち英語音声学における容認発音（Received Pronunciation）の具体例ともいえるグランサム家の人々の英語は、イングランド北部ヨークシャの厳しい生活条件を連想させるには少々距離があるとは言えないだろうか。

日本の大ヒットテレビドラマの例でも、関西の国立大学医学部を舞台とした物語にも関わらず、関西弁のアクセントを用いる登場人物が極めて少数であるというものがある。当然、言葉（アクセント）とそれが話される地理的背

景の相関は軽視できない。

本章のまとめを次に述べる。『ダウントン』の舞台設定は、イングランドとスコットランドの辺境に程近い、ヨークシャであり、イングランド南部のうねるような起伏にとんだイギリス的庭園風景とは環境を異にする。しかし、ヨークシャの自然を下敷きにした、ブロンテ姉妹、特に『嵐が丘』や『ジェイン・エア』の世界とは違い、イングランド南部を連想させる世界である。万人受けするイギリス的風景の創出のために、敢えて、イングランド北部ヨークシャの寒村というイメージを「修正」したのではないか、とも解釈できるのである。

3．アメリカの影響

『ダウントン』が全世界的にヒットしたことは既に言及したが、一つの特徴として、アメリカ合衆国での大ヒットが挙げられる。アメリカでのイギリスドラマの人気、一見するとこれら二者は相いれないようにも見える。英語のアクセントからして大きな相違がある二大文化である。しかし、このドラマには十分にアメリカ人を引きつける要素がある。それらは、アメリカ文化（資本）がイギリスの伝統を維持するのに欠かせない要素となっていることと、アメリカ人のイギリス文化の伝統に対するあこがれの二つである。

ダウントン家当主の夫人であるレディ・グランサム（コーラ）は、アメリカ人資産家の娘である。当然だが、歴史や権威だけでは貴族制度は維持できない。一般にイギリス貴族とは、広大な領地を有し、その地代収入等で地元の民衆と関わり合いを持ち、村というコミュニティを維持してきた。貴族制度の維持には地元民やその当時の社会や経済状況を無視できなかった。それをできない貴族は没落していくしかなかった。貴族は世捨て人では務まらない。ダウントン・アビー邸と同村を運営管理するグランサム家もその例外でない。

どうしてコーラはダウントン家に嫁いだのか。端的にそれは彼女がお金持ちのためであった。ドラマの第一シリーズで、グランサム家当主でコーラの夫であるロバートと彼の母ヴァイオレットがこのことに言及している場面がある。以前に家勢が傾いた時、コーラの持参金により、グランサム家は救われたというわけである。彼らの例のように、イギリス貴族とアメリカ人富豪の娘が結婚する例は実際に当時あった。そんな彼女たちの実例を追った海外ドキュメンタリー番組をNHKで放映する際、そのタイトルは彼女たちを称して、『海を渡って来たプリンセス』と邦訳されたほどである。「資産目当ての結婚が後に真の愛情に変わった」とロバートはコーラにもヴァイオレットにも公言している。このソープオペラ風の台詞はともかく、伝統はあるが、経済的に困窮したイギリス貴族と、資本主義の時代に乗り、財産はあるが伝統や権威に欠き、それらを欲するアメリカ新興成金階級の二者が、結婚により互いに利用し（助け）合う関係になっているのである。このバランスは物語の安定を支える大きな役割を果たしている。コーラのしゃべる品のある「アメリカ・アクセント」の英語は、事あるたびに夫のロバートを力強く励ますものとなっている。ロバートがカナダの鉄道会社への株投機に失敗し、あろうことかコーラの莫大な持参金を全て無くしたときも、コーラは前向きな思考で、すすり泣く夫を励ます。夫ロバートの犯したこの失敗により、ダウントン・アビー邸を手放すかもしれないという危機に陥った時にも、コーラは泣き言を言ったり、夫を責めたりはしない。アメリカ的精神が伝統的イギリス精神のなくてはならない支柱となっている。この構造はアメリカ人のアイデンティティ的な優越感をくすぐるのには十分であろう。

コーラに加えて、アメリカ的価値観をダウントン邸に持ち込む登場人物に、コーラの母親がいる。

彼女は、グランサム家の長女メアリーの結婚やグランサム家で預かるスコットランド貴族の娘の謁見式出席の際に、アメリカから海を渡ってイギリスを訪れる。

特に前者の訪問が物語に大きな影響を与える。彼女の発言は常に、アメリカ的視点からのイギリス的伝統や文化一般に対する懐疑である。コモン・センスとして、自らの生活を当然視しているグランサム家の人々は、彼女の問いかけにより、自らのイギリス的価値観を見つめ直し、その弁護に必死である。

彼女の立脚点は、アメリカ的思考の柔軟性により、肥大化したイギリスの貴族システムに表象されるその硬直性を焙り出すことを楽しんでいる点である。イギリス的伝統の全否定ではなく、時代の変化に対応しようとしな

い点を鋭く指摘するのである。例えば、ダウントン邸の屋敷の大きさがそうであり、簡素さ（simpleness）や機能的（functional）、効果的（effectiveness）といった価値観が、グランサム家に表象されるイギリス貴族文化には欠けているのだ、とほのめかしている。

さらに、グランサム家の三女シビルと出奔する運転手のトムは、アメリカのボストンにわたり、ビジネス経験を積む。その経験がグランサム家の継承と維持に役立っていることは無視できない。ここにも、アメリカ的な価値観への肯定的な配慮といったものが見え隠れする。

本章では、『ダウントン』におけるアメリカらしさの影響を中心に考察してきた。本稿では『ダウントン』を支える重要な価値観であるイギリスらしさには特に着目しているが、この物語の主題でもある、時代の変化との折り合いの重要な一側面をアメリカ文化が担っているのだ。このバランス感覚はイギリス的伝統価値観にも受け入れられるものであり、かつ古き良きアメリカ文化と想定する現代のアメリカ人視聴者のアイデンティティ感に満足を与えているのである。

4．大団円―バランス

イギリスの国民的アイデンティティを掻き立てる行事の一つに、『プロムス』コンサートがある。これは毎年 7 から 9 月初旬にかけて、ロンドンのロイヤル･アルバート･ホールで開催される。特に有名なのが最後のプログラムである「プロムス・ラスト・ナイト」である。ここでは、エルガーの『威風堂々』やトーマス・アーンの『ルール・ブリタニア』、そしてヒュー･バリーの『エルサレム』といった愛国的な曲が毎年定番として演奏され、平土間の立ち見客たちが国旗を振ったりして、大合唱する。そこには「大衆」のイギリス的価値観の表象とみることができる。そして世界規模でテレビ放映されることで、視聴者たちも間接的にこのイギリス的価値観の確認ともいうべきイヴェントに参加する。この構図は『ダウントン』と類似する（『教養の力東大駒場で学ぶこと』集英社新書 2013 年）。

イギリス文学の特徴に挙げられるのが、バランス感覚である。斉藤兆史はこれを‘sense of proportion’と評している。先に触れた、18 世紀の女流作家ジェイン・オースティンの小説、『プライドと偏見』はイギリスを代表する国民文学的作品といえる。オースティンはイギリスの新札の肖像画にもなるほどの存在である。この作品と『ダウントン』の共通点こそが、プロポーション（斎藤）といった、イギリス的なバランス感覚である。

これは 20 世紀イギリス文学の巨匠である E. M. フォースターにも見られる特徴である。まとめると、最後は大団円（ハッピーエンド）に終わるし、その結論の意外性はあまり大きくないのではあるが、そこに至る、プロセス、言い換えれば登場人物の心理変化や人物関係の機微な変化が丹念に描写され、蜘蛛の巣のように全体が一つの統一体になるように相関を成している、と説明出来る。

『ダウントン』の主構造は、ダウントン邸の、上（地上）と下（地下）の世界である。前者に当たるのが、グランサム伯爵一家に代表される貴族階級、そして後者が、執事カーソンを中心とした使用人たちの階級の世界である。イギリス文化を考える時、階級という視点は無視できない。とりわけ、産業革命以降の労働者階級に属する人たちは、時に対立関係で自らの階級を認識し、「俺ら（‘us’）」と「やつら（‘them’）」と敵対意識をむき出しにした。

『ダウントン』においても、確かに階級間の相違は貴族と使用人の間に存在し、第一侍女のオブライエンがグランサム家の継承者となるマシューをからかい、主人のコーラからたしなめられる場面がある。更に、シリーズを重ねるにつれて、教育を受けることで、階級間の矛盾に気づき、その不条理を公に訴える、料理担当メイドのデイジーの例もある。しかし、全体として、両者の関係は緊張や対立とは程遠い。使用人たちにとり、自分たちの主人であるグランサム家の人々は、階級闘争の敵というより、ゴシップの対象である。階級闘争を意識した唯一といってよい登場人物のトムは、アメリカでいわば、「丸くなり」、未来型の持続可能なイギリス貴族のシステム構築に邁進することとなる。

5．結論―今後の課題

本稿では昨年度の考察に引き続き、『ダウントン・アビー』の世界的大ヒットの原因を、幾つかのイギリス的価値観を基に考察してきた。今後は、第一次資料による更な

る分析を行なう必要性がある。こちらについては稿を改めて論じる予定である。

本稿の結論として、次の点を確認したい。

『ダウントン・アビー』とは、イギリス貴族の生活という階級意識を最も感じさせる対象を、一般大衆にもなじみのあるものとして提示することに成功している。言い換えれば、一般的に見られる、伝統的イギリス文化に対する羨望やゴシップ的好奇心を十分に鳥瞰したうえで、物語が展開する。その意味で、歴史的考証が十分になされていることは無視できないにせよ、『ダウントン・アビー』とは 21 世紀に生きる私たちが、肯定的イメージとして抱くイギリス的価値観を、現代から照射した神話的要素を持つ世界なのである。この描き方を決して否定はできないが、素朴に無邪気なまま、イギリス的価値観のリアリティとして受け入れることには危険が伴うのである。

謝辞と付記

本稿は、科研費（16K02872）成果の一部であり、平成 27 年度福井県大学連携リーグ連携講座と平成 28 年度福井高専高専カフェの両講演内容を基にしている。大変有意義なご質問や暖かい激励を下さった同講座の受講者を始め、開催にご尽力なさった関係各位に、ここで改めて深くお礼を申し上げる。

多言語環境で働く技術者の英語力に関するニーズ分析[1]

宮 本 友 紀*　藤 田 卓 郎*

A Needs Analysis of the Required Command of English for Engineers in Multilingual Workplaces

Yuki MIYAMOTO and Takuro FUJITA

The purpose of this study was to conduct a needs analysis of the English competency requirements for Japanese technical workers in their multilingual workplaces. Interview and memo data obtained from six interviewees working in the Vietnam branches of four Japanese companies were qualitatively analyzed and discussed. The results were split into four categories: checking official documents, negotiating/marketing, sharing progress, and conducting daily life. Furthermore, one or more of the communicative events from each category were classified accordingly. The implications and limitations of this study are also discussed.

Keywords：multilingual workplace, needs analysis, engineering company, ESP, Vietnam

1．はじめに

工業高等専門学校（以下、高専）は、技術者を養成する高等教育機関である。独立行政法人国立高等専門学校機構（2012）では、高専の目指す目標として、「幅広い場で活躍する多種多様な実践的・創造的技術者」を養成することが挙げられている。このような目標に鑑みるならば、高専における英語教育も、技術者養成という特定目的のための英語学習（English for Specific Purposes, 以下、ESP）の視点が求められる。

ESP のカリキュラムでは、授業で学習した内容が直接的に教室外で使用可能になることが望ましい（Kaewpet, 2009）。しかしながら、現在の高専の英語のカリキュラムは、ESP が望ましいとされる内容を十分に反映しているとは言い難い。独立行政法人国立高等専門学校機構(2012)における英語の到達目標は、「英語運用能力の基礎固め」と「英語運用能力向上のための学習」という２項目から設定されている。前者は、「英語の発音」、「語彙」、「文法事項及び構文」という内容から到達内容が設定されている。後者は、「オーラルコミュニケーション」、「読み書きを通して行うコミュニケーション」という内容から到達目標が設定されている。到達目標の記述は「英語のつづりと音の関係を理解できる」、「自分や身近なことについて、前もって準備をすれば毎分 100 語程度の速度で約１分間の口頭説明ができる」（同上 , p.40）など、一般的な英語に関するものであり、技術者が使用する英語や職務上直面する英語使用場面を具体的に考慮して作成されているとは言い難い。

Kaewpet（2009）が述べるような ESP のカリキュラムを構築するためには、技術者が直面する英語使用場面を把握し、それらを踏まえた学習内容をシラバスに反映させる必要がある。しかしながら、日本の技術者が職務上直面する英語使用場面について体系的にニーズ分析（needs analysis）を行った研究は非常に少ない。そこで本研究では、海外に事業を展開する企業に焦点を当て、日本人技術者が海外でどのような英語使用場面に直面しているかを、具体的な事例を挙げながら報告する。

2．ニーズ分析

ニーズ分析は、様々な場面で多種多様な方法で行われて

*一般科目教室（人文社会科学系）

いる。例えば、ホテルスタッフが職務上直面する英語使用場面を調査することや、大学や高専での授業開講前に、学習者が不足していると思われる力について把握すること、学生が取り入れてほしいと考えている内容を調査することも同様に「ニーズ分析」と呼ばれている。これらの例から分かるように、「ニーズ分析を行う」と言っても、その過程や成果（outcome）は様々である。ニーズ分析に対する認識や解釈は多様なものが考えられるため、ニーズ分析が行うことを明確にしなければ、知見の積み重ねは困難である。そこで本節では、先行研究をもとに、ニーズ分析を行う際に考慮するべき点について３点概観する。

１点目は、ニーズ分析の目的を明確にすることである。ニーズという用語は多種多様な意味で用いられる。先行研究（Dudley-Evans & St. John, 1998; Hutchinson & Waters, 1987; West, 1994）でもニーズについて多様な解釈がなされているが、これらの研究で共通して述べられているものには、Hutchinson & Waters（1987）の言葉で言うところの必要性（necessities）、欠如（lacks）、要望（wants）、学習環境の制限（constraints）がある。必要性とは、目標場面において必要な言語使用を行うために知っておくべきことを調査することである。具体的には、目標言語使用場面を分析したり、どのようなやりとりが必要とされているかを調査したりすることを指す。欠如とは、学習者が既に知っていることと知らないことを明らかにすることを指す。要望は、学習者が必要だと思っていること、望んでいること、受講するコースに求めていることを明らかにすることを指す。学習環境の制限は、コースが行われている環境的な側面についての情報を収集することである。例えば、コースに従事するスタッフや活用できる時間、教材、設備などを明らかにすることを指す。このように、ニーズには様々な側面が考えられるため、ニーズ分析を行う際には、ニーズのどの側面を明らかにしたいかを明確にし、分析の計画を行うことが求められる。

２点目はニーズ分析の単位（unit）を明確にすることである。ニーズ分析の単位には（１）語彙や文法、（２）スキル、（３）タスクを単位としたものが考えられる（Long, 2005）。語彙や文法を単位とした分析とは、目標場面において使用される言語表現を調査することを指す。このような調査の結果として、使用される頻度や重要度が高い語彙や表現が成果物として示されることが多い（例：石川 , 2016）。スキルを単位とした分析とは、目標言語使用場面における４技能（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）の使用頻度や重要性について調査することを指す。

当該分野においてどのスキルが最も使用されるか、重要視されるかが、他の技能と比較して示されることが多い（例：Spence & Liu, 2013）。タスクを単位とした分析とは、教室外で求められる言語使用場面について明らかにすることを指す。「電子メールを書く」、「電話のやりとりをする」、「ビジネスレターを作成する」のように、当該分野で直面する頻度の高い使用場面、重要である使用場面が結果として示される（例：Huh, 2006）。これらの例が示すように、どのような単位でニーズ分析を行うかによって得られる成果の質は異なるため、ニーズ分析の目的を明確にし、どのような情報が必要かを考えた上でニーズ分析を計画、遂行する必要がある。

３点目はトライアンギュレーション（triangulation）について検討することである。具体的には、情報源（source）のトライアンギュレーションと方法（method）のトライアンギュレーションを考慮する必要がある（Long, 2005）。

情報源のトライアンギュレーションとは、異なった立場の人々から情報を収集することを指す。ニーズ分析の情報源には、学習者、言語教師や応用言語学者（以下、言語教師）、当該分野の専門家（domain expert）が考えられる。これまでのニーズ分析研究では、学習者から情報を得るタイプの調査が多く行われて来た。しかしながら、必要性の観点からニーズ分析を行う場合、勤務経験のある学習者（in-service learner）であっても、仕事上必要とされる言語についての情報は持っていないことが多い。勤務経験のない学習者（pre-service learner）は、言語についても仕事についても情報を持っていないことが多い。そのため、言語についての情報を豊富に持っていると思われる言語教師や、普段仕事で直面している言語使用場面についての情報を豊富に持っていると思われる当該分野の専門家の情報も合わせて収集し、多角的な側面からニーズ分析を行う必要性が指摘されている（Long, 2005; Serafini, Lake & Long, 2015）。

方法のトライアンギュレーションとは、異なった方法を組み合わせて情報を収集することを指す。このことについてLong（2005）は、文献調査、面接（interview）、質問紙調査を組み合わせた方法を提案している。まず、綿密な文献調査を行い、当該分野で必要されるニーズについての情報を収集する。また、言語教師や当該分野の専門家など、異なる情報源に対して非構造化面接[2]（unstructured interview）を行い、当該分野で必要とされるニーズに関する情報を収集する。文献調査や面接の結果を踏まえて質問紙を作成し、適宜構造化面接（structured interview）を組み合わせながら情報を収集することを提案している。このように、多角的な情報源から多角的な方法でニーズ分析を行うことで、当該分野の言語使用状況を踏まえた、妥当性の高い結果が得られる可能性が高くなる。

3．先行研究

ニーズ分析を行った研究は様々なものがあるが、工業分野において、必要性の観点から、日本人技術者が実際にどのような英語使用場面に直面するかを調査した研究は非常に少ない。また、日本の工業分野においてタスクを分析として体系的に行われたニーズ分析は非常に少ない（藤田，印刷中）。本節では、数少ない研究の事例として清水・小山（2001）と藤田（印刷中）を取り上げ、日本の技術者が直面する英語使用場面について概観する。

清水・小山（2001）は、工業系大学出身者の英語使用場面について調査した。工業系大学を卒業した204名を対象に質問紙調査を行い、英語使用に直面する状況、使用頻度が高い技能、必要とされる技能、不足していると思われる技能、具体的な英語使用場面について尋ねた。その結果、英語使用に直面する状況として最も多く回答されたものには「仕事」が挙げられ、次いで、「研究」と「海外旅行」が挙げられた。また、リーディングの機会が他の3技能と比較して直面する頻度が高いことが報告された。必要とされると同時に不足していると思われる技能にはリスニングとスピーキングが挙げられた。仕事上で特に求められる具体的な英語使用場面には、学会誌の論文、電子メール、ビジネス文書、組織内外での会議・打ち合わせ、学会での口頭発表が報告された。

藤田（印刷中）は、高専生が学校生活及び将来技術者として直面する可能性のある英語使用場面について調査を行った。高専の学生（専攻科生）と工業系の専門教員、そして技術者合計28名を対象に半構造化面接（semi-structured interview）を行い、学生に対しては、これまでの学校生活で少しでも英語を使用したかどうかを、専門教員には、これまでの指導の中で学生が少しでも英語を使用した機会があったかどうかを尋ねた。技術者には、職務上少しでも英語を使用した機会があるかどうかを尋ねた。その後、挙げられた項目の内容、話題、頻度、留意点などについて詳細を尋ねた。得られたデータを質的に分析した結果、所属組織、交際、業務、研究、機器・技術、英語学習に関する15の目標タスクタイプ[3]が報告された。高専と企業で共通して報告された目標タスクタイプには、「所属組織の紹介をする」、「企業の情報を収集する」、「日常会話をする」、「学術論文や専門書を読む」、「技術文書の読み書きをする」、「英語の勉強をする」が挙げられた。高専において直面する可能性の高い目標タスクタイプには、「自身の研究を紹介する」、「研究に関する情報を収集する」が挙げられた。企業において直面する可能性の高い目標タスクタイプには、「自社製品の紹介をする」、「予定の調整をする」、「仕事の進捗状況を報告する」、「仕事上の議論をする」、「指示や助言をする」、「機器や技術に関する情報を検索する」、「機器の操作説明をする」が挙げられた。これらの結果から、技術者が直面する英語使用場面には多様なものがあることが示唆された。

清水・小山（2001）と藤田（印刷中）で得られた知見を合わせて検討すると、工業系の学生が学校生活および将来直面する可能性のある英語使用場面には、自社の製品を紹介すること、自身の研究を発表したり紹介したりすること、学術書・専門書・論文を読むこと、テクニカルレポート・ビジネス文書・電子メールを読み書きすることが挙げられることが分かる。しかしながら、このような研究は限られているため、日本の技術者が直面する英語使用場面を幅広く的確に把握するには、より一層の研究の蓄積が必要である。また、近年では、技術者が海外で勤務する事例も多くなってきている。清水・小山（2001）や藤田（印刷中）は、工業系大学を卒業した学生が直面する英語使用場面、高専生が将来技術者として直面する英語使用場面につ

いて調査を行っているが、海外で勤務する事例に絞って体系的に調査した研究は筆者の知る限り見られない。海外で勤務する日本人技術者が直面する英語使用場面や課題について調査することは、工業大学や高専の学生が技術者として将来直面する英語使用場面を詳しく知るために有用であると考えられる。

4．本研究の目的

これらの点を踏まえて、本研究では、海外に事業を展開する企業を対象に、日本人技術者が海外勤務時に直面する英語使用場面について調査する。具体的には、海外で勤務する日本人技術者を対象に半構造化面接を行い、海外勤務時に直面する英語使用場面を報告する。同時に、当該場面において、日本人技術者がどのような役割を担うことが求められているのかを、具体的な事例を挙げながら報告する。

5．方法

5．1　研究協力者

研究では、ベトナムで事業を展開する日系企業に勤務する技術系管理職を対象に情報収集を行った。本社を日本に置きながらベトナムに営業所と工場を展開する製造業4社の現地日本人スタッフ6名より協力を得た。表1は、各研究協力者の性別、所属会社、役職（英語表記）を示している。

表1　研究協力者

ID	性別	所属企業	役　職
E01	男	A社	General Manager
E02	男	A社	Technical Manager
E03	男	B社	General Manager
E04	男	C社	General Manager
E05	男	C社	Factory Manager
E06	男	D社	General Manager

5．2　データ収集方法

データの収集法として半構造化面接を行った。面接は2017年3月に行われた。面接にあたり、1社を除いてホーチミン校外の各工業団地にある面接者の職場を訪問し、直接対面する形で行われた[4]。なお、面接は、調査者2名と当該会社の面接協力者1名、または2名が同時に会する形で行われた。

面接は以下の手順で行われた。まず、面接協力のための同意を書面で確認した。質問内容として、職務上英語を使う場面、その際の問題点、語学に限らず学生に在学中に身につけてほしいこと、言語面以外で現地で苦労していることなどを尋ねた。その後、調査者が作成したタスクリストを提示し、再度英語を使用したどうかを尋ね、得られた回答について具体的な内容を尋ねた。タスクリストは藤田（印刷中）を踏まえて作成された。

5．3　分析方法

録音されたデータを書き起こし、データとして使用した。データ収集の際、1社（A社）からは面接協力の同意は得られたが、面接音声の録音の許可が得られなかった。そのため、調査者が面接中に作成したメモをデータとして用いた。他の3社については、録音の許可が得られたため、面接データを書き起こし、データとして用いた。

書き起こされた内容は、佐藤（2008）を参考に、以下の手順で分析された。まず、書き起こされたデータを読み、研究協力者が職場で行った英語使用場面を探し、暫定的にコーディングした。その際に、内容、目的など活動に関する記述も合わせてコーディングした。コーディングは第一著者によって行われた。一通り分析を終えた後、コーディング内容について第二著者と検討し、相違点がある場合は議論し、合意を得た上でコーディング内容を修正した。このような過程を経て目標英語使用場面を決定した。そして、抽出された英語使用場面を、その内容、文脈、状況を踏まえて検討し、カテゴリを決定した。

6．結果

半構造化面接で得られたデータを質的に分析した結果、「公的書類をチェックする」「営業・交渉をする」「仕事の進捗状況を共有する」「日常会話をする」の4つのカテゴリが生成された。表2は、本研究で得られたカテゴリと、その中で見られた英語使用場面がまとめて示されている。

表２　本研究の結果

カテゴリ	英語使用場面
公的書類をチェックする	（1）公的書類をチェックする
営業・交渉をする	（2）交渉中通訳された内容を口頭で補う （3）交渉先からの要望のメモを読む （4）契約に関する書類を読む
仕事の進捗状況を共有する	（5）外国人スタッフと口頭で情報を共有する （6）コンサルタントの進捗状況を口頭でチェックする （7）コンサルタント同士の仕事のやり取りのメールを読みチェックする
日常会話をする	（8）企業接待・交渉の際日常会話を行う （9）展示会で日常会話を行う (10) ワーカーに声をかける (11) レストランでオーダーする

以下では、それぞれのカテゴリごとにどのような英語使用場面が見られたかを、事例を示しながら報告する。

6．1　公的書類をチェックする

１つ目は、公的書類に関する仕事である。このカテゴリでは、「（1）公的書類をチェックする」という英語使用場面が見られた。このカテゴリにおける公的書類には、主として関税に係る貿易関係の書類、またベトナム企業以外の日系や外資系企業相手の発注、会計監査のための書類などを含む。特に、ベトナム－日本間の二国間協定（EPA）により関税の優遇を受けるための「原産地証明」に係る書類は全て英語で準備する必要があり、ベトナム在住の製造業に携わる日系企業にとって必須のものとなっている。作成にあたっては、通常はコンサルタント会社に外注し、各会社の専門知識を備えた日本人スタッフが書類の最終チェックを行うことが報告された。

チェック作業には、「なのでどちらかというと学校に出てくる英語はあまり役に立たないですね．専門用語ばっかりになってきますので」（E03）とあるように、一般的な英語ではなく、当該分野の専門的な英語の知識が求められることが報告された。また、日本人コンサルタントだけでなく、「購買業務と貿易業務をやっている社員も，一応英語は大学で習って，読み書きはできる，会話程度ならできるという人なので，大体問題なくやっています」（E03）とあるように、英語を解する現地ベトナム人社員も英語書類の作成に携わっており、彼らの作成した書類の最終チェックも業務として行われることが報告された。以上の確認作業の際には、「購買業務と貿易業務と会計業務に関しては，英語が絡んでくるんで，最近ウェブリオとかの翻訳サイトが（性能が）あがってきてるんで，ちょっとお願いとかグーグル先生お願いとかで済んじゃうところもあるので，大体急ぎでやるときは」（E03)」とあるように、翻訳サイトも活用されていることが報告された。

6．2　営業・交渉をする

２つ目は、営業・交渉に関するものである。取引先の拡大などの営業・渉外業務に関しては面接先４社について共通する関心と見られた。４社への面接から、海外事業の立ち上げ時には、リスクを避けるために日本本社を最大の取引先という形で事業をスタートさせ、ある程度軌道に乗ったところで新規の取引先や販路の開拓を積極的に行っていくという順序を取っていることが共通してうかがえた。また、日系企業がベトナムに進出するメリットとして、日本との協定による関税優遇制度や現地法人税の優遇、安価な人件費や新規の工業団地を建設する土地の余裕があることなどがある。その他にも、「やっぱ日本だけじゃね、売り上げがねっていうのがありますので」（E03）とあるように、国内での取引・販売の限界への活路を海外進出によって見出すことがいずれの企業でも期待されていた。営業先は、ベトナムローカルの企業、海外の在ベトナム企業、あるいは日本国内では今まで取引のなかった在ベトナム日系企業と多岐にわたるようであった。使用言語もその多様性が反映され、日本本社とのやり取りは日本語で行われる一方、ベトナムのローカル企業やベトナムで多くを占める在住外資系企業への営業には、相手先の言語に加えて、英語の使用場面が確認された。

このカテゴリにおける英語使用場面は「（2）交渉中通訳された内容を口頭で補う」「（3）交渉先からの要望のメモを読む」「（4）契約に関する書類を読む」の３つが報告された。以下、事例を挙げながら報告する。

まず、「（2）交渉中通訳された内容を口頭で補う」について述べる。A社では、在ベトナム外資系企業など、詳細

や正確さを要求される交渉の場面では相手方の言語が分かるスタッフが通訳を行うことが報告された。しかし、その場合であっても「(通訳が訳してくれても) 交渉事の大事なポイントは、(日本人が直接) 自ら英語を使う。そうすることで意思決定が早い、自分の要求が通りやすいこともある」(E01) とあるように、交渉先で用いられている言語に関わらず、日本人スタッフも出来る限り英語を使用して交渉に加わろうとしていることが報告された。そのため、たとえ通訳スタッフを依頼するにしても、交渉の際には、補足部分を発言できる英語力が必要とされることが報告された。

「(3) 交渉先からの要望のメモを読む」については、E03 から、ある外資系会社の在アジア事務所のスタッフが取引成立のための最終監査に来社した際、指摘事項の英文メモ書きをその場で直接渡された事例が報告された。

> ヨーロッパの基準というのは，非常に面倒くさいといったらあれなんですけど，自社で販売する物の製造をしている会社が，社会的責任を果たしてるかどうか，という厳しいものがあるんです (中略) 色々基準がありまして，それの検査で先週来たのが，結局台湾人と香港人の女性２名が，英語でやるわけですよ (中略) 結構細かいところ突っ込んでくるんですけども，見せてあげたいくらいですけども，文章が句読点で切れないんですよ．指摘事項が (E03)

「(4) 契約に関する書類を読む」については、上記 B 社の同一の交渉業務の際、契約にあたって先方の会社が要求する一定の基準に関する書類を読み、お互いの条件のすり合わせを行う事例が報告された。なお、以下のデータの「イ」は面接者を指す。

> E03：そういう社会的責任とかそういう形になってくると，縛りが強くなるんですけども，取引自体はそんなに難しくないです．話してみると．ただ，はじめに書いてある，二十何ページの会社の責任っていうようなものをこうなんですと会社の方針を打ち出してしまってるので，それにそぐわないことはしませんとか．
> イ：その書類は英語ですか？
> E03：英語ですね．で，そこのポイントだけ海外事業部と話して，ここととここが納得いかないというやり取りをしているんですけども．

6．3　仕事の進捗状況を共有する

３つ目は、仕事の進捗状況の確認およびモニタリングに関するものである。このカテゴリは、今回の研究協力者が多言語使用の職場環境で勤務している状況を特に反映しているように思われた。今回調査を行った４社の企業のスタッフ、コンサルタント、ワーカーは全員ベトナム人であり、スタッフの多くは大学卒業程度以上の学歴をもつ事務系職員、コンサルタントは会計事務所のスタッフ、ワーカーはその多くが中学卒業程度の学歴をもつ工場労働者であった。そして、彼らの使用言語には大きなばらつきが見られることが報告された。社内スタッフは、程度にばらつきはあるものの、通常日本語と英語を使用することができた。コンサルタントはベトナム語と英語は堪能だが日本語は理解できないケースが多いようであった。工場ワーカーは、ほとんどがベトナム語のみを理解、使用し、日本語や英語は理解できないケースが多いようであった。一方、日本人スタッフは、日本語と英語を主として使用し、ベトナム語に関してはあまり理解できないようであった。そのような複雑な言語の制約がある中で、いかにして互いに意思疎通、あるいは情報などの共有を行うかということが課題となってくるように思われた。

このカテゴリでは、「(5) 外国人スタッフと口頭で情報共有する」、「(6) コンサルタントの進捗状況をチェックする」、「(7) ワーカーと親交を図る」の３つの英語使用場面が報告された。１つ目の「(5) スタッフと口頭で情報を共有する」という英語使用場面については「日本語と中国語、台湾語、ベトナム語、韓国語などができるスタッフが出向で来ている。(中略) 出向した人たち同士、社長も交えて話す時の共通語は英語。」(E01) のように、ベトナム人スタッフや日本人スタッフだけでなく、さらに異なる言語のネイティブスピーカーが出向し同じ職場で勤務する場合には、共通語としての英語の使用が必要となる事例が報告された。

２つ目の英語使用場面である「(6) コンサルタントの進捗状況を口頭でチェックする」では、公的書類の作成の際、その進捗状況の確認などをベトナム人コンサルタント

と英語で行う事例が報告された。

会計が非常に難しいといいますか，法律改正もよくありますので，決算業務をやるときに，決算の資料に関しては，特に製造量が非常に難しいこともありまして，会計事務所にお願いしてます．会計事務所にお願いしてるんですけど，もちろん日系の会計事務所ですので，ローカルのスタッフ同士ではベトナムだけでもいけるんですけど，さっきも言ったようにアカウント業務になりますと，英語が多くなってきますので，共有するためにやはり英語でやり取りをします．(E03)

また、３つ目の英語使用場面である「(７) コンサルタント同士の仕事のやり取りのメールを読みチェックする」のように、口頭だけでなくメールによる進捗状況のチェックが行われている事例も報告された。

E03：基本的な書類の作成とやり取りはローカル同士でやりますので，ベトナム語でやられると私たち分からなくなりますので，基本的に英語でやってもらわないとチェックできません．とりあえず英語で CC つけといてもらえれば，こうやってやり取りしてるんだとチェックできますので．
イ：なるほど．やり取りを CC で．
E03：そうですね．基本的に CC つけさせないと，かってに課目決められると困りますので．
イ：じゃあ　ベトナム人同士であるけれどもベトナム人同士が英語でやり取りをして．
E03：そうです．たまにやり取りをベトナム語でやってるところもあるんですけど，それも一応呼んで聞くとかですね

これらの事例が示すように、業務自体はローカルのスタッフやコンサルタントが行うため、本来であれば、スタッフやコンサルタント自身の母国語で仕事を行うことが可能である。しかしながら、彼らの業務内容を日本人スタッフと共有するためには、日本人がスタッフやコンサルタントが用いる言語を理解するか、三者が共通して理解できる言語を用いて意思疎通を図る必要がある。このような状況を踏まえて、たとえローカルのスタッフやコンサルタント同士のやりとりであっても、業務のプロセスを英語で報告させる事例が報告されたと解釈できる。そして、日本人スタッフには、英語で書かれた内容を確認するだけの英語力が求められることが示唆されたと言える。

６．４　日常会話をする

４つ目は日常会話に関するものである。今回の調査から、相手方の言語を理解しない場合、英語であれば若干の意思疎通が図れる可能性が日本語より高く、その意味で英語を多少でも操れるかどうかが切実な問題となってくる場面も多いことがうかがえた。そのような「互いの母語を理解しない場合での共通言語としての英語」の役割が、海外の、とりわけ日常のコミュニケーションの場面では重要となってくると考えられる。

このカテゴリでは「(８) 企業接待・交渉の際日常会話を行う」「(９) 展示会で日常会話を行う」「(10) ワーカーに声をかける」「(11) 日常生活で英語を使用する」の４つの英語使用場面が報告された。

まず、１つ目の「(８) 企業接待・交渉の際日常会話を行う」という英語使用場面について報告する。「ベトナム企業の３分の１が外資系企業なので、ベトナム語が分からないお客さんが来ることもある。その時は英語を使う（中略）訪問や仕事、交渉を行う際、詳細なことや正確な内容を要求される時には相手の言葉が分かるスタッフが通訳を行なっている。ただし、それ以外の日常的なもの、コミュニケーション的なものは英語を使用する」(E01) とあるように、接待や交渉の重要な場面においては、通訳を介してやり取りが行われることが報告された。しかしながら、日常会話や雑談などの比較的カジュアルなやり取りの際には、通訳を介さずに積極的に英語を使用することで、直接先方とコミュニケーションを図ろうとしていることが報告された。

２つ目の英語使用場面である「(９) 展示会で日常会話を行う」では、現地での製品の展示会において、日系企業には日本語、それ以外の企業には、大抵の場合、相手先の言語を用いることが報告され、やりとりは通訳が対応することが報告された。このような場合でも、日本人スタッフはやりとりを通訳に全面的に任せてしまうのではなく、英

語のやり取りを補足的に行うことが報告された。

> 展示会とかでまあ行ったりするとまあほどほどに若干英語（中略）うちのスタッフが英語できる子がいるので日本語と英語ができるので、まあその子連れてって通訳でこう話すことがほとんどですね（E01）

次に、３つ目の英語使用場面である「(10) ワーカーに声をかける」について報告する。E05 が「言葉は通じないけど、『頑張って』みたいな単語は言えたりするので、そういったところを改善していきたいと思っているので（中略）やっぱり今の状況ですとあんまり英語は必要ないですけど、相手が日本語がわからない単語が出てこないとき、そしてこちらがベトナム語が分からないって時にはやっぱり共通言語のすり合わせはあるかなと」と述べているように、ごく初歩的な英語を用いて通訳を介さず、ワーカーと直接コミュニケーションを図ろうとする事例が報告された。日本人スタッフとワーカーが直接意思疎通を図ることは、お互いが使用する言語が異なるために難しいことが多い。そのため、工場内でのワーカーとのやり取りは、基本的にベトナム人スタッフが間に入ってベトナム通訳することになる。しかしながら、このような場合であっても、全てを通訳に任せてしまうのではなく、積極的にコミュニケーションをとろうとしていることがうかがえた。

４つ目の英語使用場面である「(11) 日常生活で英語を使用する」では、E05 が「ローカルじゃなくてもホーチミンの店とか行くと日本人見ればやっぱり基本英語です。英語で受け答えをしてくれる」と述べているように、現地での日常生活における英語使用について報告された。海外では基本的に現地の言葉が日常生活においても主として使われる。一方で、今回の面接ではあまり報告がなかったが、外国人相手のサービス業、とりわけ飲食店、交通機関、観光業などに従事する人々は英語をある程度使用すること、その際日常生活の中で多様な英語使用が確認されることが想定される。

7．考察

本研究では、海外に事業を展開する企業を対象に日本人技術者が職場で直面する英語使用場面についてニーズ分析を行った。その結果、４つのカテゴリと 11 の英語使用場面が報告された。本節では、先行研究との比較、要望の観点から、本研究で得られた結果について考察する。

まず、今回の結果を、藤田（印刷中）の高専生、高専教員、技術者を対象としたニーズ分析と比較する。藤田の研究と共通して見られた英語使用場面には、「日常会話をする」、「口頭で仕事について議論する」、「口頭で指示（チェック）をする」などが挙げられる。しかしながら、総合的には、本研究ではかなり異なったタイプの英語使用場面が多く見られた。本研究と藤田（印刷中）の研究結果の相違の要因として２点述べる。１点目として、本研究の研究協力者は、いずれも役職が日本語の表記では社長、工場長に妥当すると思われる管理職であることが挙げられる。一方、藤田 (印刷中) における研究協力者は、大半が 20 代であり、平均勤務歴が 6.4 年と勤続年数が短い、若い技術者であった。この相違が、一見反対の業務（例えば「仕事の進捗状況を報告する」に対して「仕事の進捗状況をチェックする」など）が両研究で見られる一因と考えられる。また、通訳や翻訳はプロが行い、技術者自身はそのチェックや補足を行う、社員スタッフのモニタリングやマネジメントを行うという業務が主となるのは管理職ならではと言える。

２点目は、本社に比べて海外では小規模な事業所となることから、少人数の日本人スタッフで多様な業務に対処しなければならないことが挙げられる。このことが、専門的な分業が可能な本社勤務との大きな違いと考えられる。例えば、今回の調査では、主たる業務は技術職でありながら、営業的な渉外業務にも携らければならない事例などが報告されている。これらをまとめると、日本人技術者が海外事業所で勤務する際の英語ニーズの特徴として、管理職としての仕事が多いこと、また、自身の専門外の職種（営業など）にも幅広く対応することが望まれることに留意すべきである。

次に、要望の観点から本研究の結果を考察する、本研究では、必要性の観点からニーズの分析を行ったが、要望の観点からの英語使用場面を分析することにもまた一定の意義があると思われる。今回の面接調査では、高度な英語力を備えていなくても必要な業務や日常生活は最低限維持できていると述べる面接者が大半であった。その一方

で、「英語ができなくても仕事も生活もそれなりにやってこれた。ただし英語ができるにこしたことはない。」(E01) とあるように、さらにもう少し英語（あるいはベトナム語）ができればなお望ましいという声が今回の面接でしばしば報告された。具体的には、スタッフとの共有、新規営業先の開拓、日常生活などである。例えば、日本人と現地スタッフの双方が英語で十分にコミュニケーションする能力を備えていれば、職場において英語を共通言語として用いることができる。そうなれば、仲介者の必要もなく、管理職側のモニタリングとマネジメントの負担の軽減も可能であろう。

> ホーチミンの（大企業の）会社さんなんかのレポートとか聞くと, 社内共用語を英語にしますよとか．要するに, ベトナム語で話すと日本人がわからないですよね．（中略）ベトナムで実質的にやらせてる人間も，都合悪いことは絶対に訳さないわけですよ．それはこちらも気づいてますけど．（中略）情報はちゃんと齟齬がない．そういうのがまず必要なんでしょうけど（E03）

あるいは、「英語で話してくるお客さんも今後は増えてくるんだろうなと思いますね．その時に，ちゃんとした英語対応のスタッフも用意しとかないとなぁと」（E03）とあるように、もし英語で高度な交渉を通訳なしで直接行う能力があればより積極的に、よりスムーズに外資系企業にも営業をかけられる可能性もある。さらに、もし日常生活でもっと自由に英語を操ることができれば、「プライベートでの行動範囲も変わってきますよね。英語が話せる、話せないで億劫になりますからね。」（E05）とあるように、現地での生活もより充実したものになるかもしれない。このように、技術者が身につけたい、使用したいと思っている要望の観点から英語使用場面について分析、考察することは、今後どのような指導を英語教育で指導していくべきなのか有益な示唆を与えてくれるものと思われる。

8．結論

本研究では、ベトナム企業に焦点を当て、海外で勤務する日本人技術者が直面する英語使用場面について調査を行った。その結果、４つカテゴリと 11 の英語使用場面が報告された。また、海外事業においては、日本人は管理職としての業務が求められること、自身の専門分野以外にも多様な業務が求められることが報告された。

技術者が直面する英語使用場面を調査した研究は十分であるとは言えないため、今後さらなる研究の蓄積が必要である。また、本研究では、英語使用場面の調査を行っているが、それぞれの使用場面において実際にどのような英語表現が用いられているか、談話的な側面の調査も必要である。さらに、必要性の観点だけでなく、要望の観点からのニーズ分析を蓄積することで、実際に英語使用場面に直面している技術者が真に必要としていることを明らかにすることができる可能性がある。いずれも今後の課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、急なお願いにもかかわらず、日系企業のスタッフの方には面接、訪問の依頼に快くご協力いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

注

[1] 本研究は、平成 28 年度福井県内大学等連携研究推進事業「“FUKUI（ふくい）”の企業をグローバルに発信！―福井のものづくり力紹介英語テキストの作成による『グローカル人材育成』支援」の助成を受けて行われたものである。

[2] 面接によるデータ収集法は、構造化面接、非構造化面接、半構造化面接の３つが挙げられる。構造化面接は、予め尋ねる質問項目と順序を決め、設定通りに面接を行っていく手法である。非構造化面接では、質問項目を事前に決めずに面接を行う手法である。半構造化面接では、予め質問項目を設定するが、話の流れに応じて質問内容や順序を柔軟に変更しながら面接を進めていく手法である。

[3] 目標タスクタイプとは、教室外で実際に使用する場面（目標タスク）の特徴をまとめて抽象化したものを指す（Long, 2015）。

[4] １社は、面接協力を依頼した際、研究協力者が日本に滞在していたため、日本の本社を訪れて面接を行った。

引用文献

独立行政法人国立高等専門学校機構(2012).『モデルコアカリキュラム（試案)』Retrived from http://www.kosen-k.go.jp/pdf/mcc20120323.pdf

Dudley-Evans, T. J., & St John, M. (1998). *Developments in English for specific purposes.* Cambridge: Cambridge University Press.

藤田卓郎(印刷中).「工業高等専門学校におけるタスクを基にしたシラバスの構築を目指したニーズ分析」*JABAET Journal, 21*.

Huh, S. (2006). A task-based needs analysis for a business English course. *Second Language Studies, 24(2)*, 1-64.

Hutchinson, T., & Waters, A. (1987). English for specific purposes: A learning-centered approach. Cambridge: Cambridge University Press.

石川有香（2016）.「大学教科書分析を踏まえた初年次学生用工学系 ESP 語彙表の作成の試み」『中部地区英語教育学会紀要』45, 305-312.

Kaewpet, C. (2009). Communication needs of Thai civil engineering students. *English for Specific Purposes, 28*, 266-278.

Long, M. H. (2005). *Second language needs analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Long, M. H. (2015). *Second language acquisition and task-based language teaching*. West Sussex: Wiley Blackwell.

Serafini, E. J., Lake, J. B., & Long, M. H. (2015). Needs analysis for specialized learner populations: Essential methodological improvements. *English for Specific Purposes*, 40, 11-26.

清水裕子・小山由紀江（2001）.「工学系大学卒業生の英語ニーズ分析―質問紙調査に基づいて―」『立命館経済学』50, 388-405.

Spence, P., & Liu, G. (2013). Engineering English and the high-tech industry: A case study of an English needs analysis of process integration engineers at a semiconductor manufacturing company in Taiwan. *English for Specific Purposes*, 32, 97-109.

West, R. (1994). Needs analysis in language teaching. *Language Teaching*, 27, 1-19.

寄せる」（二〇一頁）との指摘がある。

（6）辛島正雄氏は「〈女の物語〉論のために」（『中世王朝物語史論　上』笠間書院　二〇〇一）で「男に自らの加害者としての意識が希薄なだけでなく、女のほうも、それを動かしがたい「宿世」と観念して、最初の出会いに屈辱を感じることがあっても、いつしかそれも風化し、大方は自らの支配されている事実にも気づかなかったのではなかろうか」と述べている。一般的に私たち現代人からすれば犯罪にしか思えない行為も、当時の人々にとってみればさほどのことではないということはある。望まぬ密通もあるいはそれに類するものだったのかもしれない。が、それとは別に「支配されている事実にも気づか」せないことに対する強い違和感は、忘れずに持っておきたい。これは現代社会にもつながる問題である。未だに「強姦はされるほうが悪い」という認識がどこかで残ってはいまいか。被害者に対し「もっと逃げようと思えば、もっと抵抗しようと思えばできたのではないか」と問うてはいまいか。その認識からは「性を通じての支配」という発想が欠けている。一品宮もまた、性を通じて支配されてしまっているのだ。現代にもなお残る愚劣な認識に、一品宮の歌、そして言葉は対峙しようとしている。

（7）現代の強姦被害者が汚された自己の身体を汚らわしく思い、自己嫌悪に陥るといったこととこの一品宮の自己嫌悪とは関わりがあるのか。当時、普通のこととして行われていたと思しい「望まぬ密通」。『いはでしのぶ』では、それへの違和感、被害感情が点描されていると読むことができるだろう。「望まぬ密通」に対して、手習歌という形であっても声を上げた女として、一品宮を捉えることができるかもしれない。

（8）ある意味では、一品宮の平穏な「昔」懐古の生活のために姫宮は犠牲になったとも言えそうだが、姫宮と二位中将との夫婦仲は円満であり姫宮としてもそう悪い結婚ではなかった。二位中将はこの時点で臣下の中でトップの存在であり、娘の幸せを考えてのこととも捉えられよう。

（9）さらに言えば、一品宮は二位中将をして家の外では自分の息子（帝）に、家の中では自分の娘（姫宮）に仕えさせる生活を強いたということも言えるだろう。

（10）思えば『源氏物語』でも光源氏は臣籍降下しながら、息子（冷泉帝）を帝位につけ、最終的には自らも准太上天皇になっていた。一品宮は女版光源氏と言えそうである。

（11）図にすると、次のようになる。

【図３】

巻一～三　　巻四～

「昔」（父院・宮中・皇室）　「昔」（内大臣・内大臣との子＝帝）

⇔　相思相愛　　⇒　懐古（子の幸せ、王権の補強）

一品宮　　一品宮

⇒　片思い　　⇒　片思い

「今」（内大臣）　　「今」（二位中将）

←　結婚、補佐（王権の補強）

一品宮の「昔」（内大臣の子）

（12）光源氏が紫の上を、また狭衣大将が宰相妹君を得ても、なお「生身」（本体）への愛執が断ち切れなかったことを思い合わせたい。愛しい女をあっさり諦め、その娘に満足しきる男主人公は、結局のところ（光源氏や狭衣のような）主人公としての輝きを失い、一品宮のコマに成り下がったとも言いうるのではないだろうか。

能で人望も厚い二位中将を、「昔」（＝内大臣との家族の世界）に取り込むことで現王権を補強し、亡き夫の血筋を皇室のものとして後世に引き継ごうとしているのだ。非常にしたたかな一品宮像が見えてくるだろう（9）。出家後、女院として、男君の欲望をそらしつつ、帝の補佐をさせる女君としては『源氏物語』の藤壺がいるが、帝が男君の息子ではなく、それどころか恋のライバルの息子なのに補佐させるという点で、一品宮のほうがさらにしたたかで残酷だと言えよう。

「昔」降嫁した一品宮は、再びその息子を通して皇室へ血を戻す（≒「昔」へ還る）こととなっている。そして、その王権の血筋は二位中将の協力を得てしばらく安泰であると考えられる。二位中将との男女関係（今）を忌避し通し、内大臣との「昔」を懐古し続けることで、彼女は物語冒頭で懐古していた「昔」（父院を始めとする皇室での生活）にまた近づくことができたとも言えるのではないだろうか。皇室を追われて皇室を偲ぶ一品宮が、最終的にはまた皇室へとつながっていく（10）。二位中将という味方を得て、その王権は一段と強固なものとなっているのであった（11）。

おわりに

ここまで『夜の寝覚』の寝覚の上と、『いはでしのぶ』の一品宮との比較を行ってきた。その結果、彼女たちが常に「昔」を懐古する姫君であるという共通性を持ちながら、その結末には大きな差があることが確認できた。

その差が生まれた原因は様々あるが、やはり一品宮が自分の意志に基づいて決然と髪を下ろしたことが大きいのではないだろうか。『夜の寝覚』の寝覚の上は現存部最後まで自由ではないが、これはやはり出家していないからだろう。「望まぬ密通」で「今」と直面させられた姫君の、「昔」を思うための「切り札」が出家なのかもしれない。『いはでしのぶ』が『夜の寝覚』から何を学んだかと考えた時、あるいはそのような「切り札としての出家」を学んだのかもしれないと考えたくなる。一品宮はその切り札を早々に使い、「昔」へとつながっていくことに成功していたのだった。

とするならば、『いはでしのぶ』という物語には何とも惨憺たる風景が広がっていることになりはしまいか。その物語末尾で描かれているのは、恋に破れた男たちの出家である。女は「昔」を懐古するために出家し、男は「今」の恋に期待できず出家していく。僧侶にあふれた寒々しい世界。男女間のすれ違いここに極まれり、といった状況である。政権を担う男主人公、二位中将もろくな男ではない。女の「昔」懐古に協力する見返りに彼女そっくりの娘を得て目尻を下げるという浅ましい姿をさらけ出してしまっている（12）。

ともあれ、一品宮が「望まぬ密通」「降嫁」という不運に接しても、自分の（「昔」を懐古するという）生き方を貫こうとした事実に変わりはない。寝覚の上ほどの美貌と才能にあふれた姫君でも、その人生を思う通りには生きられなかった時代状況の中で、一品宮は出色の存在と言えるだろう。娘を与えて（＝娘の面倒を見させて）男の欲望をコントロールしながら、亡夫との間の息子を補佐させる。『源氏物語』の藤壺以上にしたたかで、『夜の寝覚』の寝覚の上以上に意志的な女性。『いはでしのぶ』の達成のひとつとして、そんな一品宮の存在を強調しておきたい。

【注】

（1）『いはでしのぶ』における一品宮」（『物語の皇女』笠間書院　二〇一〇）

（2）代表的なところでは『中世王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社　一九九七）などに『狭衣物語』からの影響の指摘がある。

（3）寝覚の上の姉、大君にとって「昔」は苦々しいものとして思い起こされるものであった。「昔よりとりわき殿の教へたまへど、つねにたどたどしくて」（巻一　一九頁）と、昔から父が琵琶を教えてくれたのに結局上達しなかったこと、さらに「昔より、殿の御心ざしの、あの君にはこよなくおぼし落としたれど」（巻二　一七四頁）と、その父の愛情は妹に比べて劣っていたと言うのである。寝覚の上は姉に不満を抱かせるほど、愛されていたと言えようか。

（4）注（1）論文に同じ

（5）『新編全集』の頭注にも「中の君は京での生活に敗れ傷つくごとに、広沢に身を

得なかったのに対し、『いはでしのぶ』では、そのまま一品宮は取り返されることなく、内大臣が死去するに至ることである。

一品宮は、寝覚の上の造形を踏まえつつも、自発的に選択、決断する姫君、さらにその決断を貫徹する姫君として造形されているということがいえよう。もちろん、そこには「院の御気色変はらず、ゆるぎなけれ」（巻二　一五一頁）という父院の強硬な姿勢も影響しているわけだが、父院と心を合わせて「昔」を選び切る、強い姫君像がそこには描かれていると言えるのではないだろうか。

内大臣の死後は、内大臣との「昔」を選びとる姿勢を貫こうとする。意地の悪い見方をすれば生前、雪が降るなか苦労して会いに来た内大臣と会いもしなかったにもかかわらず、死後、二位中将から執念深く迫られるに至って、内大臣との結婚生活を「昔」として、懐かしく思い返すのである。

先に引用した一品宮の和歌を、再び掲げたい。

憂き節は思ひ出づれどなかりけりその呉竹の代々の古事　（巻四　二二七頁）

おのづからほの見し夢のうちをだになにか嵐のおどろかすらん　（巻四　二三九頁）

内大臣との結婚生活にまったく不満はなかったとして、夢での邂逅を喜んでいるのである。

この辺りは、先に見た寝覚の上と重なるものがあるかもしれない。寝覚の上もまた、老関白と結婚していたときはその夫婦生活に嘆いたり、「昔」を懐古したりして、夫婦仲は最良のものではなかった。夫が死に、その夫婦生活が「昔」のものとなって初めて、妻は夫婦生活を懐かしく思い返すのである。

ただ、寝覚の上と違うのは、寝覚の上が「今」、つまり男主人公との生活をすることになったのに対し、一品宮は最後まで「今」、つまり新たな男（二位中将）との生活を拒みきるのである。もちろん、一品宮が出家済みであるということも大きく影を落としているわけだが、それにしても一品宮の拒絶は徹底している。

次の箇所は、二位中将が一品宮を掻き口説く場面である。

「あさましや忍ぶも忍ぶ限りだになくて涙の色も変へてきかかるたぐひはあらじかし」と聞こえ給へど、御耳にも入らぬさまなるもことわりなれば、「あな、よしなのもの言ひや。今は、燃えし思ひも、悔しき方ばかりぞや」　（巻四　二三八頁）

一品宮は二位中将の必死の口説きに、耳も貸そうとしない。その決然とした態度は清々しいほどである。逆に二位中将は「よしなのもの言ひや」などとこぼして、諦めの悪さをさらけ出してしまっている。

自分を諦めきれない二位中将に一品宮は自分の娘（姫宮）との結婚を許可する。いわば「形代」であるが、その時に一品宮が詠んだ和歌がまた非常に興味深い。

撫子を消えにし露の形見ともしのばん人をいかがへだてん　（巻五　二七四頁）

あなたが「消えにし露」、つまり亡き夫のことを偲んでくれる人であれば、距離を置くことはしない（暗に「撫子（娘）」との結婚許可も示唆していよう）と言うのである。

思えば残酷な提案ではないだろうか。つまり、形代との結婚と引き換えに、一品宮は二位中将を（一品宮が懐古する）「昔」に引きずり込もうとしているのである。自分と同じように「昔」を懐古してくれるなら、その「形見」として娘を渡そうという提案なのだ。

しかし「女院の御さまに違ふ所なき」（二七一頁）とされる姫宮に激しい恋心を抱いてしまった二位中将に、断るすべはなかった。中将は娘と結婚する。以降、一品宮は二位中将に悩まされることもなく、内大臣との「昔」を追憶しながら生きることができたのであった（8）。

『いはでしのぶ』で面白いのは、その「昔」の追憶が政治的な意味を持つことである。と言うのは内大臣との間に生まれた男児が、帝に即位しているからだ。一品宮は有

を懐古する。

憂き節は思ひ出づれどなかりけりその呉竹の代々の古事　（巻四　二二七頁）

内大臣との結婚生活につらい時などまったくなかった、というのである。さらに、結婚生活を送った一条院に行った時には、

真木柱寄りゐし人の面影の去らずは長き形見ならまし　（二三六頁）

と、内大臣の面影を慕うような心境を垣間見せている。極めつけは、内大臣の夢を見た次の場面である。

嵐の音のおどろどろしきに、うちおどろかせ給ひつる御心地、何にかはたとへん。夢と知りせば、と悔しさも限りなし。

おのづからほの見し夢のうちをだになにか嵐のおどろかすらん（二三九頁）

亡き夫の夢から醒めて「夢と知りせば」と思ったという。これは当然、小野小町の歌が引かれているわけだが、まさにここで一品宮は小野小町の恋歌のような激しさで内大臣を恋い慕ったのである。

一品宮は時に「昔」を恋い慕いながら、夫にも確かな愛情を持ち始めていく、その揺れ動きが物語には克明に記されている。

七、「昔」を選び切る一品宮　――寝覚の上との差異

前項では、気持ちが揺れ動きながらも仲むつまじさを見せる一品宮を最後に確認した。そのむつまじさは形だけのものではなく、内大臣死後、一品宮は亡き夫を何度も追慕していくことも確認できたと思う。

しかし内大臣生前の、巻二に話を戻すと、決定的な場面で彼女は「昔」を選択する。父院が自分のもとに一品宮を引き取ろうとした時、宮はそれを受け入れ、内大臣との別離を選択するのである。

「見馴れ磯馴れて、別れなんなごりは、げに忍びがたうもありなんかし」と、ややもせば落ちぬべき御涙を、「我ながらあなうとましや。たとひいかなる奥の夷に身をなぐへて、長くこの世を別れよとも、院の上などののたまはんことは、いかにと思ふべきにもあらぬを、まして、さばかり恋しき古へに立ち帰りて、院・后の宮にいつも添ひきこえてあらんことの、少しも憂かるべきかは」　（一四六頁）

誰の助言もない、彼女自身の決断として注目される。夫と別れる名残は我慢できないだろうとしつつも、その思惟を「あなうとまし」と一蹴し、自分がずっと恋い慕ってきたのは「古へ」であったと自分に言い聞かせている。時に気持ちが揺れ動きつつも、その一点は一貫していたのだ。

内大臣は雪の降りしきるなか、一品宮に会いに行く。しかし、侍女の大納言の君に取次ぎを願うも、一品宮は決して会おうとはしない。内大臣は悲しみの中、歌を詠む。

宿借りし月も昔に返るやと身を憂き雲よ払へ山風　（巻二　一六三頁）

この「月」を一品宮のことだとするならば、私のところに宿を借りていた「月」、一品宮が「昔」の元いた場所に帰ってしまったという悲痛な叫びと考えることができようか。この後の彼自身の死を予感させる歌である。

先に、『夜の寝覚』第一部でも、雪を冒して男主人公が寝覚の上のもとに会いに行くという場面があったことを思い出したい。彼もまた、女を「月」に喩えて歌を詠み、その手に入らなさを嘆いていた。父のもとに返った「月」の姫君として、『いはでしのぶ』は『夜の寝覚』の当該場面を換骨奪胎しているものと思しい。最大の違いは、後の巻五で描かれる二度目の男主人公の取り戻しに寝覚の上が屈さざるを

このときの一品宮は『源氏物語』「若菜上」巻で、女三宮の元に行く光源氏を黙って送り出す紫の上とつながってくる。紫の上も、また夫を別の女の下に送り出した後、物思いにふけっていた。

人やとがめんと心の鬼におぼして、入給ぬれば、（中略）ふとも寝入られ給はぬを、近くさぶらふ人々あやしとや聞かむと、うちもみじろぎ給はぬも、猶いと苦しげなり。（『新日本古典文学大系　源氏物語　三』二四三頁）

紫の上は「源氏が女三宮の元に通うことになって、紫の上はどれほどつらいだろう」という周囲の目を気にしている。かえって眠ることができず、「猶いと苦しげ」という苦境に陥っている。

一品宮も、起き出す際に「人の思はんこともつつましう」（一〇六頁）、「人目やいかがと、よろづつつましきより他のことなけれど」（一〇四頁）と、何度も人目を気にしているさまが描かれている。夫が別に女を作って悲しいだろう、という周囲の同情交じりの視線が何よりも一品宮には耐え難いのである。そんな一品宮は紫の上の系譜に連なっている。

このように一品宮は、父院からの手紙を契機として、「今」の結婚生活に「うらめしさ」を感じ「昔」を偲ぶ思いを再燃させていく。

そんな彼女にとっては、世間の夫婦のように夫と馴れ親しんでいくことに対する違和感がある。

「あり経れば、かやうのことさへ、似つかはしう世の常めきてなるべき身の契りのつらさよ」と思さるるに、さしもつつましき御涙しも、所得顔になりまさりて、ものもおほせられぬも、いとどあらぬ方にのみとりなされぬべければ、

何ごとも思ひぞ知らぬ身一つの憂きには堪へぬ涙なれども

と、のたまはせ紛らはして、うちそむかせ給ひぬる御気色のらうたげなるものから、なまめかしう心恥づかしさに、「例の人に似ぬ御癖は、げにさもあらむ」と、ねたうさへなり給ひつつ……（一〇八頁）

結局は、「世の常めきて」しまう「契りのつらさ」に、一品宮は涙する。嫉妬して流した涙なのではない。彼女はそう思って歌を詠む。

自分の身がつらい、というのはすでに引用した（六二頁の）和歌でも詠われていた。そこにあるのは、この涙は、この苦悩は夫とはまったく関係ないのだという彼女の精一杯の矜持である。あくまで変わってしまった我が身がつらいのであり、夫が他に女を作ろうが、そんなことは関係ないのだと彼女は言う。「今」の生活が自分にとって全てなのではない、一品宮はそう自分に言い聞かせているように思われる。

そうして顔を背けた彼女の姿は、夫からは「らうたげ」と感じ取られるわけだが、同時に「例の人に似ぬ御癖」（嫉妬しない習性）と忌々しくも思われている。多少は嫉妬してほしいということなのだろうか。とするならば嫉妬しない（もしくは、そう見せかける）ということは、そんな夫に対するささやかな反抗にもなっているかもしれない。

だが、一品宮は「うらめしさ」「契りのつらさ」を感じ、結婚生活に葛藤を抱きつつも、夫に対して確かに愛情を抱いてもいるのである。

もろともに後れ先立つ露の間も隔てぬ世々の契りともがな

と聞こえ給へば、うち涙ぐませ給ひつつ、

後れじと慕ふ心やさそひけん消えにし露も置きかへりけり

など、聞こえかはさせ給ふ御あはひのうつくしさは、げに千年を万代も、あくよあるまじきを……（一四一頁）

危篤状態から蘇生した後のやり取りである。一品宮は、現世も来世もずっと一緒にいたいと詠う夫に、涙ぐみながら「あなたの心が私を生き返らせたのだ」と返している。非常に仲むつまじい夫婦関係であるといえよう。

一品宮の気持ちは揺れ動いている。「昔」を慕う気持ちと、夫に馴れ親しむ気持ちで揺れているのだ。そして、その夫への想いが、後々、二位中将を拒む際の心のよりどころとなっていく。

後の展開となるが一品宮は、内大臣の死後、折に触れて内大臣との結婚生活、「昔」

六、揺れ動く一品宮

一品宮が「昔」を懐古し、変わっていく自分を恨んでいることは前項で確認したとおりである。しかし、恨んでばかりいるわけではない。時に夫と親しみ、時に関係を恨み、と彼女の気持ちは揺れ動いている。

次の箇所は、夫、内大臣と歌を詠み合う場面である。

内大臣、

笛竹のまつと契らむ風の音に入りぬる月のかへらざらめや

などのたまふに何となく御心に入りたることぞ、

松風にかよふ憂き音やいかならむなほ山の端に入り方の月

とのたまはせまぎらはして、一筋に端を御覧じ出だしつつ、琴の御琴の艶もことなるに、御袖うちかけて少しかたはら臥させ給へる分け目、髪ざしなど入りなむ月の光もこれにはまことに影とどめぬべく、波よりかかる御ぐしの隙なうつやつやと見えたる御肩のわたり、御もてなしけはひのたをたをと、なつかしげさ、よろづにつけて見奉り給ふ。（巻一　七四～七五頁）

一品宮は夫の和歌を聞いて感興がそそられ、二位中将の「憂き音」とは何なのか、と夫と一緒になって気にするそぶりを見せる。夫と和歌を詠みあい、夫の親友の恋をともに気にかけるといった風情からは夫との関係にそれなりに馴れ親しんでいく様子が見て取れる。一品宮は夫との関係に馴れるというふうに変わっていくのである。

そして、こうした夫と馴れ親しむ姿が二位中将からは「月の光もこれにはまことに影とどめぬべう」と切なく眺められている。後に一品宮は二位中将から恋の告白を受け、悩むことになる。つまり、この場面は後々、内大臣との関係が「昔」に、二位中将との関係が「今」にスライドしていく際の伏線なのである。

巻二に入ると、さらに一品宮は夫との関係に馴れ親しんでいく。

男君、

千入まで染むる紅葉も君を思ふ心の色にたぐひやはする

と書きて、見せ奉り給へば、

色深く思ひそめても言の葉の秋果てがたはいかがたのまん

と習ひすさませ給ふを、「あな、いまめかしの御もの言ひや。かかることも知らせ給へりけるな。いつの御ならひにか」と聞こえ給へば、御顔いと赤うなして、黒う墨をひかせ給ふもをかしかりけり。（巻二　九三頁）

「あなたは頼りにできない」とよくある恨み言をいう妻に、一品宮はいつの間にかなっている。一品宮は内大臣にそれをとがめられ、顔を赤くして恥ずかしがる。その姿は夫から「をかしかりけり」と捉えられており、ある面では仲むつまじい夫婦関係と見えなくもない。

一方、夫婦関係に馴れ親しんでいく「身」に彼女自身、時に葛藤を覚えてもいる。特に父（白河院）から手紙をもらった後の葛藤には激しいものがあった。

さまざまに思し続くるに、荒らましかりつる夜半の気色よりはじめ、常はいとさまで思し入れられぬことも、折からにや、ただ今はものうらめしう思されて、一方ならず濡るる御袖を、いつとても憂き身を思ひ知り、昔をしのばぬことはなけれど、今朝はいとはしたなく、人の思はんこともつつましう……（巻二　一〇六頁）

父からの手紙に、宮は夫との結婚生活に深く思いをいたす。すると、いつもはさほど気にしてこなかった夫の行状（伏見大君との結婚）が、「ものうらめしう」感じられてくるのだ。これまで、一品宮は夫と伏見大君との結婚をさほど嫌がってはこなかった（嫌がっている描写はなかった）。しかし、それは単に一夫多妻制（あるいは一夫一妻多妾制）という当時の状況下で、その制度に馴らされてしまっていただけだったのだ。彼女は内心その制度を、そして、その制度をいいことにほかの女に心を分ける夫に、強い「うらめし」さを感じていたのだった。

い慕う傾向があったことも忘れてはなるまい。寝覚の上の影を背負いつつ、さらに皇女として強く昔を想う存在として、一品宮があるとも考えられよう。

このように一品宮の懐古する「昔」には、皇女ということ、また『夜の寝覚』の影響もあって強く「父」の存在がかかわっている。本文を見ていこう。

よろづは昔に変はりたる御心地なれど、四月晦日頃、「一夜がほどにても入らせ給へかし。その後かき絶えて、恋しとは思されぬか」と聞こえさせ給へるに、恥づかしさもさしおかれつつ、しのびもあへず嬉しく思されけり。

（巻一　二四頁）

父と娘のやりとりとしては、どことなく官能的な雰囲気が漂うのは気のせいだろうか。「一夜がほどにても入らせ給へ」、「恋しとは思されぬか」と、まるで恋人にでもささやくような父の言葉も言葉だが、「しのびもあへず嬉しく思」う娘も、愛しい男に愛をささやかれた女の反応と、表現としてほとんど変わりはない。あえて語弊のある言い方をすれば、一品宮は父帝（＝「昔」）と両思いなのであり、夫である内大臣とは当初、さほど愛情はなかったということができる。

そのことは、次の和歌からも読み取ることができる。

「嘆きわび憂かりし夢のうちにだに消えなばかかるものは思はじ
かくても経ぬる」

（巻一　六〇頁）

内大臣に強引に関係を迫られたときに死んでしまえたら、今のような物思いに沈むことはなくて済んだのにという歌である。子を成したものの、夫と相思相愛といった甘い関係にないことははっきりしていよう。

そして、この和歌が訴えているものは非常に重い。男（内大臣）の強姦同然の密通行為への糾弾であると同時に、そうした卑劣な行為を許し、そのまま自分に苦しい時間を過ごさせた社会への精一杯の抵抗でもあるからだ。内大臣との望まぬ密通の際、（近代風に言えば）彼女の主体性、人間性というものは踏みにじられたに違いない。彼女は己の主体性、あるいは皇女であるというプライドを踏みにじられたまま、憂鬱な時を過ごしてきた。「かくても経ぬる」からは、そうした自分の人生というものに彼女は嘆きを通り越して、諦念さえ覚えているといった趣を感じさせる。

そのことを思うとき、一品宮が夫を愛せず「昔」を懐古してばかりいるのは、いわば当然であった。男女の仲を強引に知らされる以前の、親の愛情を受けて幸せに過ごしていた自分がそこには存在しているからである。

もちろんこれは近現代的な発想であって、当時の女性たちがたとえば現代の強姦された女性たちと同様に悩み苦しんだかといえば、必ずしもそうとは限るまい（6）。けれども、ひたすらに自分を慈しみ、育ててくれた「父」の愛情と、彼自身の高ぶる感情のままに関係を突きつけてきた「男」たちの乱暴な愛情（とひとまず言っておく）を比べたとき、女の心内にはどうしても割り切れぬものが残ったのではないだろうか。

さらに一品宮の和歌を見ていく。

「とにかくにたえぬ契りは憂からねどありしに変はる身をぞ恨むる」

（巻一　六二頁）

彼女は夫婦関係がつらいのではないという。変わってしまった「身」がつらい、というのである。自分の「身」を自分で恨むという、ある種の自己嫌悪が垣間見られることに注意したい（7）。同じ密通で関係を結ばされ「今」と「昔」の間で葛藤していた寝覚の上には見られなかった感情で、注意を要する。

一品宮は変わっていく自分を恨んでいる。彼女が懐古する「昔」、それは父帝に愛情をもって育てられ、男の身勝手な欲望に振り回されることを知らなかった無垢な時代であった。変わってしまった今の自分に自己嫌悪さえ感じるほど、その「昔」は一品宮にとって甘美な時間だったのだ。

な「昔」を呼び起こしてくれる父のもとで出家しようというのである。

寝覚の上は父入道に「髪のいますこし短くならむばかりのやつれよりほかは、今は何事の口惜しかるべきにもはべらず」（巻五　四三六頁）と出家を懇願し、一度は許される。そして「さて頼みきこえむは、我も人も恨めしき節まじらず、さはやかに、いみじくうれしく」（四六六頁）と、出家後に男女関係を離れて男主人公と付き合うことに早くも心を躍らせていた。

しかし、その出家の願いは男主人公の連れ戻しによって泡と消える。広沢の寝覚の上を取り戻そうとするのは第一部でもあったが、今度の男主人公は違った。父入道の前にすべてをさらけ出し、二人の間の子供（まさ子君、石山姫君）を見せ、前掲【図1】の三角関係に真っ向から挑むのである。入道は寝覚の上と男主人公との関係にまったく気づかなかった不明を恥じるしかなかった。

「あはれ、かかりけることどもを、夢の中にも我が知らで、心をやりて故大臣に許し放ちしほど、男も女もいかばかりおぼされけむ」（四五九頁）

「男も女も」と言う父入道は、すでに男主人公と寝覚の上との関係を一対の男女として認めている。前掲【図1】の三角関係の決着はここでついたと見てよい。寝覚の上は父のもとでの出家を断念させられ、もう一度、男主人公との「今」の生活に投げ込まれるのであった。

しかし二つ目の「昔」、つまり老関白との「昔」は非常に根深いものがあった。出家を断念させられただけに、寝覚の上の「昔」を恋い慕う思いには拍車がかかったようでもある。

「もし長らふる命もあらば、恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人ぞかし」と思ふに、亡き昔のみ恋しく、「我は我」とうちながめられて、

山の端の心ぞつらきめぐりあへどかくてのどかにすまじと思へば

（四八八～四八九頁）

もし長生きをしたとしたら、男主人公には恨めしい面が多い（すぐ嫉妬する粘着質な性格や、すでに女一宮という正妻がいること）として、老関白との「昔」を恋しがる寝覚の上である。

さらに物語の後半部では、「すこしさだ過ぎ、世のつねのなべてのさまなりし昔の御心のみ恋しく、『などて、すこしうち緩ぶ気色を見えたてまつらで過ぎにけむ』と悔しきに、月の光も見えず、涙のみ浮かぶ」（巻五　五四〇～五四一頁）とあり、「昔」の結婚生活を懐古するあまり、もっと老関白と打ち解ければよかったと後悔するまでに至っている。嫌だったはずの老関白の老けた様子、十人並みの容貌さえも恋しいものとして想起されており、寝覚の上の中で、「昔」が相当に美化されていることには注意が必要である。しかし、出家の道が閉ざされた寝覚の上にとっては、「昔」を懐古すること、そして、「昔の形見」として義理の娘たちを世話することだけが心の慰めだったと言えようか。

結局、現存本最後の時点まで男主人公は、寝覚の上の「昔」を乗り越えることができなかった。寝覚の上は「昔」を懐古しつつ、「夜の寝覚絶ゆる世なく」（五四六頁）「今」の生活、つまり男主人公との「世」を生きていくことになるのであった。

では、次に『いはでしのぶ』一品宮の「昔」について、考察していきたい。

五、一品宮の「昔」　――一品宮の詠歌から

先に確認したように『いはでしのぶ』の一品宮は「昔思しおきてられしままならば、まことに内裏などにも候ひてこそあらましう」と、父帝のそばにいる自分を夢想し、父を恋い慕う。勝亦氏も「一品宮を考える上で重要なことは、彼女が常に宮中や父白河院を恋い慕うことである」（4）と指摘するとおり常に彼女は宮中、特に父帝を慕うのである。

もちろん、このことは彼女が「皇女」であるということが大きくかかわっている。勝亦氏の言葉を借りれば「皇統の聖女の座から降嫁という形ですべり落ちてしまった」（5）のであり、彼女が昔を恋い慕うことは無理のない設定と一応は言えよう。

しかし、これも確認したとおり『夜の寝覚』寝覚の上にすでに父や父の居所を恋

らすれば、亡夫を懐古し、その恩愛を忘れない貞淑な寡婦に迫るなどできない。帝は、いわば死者との三角関係の前に立ちすくんでいるのだ。前項にしたがって、図にするならば次のようになるだろう。

【図2】

「昔」（＝老関白）
⇔「相思相愛」
寝覚の上
⇒「片思い」
「今」（＝帝）

さらに寝覚の上は、義理の娘（老関白の連れ子）である督の君に次のように述べている。

「いかなるにつけても、片時忘れぬ昔の御代はりには、また誰をかは」（二九三頁）

老関白との生活を「片時忘れぬ」とし、常に心中に老関白との「昔」を抱いているというのである。もちろん、これは老関白の娘への台詞であるから、多少割り引いて考える必要もあるかもしれない。しかし、これまでの督の君と寝覚の上との親しい関係を思えば下手な気遣いをする必要はなく、この言葉には寝覚の上の真意がこめられていると見てよいのではないだろうか。

寝覚の上の「昔」は第一部における父や姉といったものから、第二部になって老関白やその娘をさすものへと変化しているということが分かる。彼女はその「昔」を大事に考え続ける。督の君たちの世話に精を出すのだ。その世話は督の君から「まことの母おはせましかば、限りあらましものを」（二九四頁）と思われるほど行き届いていた。寝覚の上自身、「恋しさの尽きせぬ昔の形見には、この御事どもをこそは」（巻五　五一三頁）と、老関白との尽きぬ思い出がその娘たちへの世話へと向かわせていることを自覚しており、どれほど老関白との「昔」を大事に思っていたかが分かるだろう。

四、寝覚の上の「昔」（三）——第四部の「昔」

前項では寝覚の上が中間欠巻部以降の第三部において、非常に老関白との「昔」の夫婦生活の思い出を大事していたことが確認できたと思う。

第三部、そして第四部（巻四、巻五）の男主人公は、依然として寝覚の上の心中に根強く巣食う「昔」の記憶を乗り越えようとしていたのではなかっただろうか。男主人公は、寝覚の上が「昔」にとらわれていることを知っている。一部先にあげた箇所だが、再掲する。

花橘の枝も、いとど昔恋しきつまとなりまさりつつ、その折かの折と、思ひ出づるに、

『なぞや。かからぬ人も多からむ世を。我が身一つ、世とともにものあはれに、心の浮かびたるよ』（中略）その折ばかりこそ、いささか、身の人聞き目やすきほどはありけれ」など、つくづくとながめ出でたまふにも、（中略）我が身も浮き立つ心地するに、忍びわび、歩み入りたまふに、思ひもかけぬほどなれば、誰とも思ひ分かれず、奥ざまに引き入りたまふを、「など、かくは」と引きとどめて、

「世の中になき身ともがなひきかへし昔のことぞ人も恋ひける
心憂の御ひとりごとやな」（巻四　三九〇～三九二頁）

男主人公は、老関白との生活を懐かしむ寝覚の上を「心憂の御ひとりごと」と恨み、常に一緒になる機会をうかがっている。

一方の寝覚の上は男主人公へ愛情を持ちながらも、女一の宮という妻のいる男主人公との「今」を選び取る気にはなれない。内心、出家を企図し、父入道の住む広沢に転居することを決意する。老関白との「昔」を心に抱きながら、また別の甘美

ようと思ったものらしい。侍女たちの同情を引き、あわよくば連れ出すことへ賛同させようというのだろう。しかし少将は「いみじう心苦し」（二〇九頁）と同情こそするものの、「入道殿の、今日の雪げに風起こらせたまひて（中略）、まづ渡しきこえたまふ」（二一〇～二一一頁）と、父入道が風邪を引き、寝覚の上をそばに召しているから、会わせることはできないと言う。

ここで「昔」の男（父）と、「今」の男（男主人公）との間で、ある種の三角関係が現出していると言えるのではないか。図にすると次のようになる。

【図1】

「昔」（＝父）
⇔「相思相愛」
寝覚の上
⇒「片思い」
「今」（＝男主人公）

男主人公は、父に庇護されている寝覚の上を連れ出すことはできない。

こよひだにかけ離れたる月を見てなほや頼まむめぐりあふよを
（巻二　二一六頁）

という和歌を詠み、むなしく引き下がるのであった。この和歌の「月」には寝覚の上が喩えられているだろう。彼は月の光のような美しい寝覚の上を諦めきれない。その想いは後の巻三以降での執着へとつながっていくのである。

三、寝覚の上の「昔」（二）　――第三部の「昔」

さて、前項では巻一、巻二の「昔」について見てきたが、欠巻部分を挟んだ巻三以降では、寝覚の上の「昔」は変化している。どう変化しているのか、具体的に見ていきたい。

次の場面は、帝から文をもらった寝覚の上が、返歌をする場面である。

君ももし昔忘れぬものならばおなじ心にかたみとも思へ
御返しは、いとつつましけれど、まめやかに、過ぎにしあはれをおほせられたる、きこえさせざらむもいとあやしかるべければ、心をのべて、
ももしきを昔ながらに見ましかばと思ふもかなししづの苧環
（巻三　二四五頁）

欠巻部において寝覚の上は結婚しそしてその夫、老関白と死別している。ここでの「昔」は、その夫が生きていた時のことを言っている。宮中の様子を、夫が生きていた時のままに見たかったと、夫との結婚生活を懐古しているのである。欠巻部を経て、寝覚の上が懐古する「昔」が変化していることが分かる。もちろん、この「昔」という言葉は帝の言葉によって呼びおこされたものである。この箇所自体、帝の口説きめいた和歌に対し、結婚していた過去を持ち出していなしている箇所ではある。けれども、「昔」が良かったもの、懐古されるべきものとして（しかも、第一部の「昔」とは違うものとして）認識されていることは注目される。

この後も、寝覚の上は何度となく「昔」を懐古し、口にもしていく。次の場面は寝覚の上が迫ってくる帝を拒みぬこうとし、帝の仕打ちに抗議の声を上げたところである。

からうじて「思ひ知らぬにははべらぬに、『昔ながらの身ならましかば、かばかりも、思ひかけぬに御覧ぜられましや』と思ひはべる、涙ばかりのどめがたきに、せかれはべるほどなさも心憂く」
（二八一頁）

夫が生きていた「昔」のままであれば、こんなふうにはお目にかからなかったでしょう、と寝覚の上は言う。いわば寝覚の上は亡夫を持ち出して、帝の行為を非難しているのだ。女性は「待ちかけつつのみ見る」（二七三頁）のを信条とする帝か

れるのは明らかなすれ違いであり、男からすれば片思いの恋である。「自分は想っているのに、彼女は自分を見てくれない」といったある種の被虐的な悦楽が、その想いをさらに切なく高ぶらせているのかもしれない。

では、その女が懐古する「昔」とは具体的には何なのか。まずは寝覚の上について、詳しく見ていきたい。

二、寝覚の上の「昔」（一）――第一部の「昔」

寝覚の上にとっての昔、それは「家族」とともに何の不安もなく育った記憶だったのではないか。

寝覚の上は、男主人公との密通をきっかけに姉との確執が生まれてしまう。それに耐え切れなくなり、京から父のいる広沢へ転居することを決意する。それが次の場面である。

月をも花をももろともにもてあそび、琴の音をも同じ心に掻きあはせつつ過ぎにし昔の、恋しきに、「残りなく飽き果てられぬる世なれば、いよいよ山より山にこそ入りまさらめ」　（巻二　一九七頁）

寝覚の上の胸に去来するのは、季節に応じて姉や父と楽器を演奏して楽しんだ幸せな記憶である。その楽しかった昔には、もう戻れない。姉に飽き果てられてしまったという認識が、寝覚の上を追い詰め、彼女は出家を考えるのである。

その出家の思いについては、広沢で父と再会することで消えていく。次にあげるのは父娘二人の対面場面である。

「我さへ、待ち受けてものしげならば、いづくにか身をも隠さむ」とおぼすに、みなさめて、いとかくても見えたてまつらじとおぼせど、おぼしつづくるにえ堪へたまはず、泣きたまひぬるを、姫君、「いかなることをおぼすらん」とおぼすに、恥づかしく、わりなくて、涙落ち添ひたまひぬる気色、いといとらうたげなり。　（巻二　二〇一頁）

父入道は「姉に嫌われて自分にも嫌われたら、この子は出家してしまうだろう」と思い、娘の絶対的な味方になろうと誓う。その父の包み込むような優しい態度に、寝覚の上は涙をこぼす。この箇所は『新編全集』「頭注」にも「語らずして父娘の情愛が横溢する」、「父娘の心の通いのうかがわれるところ」（二〇一頁）と指摘があるが、寝覚の上はこの父親の態度に、傷を癒していくのである。姉には嫌われたものの、もう一人の家族である「父」の庇護を受け、彼女は幸せな「昔」に一時、たゆたうことができたといえるだろう。

前掲本文一九七頁で「過ぎにし昔」として、寝覚の上が回想した「家族との合奏」も、父との間で行われている。

聞く人あらじとおぼせば、心やすくて、ゆくかぎり弾きたまひたるに、入道殿の、仏の御前におはしけるに、聞きたまひて、「あはれに、言ふにもあまる御琴の音かな」と、うつくしきに、聞きあまりて（中略）、琴掻き合はせなどしたまひて遊びたまふほどに、はかなく夜も明けぬ。　（二〇六頁）

聞く人もいないだろうからと、安心して心行くまで箏を弾き鳴らす寝覚の上。父のもとである程度リラックスして生活できていることがうかがえる。そして、その演奏に父入道が加わって合奏となる。寝覚の上の心には、「昔」の甘美な記憶がよみがえったのではないか。もちろん、この場に姉はいない。だから、完全に「昔」と一緒というわけではない。けれど、京都で自分を待ち受けている「今」の状況と比べれば、父に庇護されて演奏をするということは、彼女の心を相当程度安らかにしたのではなかったか。

そんな彼女に会いに、京都から男主人公がやってくる。

雪の降りしきる日、雪を冒して彼は父のもとにいる寝覚の上に会いに行く。「我、かばかり雪を分けて尋ね入りたらむを、対の君、少将など、いかばかりの岩木をつくりてか、情をかけざらむ」（二〇八頁）と、侍女たちに自分の誠意のほどを見せ

一旦は「望月のさやかなる光」「かぐや姫」に喩えつつ、さらに「なほめづらか」とそれらでも喩えようがないとするのである。寝覚の上は「月の光」以上の美しさを持った、かぐや姫的なヒロインなのであった。

「月の光」という点で言えば、さきほどは「花」と比べられていた一品宮もまた「月」に擬えられていることは注意を要する。

ただ照る月の光のみや、春の夜の霞の下に、朧に見ゆるかげよりはじめ、洩り来る月は心づくしに、曇らぬ半ばの秋の光にもことならず。おほかた家々の思ひは、折節の心変はるとも、ただこの光ばかりぞ、つれなく見えし有明までも、よそへられぬべき御有様なりける。　（巻一　一六頁）

この点について勝亦氏は「月という手の届かない、手にとることができないものとして、一品宮が造型されている」(3)とするが、まさに手にとることのできない「かぐや姫」的な造型が、一品宮にもなされていると考えられるだろう。

しかし、「手にとることができない」はずの一品宮、あるいは寝覚の上は、密通という手段を用いた男君によって、あっさりと契りを結ばされることになる。『いはでしのぶ』にいたっては、具体的な密通の場面も描かれず、「去年の秋頃、あさましき夢の通ひ路、露に濡れさせ給ひしそのままに、起きも上がらせ給はず」（一六頁）とされるだけである。

つまり、理想的な容貌、「手にとることのできない」ような造型がなされているにもかかわらず、彼女たちは男女の関係に強制的に投げ込まれていくのだ。一品宮はもちろん、寝覚の上も自分の類まれなる容貌、才能に気づいている（後に「身を立てて思ひ上がりしに」と自分自身の才能に気づき、己の未来に期待していたことが自嘲的に語られる）。だからこそ、彼女たちは悩むのであろう。この物語の骨子は、他に生き方があったはずの理想的な女君が、その男女関係に投げ込まれる前の、いわば「昔」（かぐや姫における月の世界）を懐古し続けるというところにひとつあるのではなかろうか。

彼女たちは「昔」を懐古し続ける。しかし、その姿がますます男たちをひきつけるのは皮肉である。

『夜の寝覚』

花橘の枝も、いとど昔恋しきつまとなりまさりつつ、その折かの折と、思ひ出づるに、『なぞや。かからぬ人も多からむ世を。我が身一つ、世とともにものあはれに、心の浮かびたるよ』（中略）その折ばかりこそ、いささか、身の人聞き目やすきほどはありけれ」など、つくづくとながめ出でたまふにも、（中略）我が身も浮き立つ心地するに、忍びわび、歩み入りたまふに……

（巻四　三九〇～三九一頁）

『いはでしのぶ』

「昔思しおきてられしままならば、まことに内裏などにも候ひてこそあらましう。さも思はずなりける身の契りよ」といつも思さるる中にも、のどやかに恥づかしげなる人の気色に、いちとどおき所なうつつましう思されて、あまりにものも仰せられぬもさすがなれば、（中略）うつくしなど言ふもおろかに、なつかしうらうたげなる御有様、例の身にしむばかり覚え給ひつつ、思ひ分く方なき涙は、これも先立つ心地すれど、「さればなにがしが身ばかりこそ、さすがいつも変はらぬものにては侍れ」　（巻一　五三～五四頁）

寝覚の上は昔を思い出して箏を爪弾く。その音色、その姿が男主人公を魅了する。一方の『いはでしのぶ』一品宮も、昔を思い出して涙を流す。その仕草が男主人公（二位中将）の心を狂おしく締め付ける。

彼女たちの心中には「幸せだった時間」というものが存在している。それが「昔」なのである。寝覚の上は「昔恋しき」とひたすらに昔を愛慕し、一品宮も「昔思しおきてられしままならば」と、昔の境遇を懐かしんでやまない。

そして、そのように懐古する女の姿が男たちにとっては非常に魅力的なのだ。二位中将にいたっては「なつかしうらうたげ」として、涙をこぼしてさえいる。自分を思わず「昔」を思う女に、男は狂おしく気持ちを募らせていくのだ。ここに見ら

はじめに

鎌倉時代に書かれた物語『いはでしのぶ』は、現状、本文に大きな欠損を抱えた物語である。巻一、巻二は完全な形で伝わる（と思しい）が、巻三以降は和歌の前後を抜き出した抜書き本しか存在しない。

そして、ちょうど似たような状況の物語に『夜の寝覚』がある。平安後期に書かれた『夜の寝覚』もまた、中間と末尾に大きな損傷がある。改作本である「夜寝覚物語」や『無名草子』の記述、『風葉和歌集』所収の和歌等からだいたいの内容が推測できるとはいえ、大きな傷を抱えた本文を読まざるを得ない点、『いはでしのぶ』と共通する。

この二つの物語は、本文に損傷があるという以外にも非常に多くの点で共通するところがある。

まず一点として、最初に焦点を当てられる人物が女性であるということである。勝亦志織氏は次のように指摘する（1）。

> 一品宮は物語の冒頭、一条院において桜を眺める姿が描出される。すでに、この冒頭は『狭衣物語』の影響が言われ、「狭衣型」といわれる冒頭表現になっている。しかし、ここで問題なのは、庭の桜を見つめる存在が一品宮という女性であり、彼女は狭衣大将が源氏宮を思慕していたのと相違して、宮中を恋い慕うということである。

勝亦氏も踏まえているが、これまで『いはでしのぶ』の冒頭はむしろ『狭衣物語』の影響が言われてきた（2）。しかし、氏の指摘どおり「一品宮という女性」が描かれていることが何より問題とするならば、『いはでしのぶ』はむしろ『狭衣物語』ではなく、『夜の寝覚』の影響をより大とすべきなのではないだろうか。『夜の寝覚』は言わずと知れた「女の物語」であり、かつその物語の始発は冒頭こそ主題明示、人物紹介と続くが、具体的な場面としては八月十五夜、ヒロインの中の君が月光のもと箏を弾くところから始まるのである。

> 秋の月からはじまる『夜の寝覚』に対して春の桜からはじまる『いはでしのぶ』。ヒロインから起筆する物語として鮮やかに対応している。これは徹頭徹尾狭衣大将という男性の生き方を描こうとした『狭衣物語』とは対照的である。『いはでしのぶ』は『夜の寝覚』の影響を受けて、その冒頭から女性を描こうとしたのではないか。

本稿ではその仮説をもとに、『いはでしのぶ』と『夜の寝覚』の二つの物語を比較、検討していく。具体的には『夜の寝覚』のヒロイン寝覚の上と、『いはでしのぶ』のヒロイン、一品の宮について検討してみたい。そうすることで、『いはでしのぶ』が『夜の寝覚』から何を学んだのか。そして、『夜の寝覚』を受け継ぎつつも、どんな女性像を新しく描こうとしたのかが見えてくるように思われる。『いはでしのぶ』の企図したものは何か、『夜の寝覚』との比較を通して考えてゆきたい。

なお、『夜の寝覚』の本文は『新編日本古典文学全集　夜の寝覚』（小学館　一九九六）に、『いはでしのぶ』の本文は『中世王朝物語全集　いはでしのぶ』（笠間書院　二〇一七）にそれぞれよった。

一、ヒロイン造型の概略 ――「昔」を懐古する女君

『いはでしのぶ』の一品宮は、その登場から理想的な容貌を付与されている。

> 御顔の色をかしげにうつろひて、少しかたはら臥しておはします御さまのうつぐしげさは、花はにほひ限りありて、えしもならびきこえさせずかし。
>
> （巻一　八頁）

二位中将の視点から、花（桜）以上の美しさとして認識されるのである。

同じことは、『夜の寝覚』の中の君（以下、寝覚の上）にも言える。

> むら雲のなかより望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、あさましく見おどろきたまひぬ。（中略）「竹取の翁の家にこそかぐや姫はありけれ」と見るにも、この程の様はなほめづらかなり。
>
> （巻一　二九～三〇頁）

『いはでしのぶ』論　―「昔」を懐古する一品宮

伊　勢　　　光*

Essay about "Ihadeshinobu"――The Archduchess who looks back upon the past

Hikaru ISE

One this essey tried to read "Ihadeshinobu" through an archduchess "Ipponnomiya". She's introduced by the beginning of a story, and her beauty is praised. It seems similar to "Yoru no nezame" where life on heroine. Nezamenoue. So this essay considers Ipponnomiya's originality through comparison with a heroine of "Nezame at night". I read and untied more achievement of something the "Ihadeshinobu" draws and the "Ihadeshinobu" from her originality. I think a similarity of two people is that I'm the peerless beauty who can compare both of two people to the moon. But they do the sex they don't desire. The sex they don't desire and marriage. And two people are common. By the point that both of two people look back upon the past not now, but before marriage.

But while Nezamenoue can't help living through "now", Ipponnomiya's consistent by the posture which looks back upon "the past". She tries to draw a hero into the world by the thing which looks back upon "the past" and makes them get married to the daughter. She returns her blood to Imperial Household as well as she plans to make the family happy. This family is the family she made with my old husband at "past". She lives through the story world as a female main character strong in a heart.

When comparing with Nezamenoue, I think that Ipponnnoiya is doing "priest" influences a sturdy life-style of Ipponnomiya big. "Ihadeshinobu" is drawing the world of the cold missing from which men and women choose a priest together. A story was invented. The refreshing female main character, Ipponnomiya who accomplishes her will. I argued that achievement of "Ihadeshinobu" beyond a story until before is there.

* 一般科目教室（人文社会科学系）

研究推進委員会

委員長　常光幸美（物質工学科）
委　員　加藤寛敬（機械工学科）
　　山本幸男（電気電子工学科）
　　野村保之（電子情報工学科）
　　坂元知里（物質工学科）
　　辻野和彦（環境都市工学科）
　　柳原祐治（一般科目教室(自然科学系)）
　　藤田卓郎（一般科目教室(人文社会科学系)）

福井工業高等専門学校　研究紀要　人文・社会科学　第51号

平成29年12月25日　印刷
平成29年12月25日　発行

編集兼
発行者　福井工業高等専門学校

福井県鯖江市下司町
ＴＥＬ（0778）62-1111（代）
ＦＡＸ（0778）62-2597

印刷所　㈲ワープロセンターＨＯＰＥ

福井県越前市東千福町21-4
ＴＥＬ（0778）24-1146
ＦＡＸ（0778）24-2339